

一世パイオニア

竹村義明

内山俊介



東京に於ける勉学時代

日本帝國海外施券

第八六九卷五號



山口縣豐浦郡植崎村大字久野
第三百三十九番地平民

内山俊介

明治十六年一月生

右ハ北米合衆國、以下餘白
赴クニ付通路故障ナク旅行セシノ且必要ノ保護扶助ヲ
與ヘラレン事ヲ其筋ノ諸官ニ希望ス

明治四十年五月廿七日

日本帝國外務大臣正三位勲等子爵林



所持人自署

内山俊介

東京府下付

日本政府発行旅券

このパスポートの裏面には横浜出港日(1907年7月10日)及びバンクーバー入港日(7月27日)の印がある。



1909年1月20日加州フレズノにて
(後に写真結婚のため使用)

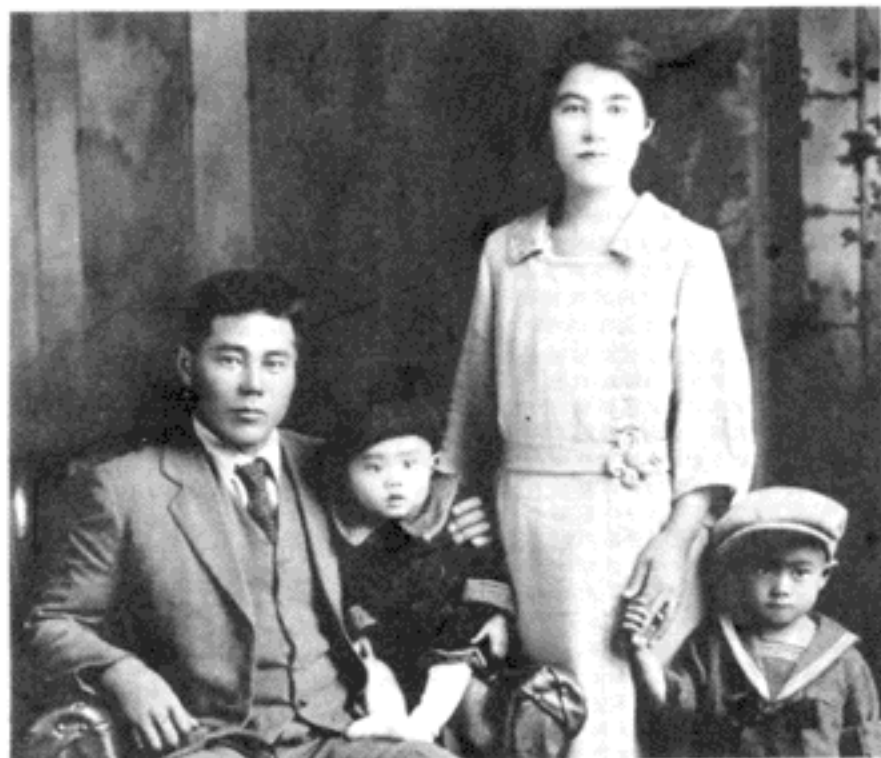


トシ 19才

1915年9月(結婚のため俊介に送った写真)



サンガーに於ける新婚時代
1916年



一家四人 1925年



日本訪問 1926年11月
トシの妹と共に



一家六人 1932年



内山一家 1938年



ヒラ転住所で俊介が作った小鳥
1943年



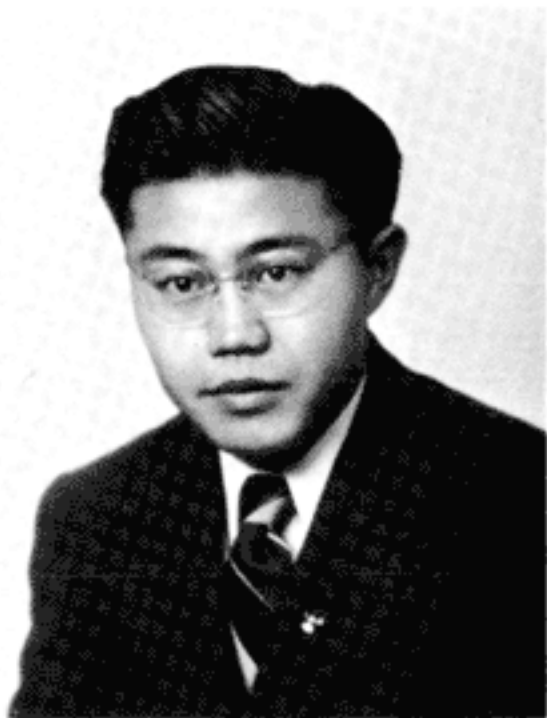
アリゾナ州ヒラ転住所の一部



転住所より帰還当時加州ファーラーにて



西医学一級司教免状授与記念
(前列中央は西勝造先生)



茂



幹雄

息子と娘
大学卒業写真



隆子と壽子



金婚記念 1966年



カナダ・バンクーバーの船上にて

1972年

(筆者撮影)



内山一家 1975年1月



米国仏教団開教總長辻顯隆師、トシ夫人、筆者
1973年



幹雄 一家



茂 一家



隆子一家



壽子一家

目次

第一章	生いたち	1
第二章	アメリカ大陸へ	9
第三章	開拓時代・前期	21
第四章	開拓時代・中期	42
第五章	開拓時代・後期	66
第六章	日米開戦	89

ご 挨拶	後記	第十章 挽	第九章 恵まれて	第八章 帰還再出発	第七章 ヒラ・リバー 転住所生活

	204	193	178	148	108

一世パイオニア

——内山俊介——

第一章 生いたち

—

内山俊介は一八八三年（明治十六年）一月十三日、山口県豊浦郡檜崎村大字久野にて父善太郎、母ヤツの長男として産ぶ声をあげた。家は農家の旧家であり、特別裕福ではなかったが、生活には困らなかつた。二人の姉と共に、俊介は両親の温かい愛情につゝ、まれすくすくと育つたが、思いがけなくも悲しい出来事が起つた。妹が生れてまもない一八八五年（明治十八年）一月二十五日、母ヤツが急病で死んでしまつた。二才の幼児にとつて、やさしい母が急にいなくなつてしまつて、どれほ

どきみしかつたことか。やがて父は再婚して二人の妹と弟が生まれ、七人の子供は新しい母親によって育てられた。もの心がつくにしが死んだ生母ヤツのことを想つては、涙を流す日も多かつた。さみしさをまぎらわすがごとく、勉強にはことのほか精を出した。

徳川家康から二百六十五年つづいた徳川幕府は、將軍慶喜が天皇に大政奉還をして終りをつげた。年号は慶応から明治、都は京都から東京（それまでは江戸）にかわり、新政府がスタートした。明治四年に廃藩置県が実施され、周防国と長門国が一つになり山口県となった。俊介の生れた長門は長州ともいわれるところで、萩の松下村塾の創設者であり、勤皇の士、吉田松陰で有名である。その影響によつてか山口県からは、木戸孝允（長）、高杉晋作（長）、毛利敬親（長）、井上馨（周）、大村益次郎（周）など明治維新の立役者となつた人物を輩出した。伊藤博文は周防の生れであつたが、長州萩に出て維新三傑の一人である木戸孝允に師事した人であ

る。俊介の生れた一八八三年に、ヨーロッパから外国の政治形態を視察してかえり（第一回欧米視察は明治四年——一八七一年で、この時はアメリカも訪問した。）初代の総理大臣（それまでは太政大臣という職名だった。）に就任したり、憲法の草案を作るなど明治政府の中心人物であった。

朝鮮（現在の韓国）に利害関係のある日本と清（今の中国）の両国は、朝鮮問題をめぐって意見が衝突し、一八九四年（明治二十七年）八月日清戦争が始まった。海軍は清国の北洋艦隊を黄海に壊滅し、陸軍は朝鮮北部から満州南部や遼東半島にいたるまで、無敵の進撃をつづけたので清国は講和を願ひ出た。陸軍の第一軍司令長官山県有朋や陸軍中将桂太郎は長州出身だった。講和会議が開かれたのは、俊介が小学校六年生を卒業し高等科に進んだばかりの頃だった。清国の全權代表季鴻章を相手に、伊藤博文総理と陸奥宗光外務大臣が日本全權として出席したが講和会議の場所は、樺崎村からわずか十五マイル（二十四キロ）はなれた下関が選ばれた。

一八九五年四月、いわゆる下関条約が結ばれ台湾、遼東半島、澎湖島が日本に割讓され、その上莫大な賠償金が清国から支払われた。明治維新以来、郷里山口の産んだ歴史に残る多くの偉人の伝記は、俊介少年の心に強く深い印象をきざみこんだ。

近くの檜崎尋常高等小学校（尋常科六年、高等科二年）を卒業してまもなく、内山青年の上にもまた新しい事態が生じ、十六才の時、亡母ヤツの実家に預けられて行き叔父夫婦と祖父母に育てられることになった。叔父夫婦に男の子がないので、ゆくゆくは養子にするつもりのようなだった。養家の田畑の耕作を手伝いつつも進取の気性に富む青年俊介は、旧来のやり方にあきたらず、何か新しいことをしたくてたまらなかつた。村でもやっていない除虫菊の栽培と杉苗の植林を思いつき、叔父にねだつて苗を九州に注文し、それが着くと「植える畑をかしてくれ。」と困らせたこともあつた。事業への意欲と度胸のよさは、すでにこの時芽生えていたかの如く

である。向うみずの冒険に思えて家の者は好かなかつたが、苗木はすでに来ていることではあるし、あまりの熱心にまけて、仕方なしに祖父の山に植えることを許してもらった。こんなことがあつてある晩、隣の部屋で「まだ若僧なのに肝っ玉が過ぎる。これから又何をしでかすか分らぬ。財産をつがすのがおそろしい。」と話を耳にした。山口の田舎は、俊介青年の夢をのばすには、ふさわしい土地ではなかつた。ここに二年いて、一九〇一年（明治三十四年）十八才の青年俊介は、村の祭りの日家出を決心して東京へ向つた。

二

東京での新しい生活が始まつた。向学の志に燃える内山青年は、好きな法律を勉強しようとして夜学に通い法科を学んだ。しかし家出の身では家からの支送りはなく、

生活費と学資をかせぐため、昼間は働かねばならなかった。仕事の種類は選ばなかった。明治維新以来、急激に近代産業が発展し、国力が増進した日本は、日清戦争でたやすく勝利をおさめ、受取った賠償金は主に軍備拡張につかわれた。このため軍需産業が華やかな時代であり、他の産業も景気はよく、仕事口は沢山あった。

一九〇四年（明治三十七年）二月には、世界一の大きな国ロシアを相手の日露戦争が始まった。俊介は綿密な性格を活かして、兵役本廠で戦争部品の整図の仕事をもらった。「杉苗が良く育ったから、お金を送ろうか。」と故郷から云ってきたこともあるが、独立心に富む内山青年は、これをことわった。

激戦のうちに迎えた翌年、陸軍大将大山巖総司令官と陸軍大将児玉源太郎総参謀長の統率下にある陸軍第三軍司令官乃木希典大将のひきいる第三軍による難攻不落を誇った旅順の陥落、（二月）、第一二三四連合軍による奉天占領（三月）、海軍中将東郷平八郎のちに元帥）司令長官のひきいる聯合艦隊の日本海々戦でのソ連太平洋

洋艦隊及びバルチック艦隊の撃滅（五月）、原口陸軍中將を司令官とする樺太攻撃軍による全島占領（七月）、などの報道に日本中は湧きあがった。兎玉、乃木両将軍は長州出身だった。講和は米国人ルーズベルト大統領の調停により米国人ポーツマスにて開かれ、全権委員として外務大臣小村寿太郎、駐米公使高平小五郎が出席した。日本は樺太の南半分（北緯五十度以南）と関東州の領土及び南満州の鉄道と炭坑の譲り渡しをうけた。（一九〇五年九月調印）

日露戦争がすんで整頓の仕事がなくなると、俊介はアルバイトに薬を売りつつ勉強をつづけた。法律のほかに英語を習おうと斎藤先生宅に夜通ったが、英語を習うと同時に外国のいろいろな事情をきき、若い胸は海外飛躍の夢にはずんだ。できれば大きな国、そして新しい国アメリカへ行きたいと思った。札幌農学校（今の北海道大学）初代教頭及び北海道開拓指導者として、明治初年にアメリカから来たウイリアム・S・クラークの遺した格言「少年よ、大志を抱け」（ボーイズ・ビー・ア

ンビシヤス）は、いやが上にも俊介のアメリカへの夢をかきたてた。

出費を儉約するため御飯二繕（二銭）とおかず一皿（一銭）を常食としていたが、時にはうどんですませたり、うなぎ屋の二階に下宿していた関係上、おいしい匂いだけで我慢したこともあった。一九〇七年までに渡航費として十分な三百円がたま

った。
俊介の海外渡航を決定的にしたのは、一九〇七年（明治四十年）四月八日父善太郎との死別であった。両親を失なった内山青年は渡航を固く決心した。父親の葬儀に参列して帰京すると、早速渡米の準備にとりかかった。郷里山口県小串（檜崎から六マイル）出身で衆議院議長や大臣にもなった政友会の大岡育造の実弟中央新聞社社長大岡力にお願いし、中央新聞通信員の肩書を得てパスポート（旅券）を申請した。ここに二十四才の青年内山俊介は同年（一九〇七年）七月十日、悲しみの中にも大志をいだいて横浜の港を後にしたのだった。

第二章 アメリカ大陸へ

—

太平洋は、その名に似ず波は高かった。船は一路バンクーバーを指して進み、祖国日本はだんだんとかすんで行く。いつの日にか再び祖国の土をふめるのか。世話になった内山家の人たちや親しかった友達との別れは、言葉で云い表わせないほどつらかった。安芸丸（日本郵船）のデッキに出て内山青年は深く考え込むのであった。あれほど固い決心はしてきたが、一人ぼっちになると無性に日本にもどりたかと思った。その上、これから行く未知の国への不安は胸をしめつける想いがした。

日本歴史をふりかえると、明治は徳川三百年の鎖国から海外に目を開き、日本の威信を世界にとどろかせた時代である。明治に生を受けた内山青年の海外雄飛の決心はくじけなかった。

不安と希望の交錯した十七日間が過ぎて、船は七月二十七日バンクーバーの港に着いた。大きな国とは聞いてはきたが、ここカナダはせまい日本にくらべると実際見た人だけに分る大きな国だった。「この大きな北米大陸、こここそ活動の地だ。

やるぞ」と心に誓った。この頃すでにこのバンクーバーには、和歌山県や滋賀県のほか中国、北九州地方から日本人が多く居住し、漁船や製材所や鉄道等で働いていた。この町に二、三日いて、泊った日本人経営の宿屋の主人から様子をきいたのち、俊介は目的地である北米合衆国（アメリカ）へ向って汽車に乗った。カナダへの旅券をもった日本移民の中には、貨物列車に乗ってアメリカへ密入国する青年も時々あるらしかったが、アメリカへの旅券をもっている俊介は堂々と客車に乗っての

国境越えだった。バンクーバーを出てから四時間ほどして、俊介は仲間と共にアメリカ西北部第一の都市シアトルの駅で降りた。

二

新聞社の通信員として渡米したものの、それは旅券下附のための肩書きであり大きな事業を夢みる内山青年には、それをつづける気持は全然なかった。船賃を払ったので東京で貯めたお金も残りはずかであり、資金を貯めるため到着して次の日から日本人周旋屋にたのみ、仕事をさがしにかかった。このワシントン州シアトルにも日本人移民が沢山来ていたが、外国人である日本人に与えられる仕事は景気が下火のせいもあって肉体労働に限られていた。東京で学んだ英語で白人と話ができ、また法律の知識があっても良い仕事はもらえなかった。

苦しい日々ひびの連続れんぞくだった。俊介しゅんすけはグレート・ノーザン(大北)鉄道てつどうやノーザンパシフィック(北太平洋)鉄道てつどうの線路修理せんろしゆりと敷設ふせつの人夫にんぶとして泥まみれになって働いた。慣れない激しい労働ろうどうで体からだは痛み、日本にほんよりは賃金ちんぎんはよかったものの大きな夢の實現じつげんは不可能ふかのかうにさえ思えたが、初心しんしんを貫ぬくべく齒はをくいしばってがんばった。

いつまでも同じ仕事しごとがあるわけではない。二ヶ月がつほどして俊介しゅんすけはブランケットケットを肩かたに仕事をさがし求めた。雨あめが多いここワシントン州しゅうは、エバーグリーンステート(常緑の州)と呼ばれる如く、木きがよく育ち林業りんぎやうが盛んである。内山青年うちやませいねんも山やまに入り大木たいぼくを倒し、そこにクリスマスツリーを栽培さいばいする仕事をみつけた。白人はくじんのボスの下したには、同じく血氣盛りの日本にほんからきた独身の若者わかものばかりがいた。米こめをたきキャベツの塩しほもみをおかずにがんばった。「わざわざここまで来なくても、日本にほんでもこの位仕事しごとをしたら成功せいこうするよ」と互たがいに慰め合った。南みなみのタコマの方ほうをみれば、レニ

ア山やまがくつきりとその雄姿ゆうしをみせていた。富士山ふじさんよりも少し高い高山こうざんでその形かたちも似にているので、日本にほん恋こいしいシアトル方面ほうめんの初期移住者しよきいじゆしやがタコマ富士ふじと呼よんでいたが、六年間ねんかんちうきう東京とうきうにいたとき晴はれた日には、ずっと富士山ふじさんをみてきた俊介しゆんすけにとって、レニア山さゐんは余計よけいに日本にほんを想おもい出ださせた。

秋あきから冬ふゆにかけて、キャスケード山脈さんみやくから吹きおろす風かぜはつめたい。テントの中で寝ねるのだが、朝あさ起きると頭あたまは霜しもで白しろくなっているひどい寒さむさだった。会社かいしやの金かねまわりがわるくなり働はたらいてもお金かねがもらえなくなつて、同僚どうりやうは一人去いり二人去ふたりりして、とうとうここが閉鎖へいさされる日ひが来た。最後さいごまで残のこつた内山青年うちやませいねんに、ボスは深ふかくあやまつて「この者ものはよく仕事しごとをする」と書かいた一枚いちまいのペーパーを手渡てわたした。お金かねは払はらつてもらわなかつたが、この信用証書しんようしゆしよを持って俊介しゆんすけは次の仕事しごと口くちを求もとめて、一九〇八年ねんはちまる春はる汽車きしやでワシントン州しゆんとうしゆ、オレゴン州おれごんしゆを通とおつてカリフォルニア州かりふおるにあしゆバカビルへと向むかつた。

ワシントン州は気候、風土共に日本に似た所も多かつたが、日本の本州、四国、九州、北海道を合わせたより大きいここカリフォルニア州はすっかりちがっていた。サクラメントの西三十マイルの所にあるこの町バカビルは、今でこそ人口二万五千人の町だが、当時はまだ小さな田舎町だった。でもバカビルは日本人が一八九〇年頃より集団的に白人農園に働いてきた土地であり、アメリカの日本人村という感じが強く、俊介がきた時にも白人より多い千五百人余りの日本の若者がこの地方にいて日本人町があつて十数軒の日本人店があつた。借地耕作をしている者もいたが、殆んどは白人経営の果樹園に賃金は一日一ドル位で働いていた。

俊介は農園にやとわれて、連日百度（日本の三十八度）を越す暑さの中で牧草の

アルファアルファや果樹園（梨畑、桃畑）の仕事に従事したが、なれない仕事である上に酷暑と激しい労働のため血をはいたことも一度ではなかった。しかし、広島県や山口県からの移民も多くいて、仕事のあと彼等と交す故郷の訛丸だしの会話は、何よりの慰めと励ましとなった。日本女性は、シアトルでは教えるほどしか見なかったが、ここでは仲間の中には日本から花嫁を迎える者もあった。二十六才の内山青年も、結婚のことは考えてはいたが、まだ結婚するだけの経済的余裕がなかった。お金のなる木はなかった。めざす目標はまだまだ遠い。

名も知らぬ遠き島より

流れ寄る椰子の実ひとつ

故郷の岸を離れて

汝はそも波に幾月

島崎藤村「椰子の実」

バカビルでは、わずか一夏をすごしただけだった。牧獲がすむと、季節労働者の日本の若者は、また仕事を求めて方々へちらばっていく。中加（中部カリフォルニア又は中部加州）は土地がよく肥え、その上水利に恵まれて加州農業の中心地である。日本人もすでに多く流れこみ、中加一の町フレスノには日本人料理屋だけでも十何軒もあると噂わさにきいたことがある。みんな日本人社会のニュースにはことのほか敏感だった。一九〇八年の暮、内山青年の足は中加に向かった。

フレスノから南西二十マイルの小さな町パレアにも、日本人が多く白人の農園に働いていた。広い中加の数ある町のなかで、内山青年が何故パレアを選んだか、その事情はわからない。住む家なきさすらいの人内山俊介は、まず大農園をもつ白人の家に家事手伝いの仕事を得て住み込んだ。

「シユンスケ」は呼びにくいと白人の主人が云うので「ジョージ」という英語の

名前をつけたのはこの頃だった。農園労働者の食事をつくるのが与えられた仕事で家の白人の女につきまともわれて困ったのも、この頃の出来事だった。しかし俊介は東京で英語を習った時から持っていた *Pushing to the front* という本を夜になると取り出して「これでいいのだろうか」と考えこむのだった。この本は夏目漱石の小説「坊っちゃん」にもでてくるプッシングツーズフロントという本の原本で一八九四年アメリカの随筆家マーデンが書いた本である。俊介が座右の書としてこの本は、性格の鍛練により困難をのりこえて成功に導く道を教える激励の書であった。「男は事業」を信条とする俊介青年は、今のままではいつまでたっても夢が達成できないと知り、まもなくこの家を出た。近くの堂本労働キャンプに移り、フルーツの苗木屋で仕事をもらい、人一倍働いた。お金も大分たまってきた。待ちに待った日がやってきた。せまい土地ではあるが土地を借り豚を飼うことにしたのだ。これまででは他人にやとわれて言いつけられた仕事をしてきたのだが、規模は小さくて

も自分のビジネスを始めることができたのだ。うれしくてたまらなかった。だが子豚が太るには時間もかかるし、数は少なく、売っても大したことはない。豚を飼いつつ、白人農園の葡萄とピーチ（桃）をもぎに通った。

夜になると、故郷への望郷の念とはげしい昼間の仕事の苦しきの吐け口を求め、火に集まる虫のように日本の若者たちはポケー（一頭立ての馬車）に乗り町の盛り場へ集まってくる。

兎追いしかの山、小鮎つりしかの川
夢は今もめぐりて、忘れがたき故郷

如何にいます父母、つつがなしや友垣
雨に風につけても、想いいづる故郷

志をはたして、いつの日にか帰らん

山は青き故郷、水は清き故郷

(小学校唱歌 故郷)

故郷に錦をかざろうと、大きな夢を抱いてきた若者達ばかりであったが、酒と女と博打にお金をつかい夢が遠ざかっていく人も多かった。他の若者たちと同じように、内山青年も大はやりだったシーコー、チーハー、バカツペ等のチャイナ博打をしたことがある。でも一回きりだった。支那人経営の賭博場へ行き、友達にお金をわたして代りにやってももらったが、運はなく簡単に負けてしまった。大金ではないが、汗を流して貯めた大事なお金がとられていくのを側に立って見ていた内山青年は、「博打はやめる」と決心した。

仕事をしてでも思うようにお金はたまらず、あせりの色濃い若者達の中には、娯楽

のためではなく、金もうけのためにこの支那博打に熱中して負けつづけ、一生独身で終ったり身をくずした人も多い。博折場経営の支那人にとって日本人はよい顧客であり、一日の終りには日本人から取ったお金を米袋に一杯つめこんで銀行に持って行ったそうだ。パレアにいた二年余りの間に、いろいろのことがあった。これらの経験を通して、ジョージ青年は人間的にも段々と成長していった。

第三章 開拓時代——前期——

一

パレアの北隣のサンガーに移ったのは、一九一一年（明治四十四年）の春で俊介が二十八才の時だった。アメリカに渡ってからこれまでの四年間は辛かったが、「石の上にも三年」の諺の通り辛棒と我慢をつづけてきた。アメリカの事情も大分わかってきた。コロンブスが一四九二年にアメリカ大陸を発見してから四百年余り、メイフラワー号で一六〇七年英国から最初の移民が来てから三百年しかたたない若いこの国には、日本にくらべるとまだまだチャンスが多かった。同じ日本からの移民

の中にも、成功している人もかなりいた。これが内山青年がここサンガアのダンプロ地方に移って、大きなことをしたかつた理由であつた。近くを流れるキングス河より低いため、提防が切れて洪水にあう危険のあるこの一帯を白人たちはダウン・ピロー地方と呼んでいたが、英語のよく分らない日本人一世の間ではダンプロ地方と呼ばれていた。

経済的に一人では不可能なので、三人の仲間（片岡、小川、坂本）と百四十エーカー（五十七町歩）の野菜畑をリース（借用）して、いろいろの野菜をつくりマーケットに出荷することにした。畑の一隅には柵を作り豚も飼つた。元気な四人は、粗末な掘つ建て小屋での生活にも不平も云わず黙々と働いた。

翌年になると、友人は三人其他の仕事をさがして出ていってしまったので、一人

でこの広い野菜畑をつづけることはできないので、全部牛馬の飼料にする牧草のアルファルファを植えた。放牧がしたかったのだ。明治天皇が崩御され明治から大正へとかわったこの年（一九一二年）内山青年は新しい友人二人と共同で、山も川もある千エーカー（四百町歩余り）の牧場をリースして牛飼いを始めた。

無鉄砲に思われるこの事業を、血気盛んな日本青年二人は冒険とは思わなかった。西部劇顔負けの、馬に乗り牛を追うカーボイの生活が始まったのである。しかし、この計画は順調に行かなかつた。せっかく太ってきた乳牛が、次から次へと死にだしたのである。仲間二人は逃げてしまった。牛のことをよく知っていると、同僚の言葉を信じて始めたのだが、実はよく知らなかつたのである。当時一頭三百ドルもする牛が死んでいくのだから、大きな損害であつた。

こんな大失敗にあつても、「良いと思つてしたことから」と後悔することなく、また仲間を責めることもなく再出発の道を思案する内山青年だった。千エーカーの土地年賦の支払いに窮し、放牧はあきらめ、再び百四十エーカーの土地で堅実にアルファルファを栽培することに決めた。

二

黒船に乗つて一八五三年と翌一八五四年に浦賀にやってきたペリー提督の率いるアメリカ船隊により、日本は鎖国の夢からさめ、一八五八年（安政五年）徳川幕府の大老、井伊直弼は、アメリカのタウンゼンド・ハリス総領事と日米修好条約を交した。そして一八六〇年、米國ワシントンにて条約の批准交換がされたが、米國への渡航を申し出る人はなく、六年後の一八六六年（慶應二年）に米國行きの旅券第

一号が初めて発行された。

米国情勢調査によると、日本人の米国在住者は、明治元年の一八六八年には六人、一八七〇年（明治三年）には五十五人、一八八〇年（明治十三年）には百四十八人が記録されている。一八九〇年（明治二十三年）には、かなりふえて、二千人を少し上まわる日本人がいた。しかし、これ以後日本より渡米する移民の数は急激にふえて、一九〇〇年（明治三十三年）には、アメリカ本土には三万四千人もの日本移民がいた。その後、一九二四年までひきつづいて続々と渡航したので、日本への引揚帰国者も少なかったが、差し引きすると毎年在米日本人はおよそ二千人程ふえていった。（一九〇五年までにハワイには七万六千人もの日本移民が渡航していたが、その中には一九〇七年米本土への転航が禁止されるまでに転航してきた人も多かった。）

これら日本移民の中には、いろいろな人がいた。すでに結婚していて妻と一緒に来

た人や、妻や子を日本においてきた人もあつた。また中には、作家永井荷風が明治三十六年（一九〇三年）米国へ遊学の途次、船の上で見た移民としてアメリカへ来る一人の白髪の老人が忘れられないと随筆「あめりか物語」に書いているように、アメリカでの重労働には不向きと思われる老人もいた。又、日本にとり残されていた妻や子が、アメリカから送つてきた船賃により「呼寄せ移民」としてやってきた人もあつた。

しかし、これらの人たちは比較的少なく、日本から海を渡つた移民の殆んどは、独身の青年であつた。異国での移民の生活は苦しく、結婚適齢期がきても日本女性をつれに行くだけの経済的余裕のある者は少なかった。ここに一九〇〇年代の初め頃から登場してきたのが、いわゆる写真結婚であつた。一九〇五年頃には、花嫁が来たというニュースをきくと、自転車やボギーにのつて、うらやましさと珍らしさの想いで見に出かけた日本男子も多かつた。

若者たちは、日本にいる両親や知人に手紙を書き、花嫁をさがしてもらった。結婚は第二の人生であり大事なことではあるが、双方とも写真だけをみて話をきめ、花嫁は一人で渡米してきたのだった。花嫁の渡航費は男持ちだが、それもやっと送れる人が多かった当時としては、これより他に日本女性を妻に迎える良い方法はなかった。

立派な家の前でとった写真をみて、写真花嫁はその家に住むのだと思つて渡米してみたたら、実は白人のボスの家だったという笑えぬ悲劇も実際あったことである。この写真結婚は、白人社会からみれば異常ではあったが、当時の日本は恋愛結婚はまれなことで見合い結婚や許嫁結婚がほとんどであり、この写真結婚に対して、今日思ふほどの抵抗はなかった。

かくして、日本女性性は続々と海を渡り、一九一〇年より一九二〇年（大正九年）に写真による渡米が禁止されるまで写真結婚全盛期を迎えた。サンフランシスコと

シアトル移民局の統計によると、一九一二年より一九二〇年の九年間に、写真結婚により渡米した日本女性は六九八八人を数えている。

三

内山トシは、一八九六年（明治二十九年）四月十三日に山口県豊浦郡豊東村田部にて、父笹尾吉左衛門、母シナの長女として出生した。一九一五年、俊介の写真をみたのは十九才の時だった。

「アメリカには親戚もないから、気兼ねをしなくてもよいし気候もよいから、行きたかったら行きなさい」と両親は云った。親はそう云ったものの、小さい時から体が弱かった彼女がまさかアメリカに行くとは思わなかったのに、「アメリカへ行きます」と云った時には、両親も家族の者も全く驚きたまげて、開けた口がふさがる

なかった。このかよわい娘のどこに、そんな氣力があるのかと不思議に思えたのであった。しかし、体は小さくても、人一倍、芯の強かったことを考慮すれば、この娘がアメリカ行きを決心したのも不思議ではなかった。

俊介の育った久野村とトシの田部村は、わづか三マイル（一里あまり）しか離れていない隣村であったが、年令も大分ちがうし会ったことはなかった。写真は見たが、実際に見たことのない人、見たことのない土地へ行くことは不安で氣持がゆるることもあったが、負けん氣の強いトシは心變えはしなかった。隣村の媒酌人福村氏を通して早速送った写真は、桃割れの美しい娘姿であった。

俊介青年より待っているとの便りもとどき、渡米の支度にとりかかったが、渡航手続きも順調に進み村の役場での内山家への入籍をすませ、家族（両親、妹、二人の弟）や親戚友人に見送られ、故郷を後にしたのは一九一六年（大正五年）春のこ

とだった。

大阪商船タコマ丸に乗船し、神戸まで来てくれた父親に別れを告げたのは四月八日だった。親との別れは、さすがにつらかった。一人になると、急にさみしさがこみあげてきた。そんな気持ちにかわりなく、船は横浜に寄港した後、白波をけたてて一路アメリカめざして進んで行った。一九一六年に写真結婚で渡米した日本女性には六百三十人あり、この船にもやはり十四、五人程乗っていて互いにはげましかった。

船は大揺れに揺れて船酔に苦しむ人もいたが、彼女は船酔もせず幸運だった。しかし今味っているさみしさと不安の気持は、堪えるに堪えられないような苦しみであつた。でも、もうすぐ自分の夫となる人に会えると思うと、シアトル入港の日が待ち遠しくてたまらなかつた。

予定通り四月二十九日五千マイルの航海を終えて、船はシアトルに入港した。迎えに来てくれているはずの俊介青年はどこにいるかとデッキからさがしたが、出迎え人は多くて見つからなかった。横浜をでてから久しぶりに土をふんだ。荒れた船旅から解放されたことよりも、花婿のいる国に着いたのだという喜びで胸が一杯になった。移民官の取り調べがあり、この時初めて二人は会った。

日本で写真をみた時思ったように、男らしい人だった。「思いきって来てよかった。この人となら」と、トシは心に思った。俊介も渡米九年目にして、良き伴侶を得てうれしかった。シアトル仏教会（現在のシアトル別院）でひっそりと結婚式を挙げ、夫婦となった二人は藤井ホテルで新婚の夜を迎えた。この時、俊介は三十三才、トシは二十才だった。

汽車の窓から見るレニア山やシヤスタ山はきれいだった。タコマ、ポートランド、オークランド、サクラメント、フレズノを通り、二日後に汽車は夜サンガの駅に

着いた。主人がたのんできたタクシーに乗ったが、サンガラの町はづれの家までの川に沿っての曲りくねった道は、トシにとってはとても心細く、これからの二人の前途を物語っているかの如くだった。

四

仕事がおくれたと、翌日から俊介は畑に出ていった。「仕事をなくしようとするより、仕事をこしらえようとするかの如く、二人前三人前働いた人です。」と近所に住んでいた人は当時をふりかえり述懐している。甘い新婚生活などある筈がなかった。

日本ではシャベル一つもったこともない妻トシも、仕事の鬼のようになり働く主人をみてじっとしてはいられない。朝は日の出より早い五時に起きて、木をストー

ブにもやし食事をつくった。それから、トラクターがまだ一般に普及していない時なので馬を飼っていたので、餌にヘイ（干し草）をやるのが、妻トシの朝の日課であつた。

大陸性気候のここ加州サンガーは、雪こそ降らないが冬は寒く、五月から十月までは連日百度（摂氏三十八度）近くになり、暑い日には百十度（四十三度）を越す長い夏がつづく。この寒さにも暑さにも負けず、二人は休むことなくがんばつた。夕方になると、トシは一足先にかえり水汲みをした。手押しポンプの水の出がわるく、七十回押ししてやっとバケツ一杯しかたまらないのだから、十頭の馬と露天風呂の水汲みは並大低のことではなかつた。

日も沈み、あたりが暗くなり、夕食の仕度ができ風呂がわく頃、俊介は疲れはてて帰ってくる。仕事の激しさと睡眠不足のため、目はいつも真赤にしていた。サンガーの町から五マイル離れたこの家には、電気はまだなく、ランプの灯りで食事

をした。扇風機も洗濯機もなく、原始生活に近かった。夕食後はまた何かと忙しく、毎晩十一時より早く寝ることはなかった。「中加時報」という週刊新聞を購読していたが、ゆつくり読む時間もない毎日だった。

トシは、日本では想像もしなかったこの異国の生活がやるせなかつた。夕食後、洗濯をすまし時間をみつければ故国の本をみて涙した。仕事のことで、頭が一杯の俊介は、相手になってくれなかつた。誰にもこの気持を話すことはできず、さみしさを読書にまぎらわした。

ある日、こんなことが起つた。羽仁もと子の連載記事「人さまさまの煩悶」が好きで、日本にいた時から読んでいた「婦人の友」を、トシはアメリカへ来てからも続けて購読していたのに、仕事で気が立っている俊介は相談もせず、「婦人の友」は理屈っぽいからと、フレスノの本屋（現在の香本商会の前身）へ行き、「主婦の友」に換えてしまったのだ。とても悲しく、殺生なことをする夫だと思つたが、本

当は仕事(しごと)がうまく思う(おも)うようにいかない(いかない)からだ(から)、当(あた)りやすい私(わたし)に当(あた)っている(い)るのだ(のだ)という夫(おとこ)の気持(きもち)が、トシにはよく分(わか)っていた(いた)。だから反(はん)対(たい)に、一(いっ)緒(しょ)にな(な)った時(とき)から「事(じ)業(ぎょう)は男(おとこ)の生(せい)命(めい)」と口(くち)ぐせのよう(よう)に云(い)ってが(が)んば(ば)っている(い)る夫(おとこ)が、い(い)じらし(らし)く(く)さえ感(かん)じ(じ)ら(ら)れた(た)。一(いっ)度(ど)家(いえ)を(を)出(で)た(た)か(か)ら(ら)に(に)は(は)今(いま)の生(せい)活(かつ)が苦(くる)しく(く)ても(も)、日(に)本(ほん)の親(おや)の所(ところ)へ(へ)か(か)え(え)ろ(ろ)う(う)とい(い)う泣(な)き言(こと)を、トシは一(いっ)度(ど)も口(くち)に(に)し(し)な(な)か(か)つ(つ)た。娘(むすめ)時(じ)代(だい)、月(げつ)給(きゅう)取(と)り(り)に(に)は(は)嫁(よめ)に(に)行(い)き(き)た(た)く(く)な(な)い(い)と思(おも)っ(つ)て(て)いた(いた)トシは、ど(ど)ん(ん)な(な)に苦(くる)しく(く)ても(も)今(いま)与(あた)え(え)ら(ら)れ(れ)て(て)い(い)る(る)この運(うん)命(めい)を夫(おとこ)と共(とも)に生(い)き(き)ぬ(ぬ)こ(こ)う(う)と誓(ちか)つ(つ)た。

一(いっ)九(じゅう)一(いち)四(し)年(ねん)に勃(ぼつ)発(はつ)した(した)第(だい)一(いち)次(じ)世(せ)界(かい)大(だい)戦(せん) (欧(おう)州(しゅう)戦(せん)争(そう)) に中(ちゅう)立(りつ)を(を)保(たも)つ(つ)て(て)いた(いた)ア(ア)メ(メ)リ(リ)カ(カ)は、農(のう)産(さん)物(ぶつ)の輸(ゆ)出(しゅつ)が振(ま)い景(けい)気(き)がよ(よ)か(か)つ(つ)た。一(いっ)九(じゅう)一(いち)七(しち)年(ねん)に連(れん)合(ごう)国(こく)側(がわ)に味(み)方(かた)して参(さん)戦(せん)し、一(いっ)九(じゅう)一(いち)八(はち)年(ねん)十(じゅう)一(いち)月(がつ)にド(ド)イ(イ)ツ(ツ)が降(こう)伏(ふく)して連(れん)合(ごう)国(こく)の勝(しょう)利(り)に帰(か)り(り)た(た)が、そ(そ)の(の)後(のち)もア(ア)メ(メ)リ(リ)カ(カ)の好(こう)景(けい)気(き)は続(つづ)いた(いた)。この経(けい)済(さい)状(じょう)勢(せい)に(に)加(くわ)えて(て)、三(さん)年(ねん)も雨(あめ)の少(すく)な(な)い(い)年(とし)が(が)つ(つ)づ(づ)き、つ(つ)く(く)つ(つ)た(た)ア(ア)ル(ル)フ(フ)ア(ア)ル(ル)フ(フ)ア(ア)の値(ね)段(だん)が(が)よ(よ)く(く)て、俊(しゅん)介(けい)は一(いっ)九(じゅう)一(いち)九(じゅう)年(ねん) (大(だい)正(しやう)八(はち)年(ねん)) に(に)は、二(に)千(せん)ド(ドル)

の預金（よきん）ができた。これではまだまだ足り（た）りなかつたが、不足分（ふそくぶん）はいろいろ工面（くめん）して、となりの土地（とち）三百（ひゃくご）エーカー（百二十町歩（ひゃくご）余（あま）り）を六万（む）ドル（一（い）エーカーにつき二百（ひゃく）ドル）で購（こう）入（にゅう）することにきめた。隣（となり）家のイタリヤ系（けい）移民（いみん）ラスコニー一家（いっか）とは親（おや）しい仲間（なかま）だったが、そのうちの五十五（ごじゅうご）エーカーを現（げん）金（きん）で買（か）つてくれたので、俊介（しゅんすけ）はそれをダウン（だ）ウン（down）ペイメント（最初の（さいしょの）支（し）払（はら）い）にして残（のこ）りは毎（まい）年（ねん）支（し）払（はら）うことにし、二百（ひゃくご）四（し）十五（じゅうご）エーカーを買（か）うことにした。

買（か）うといつても、アメリカ（アメリカ）の国（こく）籍（せき）のない自分（じぶん）たちでは買（か）えないので、パレ（パ）ア（ア）・ラ（ラ）ンド（ランド）・カン（カン）パ（パ）ニー（パレ（パ）ア（ア）土地（とち）会（かい）社（しゃ））の名（な）義（ぎ）を借（か）りて購（こう）入（にゅう）した。しかしながら、しばらくしてこの会（かい）社（しゃ）が（が）つぶれたので、友人（ゆうじん）の招（しょう）介（かい）でハ（ハ）ワイ（ワイ）生（う）まれの畑（はた）保（ほ）人（にん）氏（し）にた（た）の（の）み名（な）義（ぎ）を（を）書（か）き換（か）えた。

五

一八七三年（明治六年）発効の米国帰化法によると、自由白人とアフリカ人（奴隷として入米）及びその子孫に帰化権が与えられると記述されていたが、一八八二年（明治十五年）には、支那人は米国に帰化できないとの一項が附け加えられた。

かくの如く、この法律には日本人のことについては何も書いていないので、一九〇六年（明治三十九年）までに四百二十人の日本人がアメリカに帰化していた。

徳川幕府の軍艦咸臨丸が日本船として初めて太平洋横断に成功し、三十七日間の航海の末、サンフランシスコ（桑港）に入港したのは、一八六〇年（安政七年）、しかし三月に井伊大老が桜田門外で斬られて万延元年となる）だった。その船の指揮官勝海舟は、その著「航海別録」の中に、桑港にはすでに支那人街があり支那人の

多いことを記している。一八四八年にカリフォルニアのコロマ（サクラメントの東四十マイル）にゴールド（金）が見つかり、翌年の一八四九年以来われもわれもとアメリカ東部はもとより、世界中から一獲千金を夢みて加州めざしておしかけたゴールド・ラッシュの頃から、支那人は多く渡米して主に鉄道線路敷設工夫として使役されたから、日本人よりも米國移民の歴史は四十年も古い。

一八八二年の法律により支那人排斥に成功した米國は、一九〇五年頃から排斥の矢を日本人に向け出してきた。一九〇〇年には三万四千三百二十八人いた日本人は、一九一〇年（明治四十三年）には七万二千人、一九二〇年（大正九年）には十一万千人にと急激にふえたが、これに比例して排日運動は日毎に激しさを増していった。アメリカは、原住民であるインデアンをのぞけば世界各國の移民によってできあがっているが、数の上ではヨーロッパからの移民が圧倒的に多く、少しおくれて入ってきた東洋人は冷たい排斥の矢表に立たされた。遂に一九〇六年、アメリカ政府は

日本市民の帰化申請を拒否し、これによって以後日本人の米国市民権獲得の道は完全に閉ざされてしまった。

一九一三年（大正二年）には「加州外人土地法」が制定実施された。ロサンゼルスやサンフランシスコのような大きな都会では白人店で働いたり、白人相手の商売（多くは洗濯屋）をしたり、地方では日本人町のある町では日本人を相手に商売する人もあったが、在米日本人の半分以上は農業に従事していたのだから、この法律が日本社会に与えた打撃は大きかった。

「米国市民になれない外国人は、土地の取得、保有、遺贈、又は相続ができない。しかし三ヶ年以内は、農業の目的ならば土地を賃借（リース）することができる。」

この加州外人土地法は、一般に排日土地法とも呼ばれる通り、正式の名前こそ「外人」となっているけれども、実質は日本人目当てであることは一目瞭然だった。日本人に

は帰化権がなくて、米国市民になれなかつたからである。これまでに所有していた土地（一九一三年までに加州で約二万エーカー）を手離させ、これから新たに土地を購入することも禁止しようというのだ。表面上、日本人農業従事者に与えられた道は、賃働きをするか、土地を賃借するかに限られてしまった。これでもまだ不十分だと、一九二〇年（大正九年）には、加州一般投票の結果、第二次土地法が制定され、加州で日本人の歩合耕作と借地耕作さえも禁止されてしまった。日本人は白人の下で働けという訳である。かくの如き加州排日土地法は、太平洋沿岸諸州にも次第に波及して行つた。

しかし、このような一九一三年以来の不利な状態の中でも、自分の農園をすでに持っていたり、これから新たに経営したい日本人は弁護士の手を経て、アメリカ国籍のある人や土地会社（株主の半数以上は米国市民権のある二世で組織）の名義を借りて、農地を借用、保有、購入して耕作をつづけた。とはいへ、自由を旗じるし

とするこのアメリカに於て、日系農家が大きな制約と不便を受けたことは事実であった。米国籍のある人の名義を借りる場合、白人は信用できないので、この国生まれの二十一才の成年に達した二世（数は少なかった）の名義がよく使われた。俊介も、このたび購入した土地の名義は、自分の名前は使えないので、移民の歴史の古いハワイで生まれた畑氏にたのんで名義を借してもらった。

第四章 開拓時代 — 中期 —

—

空地の開墾が始まった。八十エーカーはすでに開かれていたが、残りの百六十五エーカーは、二十年間もパスチャー（牧場）だった所で、アルファアルファという牧草のほかにジョンソングラスやバーミューダグラスという悪い草が茂り、大きな根を張っていた。トラクターは高くて手がとどかなかつたし、たとえあつたとしても当時のトラクターでは、この荒地は受けつけなかつたであろう。

故郷の村の田畑を全部合わせた位の広大な土地の開拓には骨が折れた。溝（ディ

ツチ)の側には柳の木が並んでいるので、ダイナマイトをしかけて掘起さねばならなかった。また山あり谷ありの起伏の多いこの土地を、平坦にすることは並大抵のことではなかった。普通、畑をすく時には四頭の馬を使うのだが、この時には俊介は十頭つないで草を刈り土を掘り起した。刃がすぐ欠けるのでサンガーの町へ買いに行ったが、店の主人がびっくりするほど何回も取り換えた。家には、いつも十頭ばかりの馬を飼っていたが、勝気なトシも夫に負けるものかと、知人の馬を借りて四頭つないで鋤をひいたが、不思議なことに自分の家の馬はつづくのだが、他所からの馬はすぐへたばってしまうのだった。「内山さん所は、馬まで強い。」と評評だった。

トシは、小さい時から心臓が弱く、アメリカへ来た時には体重が八十九ポンド(四十キロ)しかなかったが、そのあと減りこそすれ増えることはなかった。しかし、日々の激しい労働により、普通の男の人以上の仕事ができる丈夫な体の持主になっ

ていた。二十代の女の手に思えぬトシの荒れた手をみて、俊介はよく「かわいそう
だのう」といたわった。俊介は、仕事のことになると長州人独特の強い根性をもつ
ていたが、その反面、妻を想うやさしい心も持ち合わせていた。トシが香本商店に
行って、元通り「婦人の友」をたのんできてもチェンジして来なさいとは云わな
った。

計画に狂いはなかった。長い間、牛の放牧に使われていたから土はよく肥えてい
て、八十エーカー近く植えつけたスピニッチ（ほうれん草）はびっくりするほどよ
くできた。キャナリー（罐詰工場）に出荷したのだが、他所のスピニッチより大き
さが随分ちがっていた。スピニッチのすんだ後には、ポテトを植えた。何とって
も広い土地なので、いつも五、六人、多い時には十人も働き人をやとっていたが、
野菜作りは手仕事が多くて手間がかかる上、開墾に追われて一年中休みはなかった。
しかし、どんなに忙しくても、俊介は興行事をみるのは大好きなので、都合をつ

けて見に行いった。素人芝居、活動写真、日本からの芝居や浪花節などがフレスノであるときくと、妻をつれ、まだ自動車を買えないのでボギーにのり、サンガアの駅まで行き、そのこのステープルに馬と馬車をあずけて、汽車でフレスノへ観に行き、その晩はフレスノで泊って（帰りの汽車がないので）翌日かえってくるという風流なものであった。（自動車と道路の進歩した現在では、サンガー・フレスノ間の往復は一時間もあれば十分だが、当時は馬車で行けば一日仕事だった。）活動写真（今の映画の前身）は無声映画なので、説明役の弁士がきていたが、松井翠民、河合太洋、在原狂夫、木村宗雄、桃中軒浪右衛門などのたくみな弁舌に胸は高鳴り、異国でのさみしさや仕事の辛さをしばしの間、忘れさせてくれた。娯楽に飢える日系人で、いつも大入りだった。俊介にとり、観劇は明日への仕事の燃活油のようなものだった。

一八九三年に東部で禁酒運動がおり酒場反対連盟（アンティサロンリーグ）が

組織されて猛烈な運動を展開した結果、この運動は全米に普及し遂に一九一九年に禁酒法が成立した。加州では、一九二〇年一月から酒類の販売が禁止された。中加といえぶどうというほど、この地方にはぶどう畑が多いが、禁酒となったので酒の原料となるワインぶどうの将来の見通しは良くないとみて、ひきぬいてフルーツに植えかえた人も多かった。

内山俊介が、ひきつづいて開墾した土地に時勢にさからってワインぶどうとテールぶどうを植えようと決めたのは、禁酒最高潮の一九二一年二月のことだった。俊介は、英語ができて白人の良い友達も多かったが、その中の一人の白人がすすめてくれたので、その人の言葉を信用して始めたのである。

結婚して五年にもなるのに、子供には恵まれなかった。日本から来た女の人は次から次へと子供を産み、トシと同じ頃に来た人でも二人や三人の子供がいたのに、どうしても子供ができなかった。

トシは、アメリカへ来てしばらくした時、ドイツ（灌漑用水路）の水をのんで腸チブスになり四十日間入院したことはあったが、ほかに病気をしたこともないし、俊介は膝の神経痛が痛み困ってはいたものの、寝込んだことは一度もなかった。でも、子宝には縁が遠かった。もしかすると、トシが働きすぎで体に無理をしていたのかもしれない。二人とも、事業の基盤が少しできた今、子供のないのはさみしく、他の人の子供をみるとうらやましくてたまらなかった。

うれしいニュースが訪れた。ぶどうの苗木を植え終った一九二一年四月のことである。「どうやら妊娠したらしい」という妻の言葉をきいて、夫の俊介は小おどりしてよろこんだ。苗木の水やりの他に、ぶどうができるまでの三年間の生活のため

今まで通りキヤナリースピニツチを主とする野菜作りに忙しかったが、生まれてくる子供のことを思うと今までより仕事に張り合いがあり、精がでた。育ちゆくぶどぐと共に、トシのお腹の子もだんだんと大きくなっていった。働かなくてもよいと云われていたが、トシは体をいたわりつつ無理のない程度に畑に出て、夫を手伝った。

幸運は幸運を呼ぶものである。スピニツチを三月に収穫したあと、同じ畑にポテト（じゃがいも）をつくることにし、種物屋から一貨車（十三トン）の種芋を買って植えた。よくできた上に、値段が嘘のように良かった。どこかに被害があり不作だったのだろう。大きなサック（一袋）が一ドル五十セントから二ドル位の筍なのに、この年は五ドルに売れたので三万ドルほどもうかった。土地を買って三年目の俊介にとり、この思いがけない大きな収入は、これからの土地代支払いとパイプ敷

設などの農園改良費に非常な援けとなった。

今までは盆も正月もあつたものではなかったが、一九二二年（大正十一年）の元旦は、今までになくめでたいお正月であつた。妻はまだ産気づいてはいなかったが、俊介は一九一〇年秋にアメリカへ来て初めて買った自慢のフォード自動車に妻をのせ、フレスノの三浦産院へ向つた。経済的に苦しい人は、日本人の産婆さん（中には男の産婆もいた）に家に来てもらう人が多かつたが、俊介は少し余裕ができていたのだ。それからもう一つの理由は、仕事に追われている俊介は妻を産院にあづけておけば、安心して仕事がつづけられるという計算があつたのである。

入院して二週間近い一月十五日、玉のような男の子が産まれた。妻のトシは見せなくてたまらなかつたが、仕事に忙しい俊介が子供を見に来たのは生後一週間後だつた。「幹がすっかりしてないとだめ」だからといって、幹雄と命名した。二人は内山二世の誕生を心から喜んだ。

グツグツと炊いたスピニッチは、体（からだ）にわるいことが分（わか）って売（う）れなくなり、罐詰（かんじつ）会社（かいしゃ）に出荷（しゅっか）していたスピニッチの値段（ねだん）が下（さ）ってきたので、ポテト、人参（じんじん）、キャベツ等（ら）の野菜（やさい）に植（う）えかえた。俊介（しゅんすけ）は果樹（かじゆ）が好き（す）きなので、沢山（たきさん）はなかつたが売（う）れ残（のこ）りのプラム（酢桃（すもも））やピーチ（桃（もも））の苗木（なえぎ）を買（か）ってきて、新（あたら）しく開墾（かいこん）した土地（とち）に植（う）えはじめたのもこの年（とし）（一九二二年（にんねん））である。

幹雄（みさお）が一才（さい）の誕生（たんにん）日（ひ）がすぎて、ようやくパパと云（い）えるようになった頃（ころ）である。俊介（しゅんすけ）は、急性（きゅうせい）盲腸炎（もうちやうえん）になり盲腸（もうちやう）が破裂（はれつ）（ラブチュア）してしまつた。サンガーの病院（びやういん）に運（は）ねられたが、土地（とち）の借金（きんぐ）も多く、妻（さい）子（し）のある身（み）の俊介（しゅんすけ）は、遺言（いごん）状（じやう）まで書（か）いて手術（しゆじゆ）をした。手術（しゆじゆ）は成功（せいこう）したが、悪性（あくせい）の盲腸炎（もうちやうえん）だったので、二週（にしゅう）間（かん）も入院（にゅういん）した。命（いのち）拾（ひろ）いをしたパパ俊介（しゅんすけ）は、このことがあつてから従前（じゆぜん）のはげしい気性（きせう）がやはらぎ、妻（つま）を驚（おど）かせた。近（ちか）くにありながら、行（い）つたことがなかつたヨセミテ国立公園（こくりつこうえん）へ、俊介（しゅんすけ）はこ

の夏、初めて妻と幹雄を三泊旅行につれて行った。

世間ではぶどうをやめようという時にぶどうを植えてから三年目の一九三三年は、初めてぶどうのできる年だった。いくら禁酒の法律ができて、酒なしですごせるはずはなく、店には酒は売っていないが、酒を造る材料は売ってはあったので、酒を密醸する人は多かつたし、外国への輸出も従前通りつづいていた。需要はかわらないのに、生産が少なくなったのだから、ぶどうの値段が良いのは当り前である。十月にぶどうを収穫したが、ぶどう酒の原料となるアラカンテという種類のワインぶどうの値段は良かった。しかし、テーブルぶどうは第一次世界大戦による好景気も下火になり値段がわるく、償算が合わないので、テーブルぶどう畑八十一エーカーを売ってしまった。

長く子宝に恵まれなかったのに、長男にひきつづいて二年目の一九二四年（大正十三年）一月十二日には、また男の子が生まれた。隣の九州人の西川さんが、「幹

雄の次は、茂でないとだめ。」と云ったので、名前は茂とつけた。生まれた時から、とても元氣な子だった。

三

アメリカへ移民としてきた日本人は、誰もがアメリカやハワイから帰ってきた人の誇張した話を信じて、「三年がんばれば帰ってから一生寝て暮せるから、金のある木のある国へしばらくでかけてきます。」と、案外物事をたやすく考えて来た人が多かった。

しかし、聞いてきたこととは丸つきりちがって、来てみれば金のある木はどこにあるやら、激しい労働に明け暮れる苦闘の連続だった。三年が五年、五年が十年となり、願いの成就是、無情にも反対に遠ざかっていくかの如くだった。その上、

日系人の心を悩ますしつこい日本人排斥の空気は根強くはびこり、少しも衰える様子を見せなかった。

日露戦争が始まった当時、日本に対してアメリカは友好的で一九〇五年ニューハンプシャー州ポートマスにてひらかれた日露講和会議には、セオドア・ルーズベルト大統領が仲に入ってくれた程だった。しかし、それから以後の日米関係の悪化と共に、日系人に対する感情は日毎に冷たくなり、一九一三年の加州外人土地法、一九二〇年の第二次土地法と写真結婚による日本人入米禁止法など、次々と日系人にとり不利な法律が作られて行った。そして茂の生まれた一九二四年には、「米国新移民法」が制定されて、日本人は政府官吏、旅行者、宗教家、大学教授、留学生、国際商人、及び再入国者以外は入国を禁止され、ここに同年七月一日以降、日本からの一般移民渡米の道は、再入国者をのぞいて完全にとざされてしまった。

米国民移局の統計によると、日本人移民の一九二一年から一九二四年までの入国

者数は次の通りである。

一九二一年 七八七八人

一九二二年 六七一六人

一九二三年 五八〇九人

一九二四年 七二一七人

このように毎年五千人をこえていた移民は、一九二四年七月の法律の影響により、

一九二五年 六八二人

一九二五年 五九八人

とガタ下りしてしまった。これら六百人前後の人たちの殆んどは、この移民法発効前に渡米してきて日本を訪問していた再入国移民であり、この国への日本からの新しい移民は、宗教家や教育者などのごくわずかな人に限られてしまった。

写婚が禁止されて以来、日本へ妻をもらいに訪日する若者も毎年沢山いたが、こ

の法律により、たとえ訪日して結婚しても妻はアメリカへ来ることは許されなくなり、日本女性と結婚目的の日本行きは後を絶った。二世の女性はまだ殆んどが子供であり、結婚するには若すぎるので、結婚適齢期はすぎても結婚相手の日本女性のない独身の一世男子はあわれだった。

アメリカ生活に幻滅を感じて、日本に引き揚げる人も多く、日本の故郷訪問に行く人と合わせると、出国手続きをしてアメリカを出た日本移民の数は、一九二四年二二二〇人、一九二五年一一七〇人、一九二六年一二〇一人をかぞえている。

このような両国の関係を微妙に反映した排日の空気の強いアメリカで、内山一家も日本人なるが故の、故なき排斥により嫌なことも何度か体験した。それに加えて嫌だったのは、日本人仲間から「出る釘は打たれる」という島国根性的妬みだった。

四

一九二五年秋のことである。「橋の上で、弁護士に畑を全部売ってくれるよう、たのんできた。日本へ帰ろう。」と家にもどった俊介は妻に云った。

テーブルぶどうの相場がわるく、農園経営がむつかしくなってきた時でもあり、十年間支払いの土地年賦は、七年間払い込んだから、二百四十五エーカーの土地を六万弗で売れば、手元に四・五万弗は残るから日本に引きあげてかえろうというわけである。しかしながら、妻に話した後、何かじつと考えていた俊介は、「やっぱり売らない。」と家をとび出し、ことわりに出かけた。

移民と云えば、永住の地としてこのアメリカを選び渡航したようにひびくが、ヨ

「ロツパやアフリカの移民と異なり、日本から移民のパスポートを持って来た人の殆どは、「一旗あげて故郷に錦をかざろう」とか、「ひともうけして日本にかえろう」と云う考えを持っていたので、移民と云うより出稼と云う方が適切だった。俊介もそう思ったこともあったが、家族をもち、事業が軌道に乗るに従い、大きな夢を持つ俊介の日本への引揚は、だんだんと影をうすめていった。

二年前売った八十五エーカーのテーブルぶどう畑は、買主が払い込み不可能でもどしてきたので再び買いうけ、ゆくゆくは果樹園にすることにした。一九二二年に植えた桃の木は随分大きくなり、この年初めてとれ出した。わずかの場所ではあるが念願の果樹園が出来上がった。

一九二六年のブドウの取り入れの終わった頃である。毎日に可愛さを増して来た二人の子供を故郷の家の兄弟や妻の親たちに見せたいと思ったのだらう俊介は急に「すぐ日本に行こう」と、云い出した。急いでわずか十日で仕度をして、一家四人で春

洋丸に乗り、なつかしい祖国をめざし、サンフランシスコを出たのは一九二六年（大正十五年）十月十二日のことだった。トシは第三番目の子供がお腹にいたが、初めて船にのりはしやぎまわる息子たちや、結婚以来初めて仕事から解放された夫の姿を見てうれしく、船酔もしなかった。

俊介は十九年ぶりに、トシは十年ぶりになつかしのふるさとの土をふんだ。涙の対面をし、交すことばはとぎれがちだった。親、兄弟、みんなよろこんでくれた。俊介とトシは、今まで辛棒した甲斐があったとよろこんだ。あれほど夢に見たふるさとに、今こうして帰っていることが、夢のように思えた。すぎ去った歲月のためみんな年をとったが、互の情愛は少しもかわっていないかった。

ふるさとにはありがたきかな

ふるさとの山に向かいて云うことなし

(石川啄木)

久野村の内山の実家をたずね、俊介の両親のお墓まいりをすますと、四人は田部の村のトシの実家におちついた。トシは久しぶりに日本髪を結び、和服でくつろいだ。

床の間の障子をこわしたり、畳をいためたりする、いたずら盛りの幹雄と茂を、トシの両親はかわいくて仕方がないようだった。家は金物屋をしていたが、幹雄が店の品物を近所の子供にあげたのだろう、その子供の親が返しに来たこともあったが、トシの親は幹雄をおこりもしなかった。

帰って間もなくトシの妹が「お母さんは、あなたたちの帰りを首を長くして待っておられたのよ。あれほど会いたがっておられたのだから、又アメリカへ行ってしまったら、どれほど悲しまれるか知れないよ。」と云った。親のことは忘れたことは

なかったが、自分が思っている以上に、思っていてくれた母の心こころにふれ、トシはうれし涙なみだにくれるのだった。やがてやってくる別離べつりの悲かなしみを思うとやりきれなかったが、今はそれを考えないことにして、ただ再会さいかいのよろこびにひたった。

大正天皇崩御たいしやうてんのうほうぎよの悲かなしいニュースのあった（十二月二十五日じふごにち）この年の冬は特に寒かった。持病じびょうの神経痛しんけいづうをもつ俊介しゅんすけには、湿気しつかけの多い日本にほんの冬は特にこたえた。九州きゅうしゅうの別府温泉べつふおんせんにも行ったが、ひざの痛みはとれなかった。その上、今まで仕事しごとになれなかった体からだは、仕事しごとのない今いま、かえって体からだがつかれ、「たたみの上うへではねられない。」と云いい出した。

神経痛しんけいづうや、ベッドのない日本にほんのことよりも、アメリカの農園のうえんのことが気きにかかって仕方しかたがなかったのだ。

久野と田部を往來している中に一ヶ月がたち、一九二七年（昭和二年）のお正月になった。茂の三才の誕生日と幹雄の五才の誕生日を祝ってもらった頃である。俊介の気持を察したのだろうか。「事業をしておられるのだから、おくれたらいいから、もう帰られたらよいでしょう。」と、トシの母が云った。つらくて二人の口から云い出せなかった別れの言葉を母の方から云ってくれたので帰ることにした。船便を待つて、二月二十七日出帆の天洋丸に乗船し再びなつかしの故郷を後にした。

五

四ヶ月半も留守をし、心配していたが、その間土井正一青年がよく面倒をみてくれたおかげで、農園は異常なく、三月中旬なので桃の花はきれいに咲いていた。再び忙しい生活が始まった。トシは出産が近いので、無理は出来なかったが、俊介はアメ

リカに帰ったので、水を得た魚の如く再び活気を取りもどした。

四月二十日（一九二七年）隆子が生まれた。初めての女の子である。故郷の人たちに見てもらいたかった。リンドバークがニューヨークからパリまで、大西洋単独横断飛行に成功し全米をわかせたのは、隆子が生まれて丁度一ヶ月後だった。

ぶどう畑全部にフルーツを植えるのなら、念願の果樹園は四年もすればできるのだが、収穫までの四年間の費用も要るから、他のものを作らねばならないし、店から売れ残っているだけの苗木を毎年少しづつ植えるのだから、畑には野菜、ぶどう、フルーツが雑居している。野菜作りのほか、ぶどうの芽かきとつるきり、フルーツの苗木植え、芽つき、芽かき等連日目のまわる忙しさだった。

「友達(ともだち)は仕事(しごと)をよくする人(ひと)を持(も)て。」と、自分(じぶん)の子供(こども)にも云(い)っていたごとく、俊介(しゅんすけ)は仕事(しごと)には厳格(げんかく)だった。今(いま)までの働(はたら)き人(ひと)の中(なか)には、なまける人(ひと)もいたが、俊介(しゅんすけ)の氣(き)持(も)ちを分(わ)かってくれて、よく働(はたら)く人(ひと)ばかり残(のこ)っていた。この点(てん)、俊介(しゅんすけ)は幸運(こううん)だった。毎日(まいにち)のはげしい労働(ろうどん)にも精(せい)一杯(いぱい)働(はたら)いてくれたし、フロスト(しも)がくるかもしれな(い)ときくと、朝(あさ)二時(じ)から起(お)きて、いやな顔(かお)もせず(に)ぶどう畑(はたけ)に、古(ふる)タイヤを並(なら)べてもやしてくれ(た)たこともあ(っ)た。就(た)働(ら)者(しや)は、日(に)本(ほん)人(じん)の他(ほか)に白(はく)人(じん)やメキシコ人(じん)やインデア(ン)ンもいる国(こく)際(さい)色(しき)豊(ゆた)かなもの(だ)った。

幹雄(きんゆう)が学(がく)校(こう)へ行(い)き出(だ)した。小(しょう)学(がく)校(こう)は家(いえ)から三(さん)マイルはなれていて、スクールバスのない時(じ)代(だい)な(の)で、俊介(しゅんすけ)が自(じ)動(どう)車(しゃ)で毎(まい)朝(あさ)つれて行(い)っていた。日(に)躍(やく)日(び)にはサンガー日(に)本(ほん)語(ご)学(がく)校(こう)にも通(か)った。その年(とし)(一九二八年(ねん))の秋(あき)、俊介(しゅんすけ)が農(のう)産(さん)物(ぶつ)を出(しゅっ)荷(か)しているニユーヨークの市(いち)場(ば)視(し)察(さつ)に、二週(ふたしゅう)間(かん)行(い)くとい(う)ので、トシは運(うん)転(てん)免(めん)許(きょ)(ドライバ-

ライセンス）をとり、幹雄の送り迎えと畑の仕事をしきついで。トシはこれから五、六年して長女の隆子が、「ママのドライブはあぶないからやめて。」と、云うまで車を使った。

この年の暮頃、ハワイに來ている山口県出身の人が本を出版する計画を立てアメリカに渡り、同県人の俊介のところへも通知通り、案内人と一緒にたずねてきて、出版資金寄附を頼んだが「もし寄附をしていただいたら、貴方の名前が本に出て大變名譽なことですから。」と、云う言葉が気に入らず、少し援助しようとする気持をくつがえして、一銭もあげずに追い帰してしまった。忙しい時ではあったが、俊介の性格をよく表わしたエピソードだった。

第五章 開拓時代——後期——

一

一九二九年がやってきた。トシは今まで三人の子供が生まれた三浦産院は三浦夫人日本帰国のためなくなっていたので、フレスノの江田産院で一月六日寿子を出産した。娘の誕生で、めでたくスタートしたこの年は、次から次へと大事件が突発した。

五月頃のことである。五つになった茂がおつかいに乳牛を飼っている隣家へミルクを買いに行く途中つまづいて倒れ、手に持っていたピンがわれて、顔中血まみれ

になり帰つてきた。サンガーの病院で傷口を縫ってもらったが傷口が癒えてからみれば、うまくつき合わさっていなかった。わが子の顔がこれではかわいそうだと、畑の仕事もかまわずに、サンフランシスコによい医者がいるときいた俊介は、茂をつれて桑港に行きドイツ人病院（ジャーマン・ハスピタル）へ二週間入院させて整形手術をしてもらった。小さい時、耳に火傷をしてつらい経験を味わってきた俊介は、このたびの息子のケガを、なおるものなら、どれだけ費用がかかってもなおしたいと、真剣そのものだった。

入院二週間後に俊介は茂を迎えに来た。汽車にのるため、フェリーボート（渡し船）でゴールデンゲート湾を渡り、オークランドの駅についたが、手術の成功をよろこんであわてたためか、俊介は病院から茂はつれて来たが、スーツケースをおき忘れてきたのに気がついた。駅の人に茂をあづけて、サンフランシスコにひきかえした。渡し船で往復して忘れ物をもって駅にかえった時には、もうすっかりあたり

は暗くなっていた。係りの人にきいたら、支那人らしい人がサンフランシスコの方へつれていったと云う返事だった。俊介は警察や日本人会事務所に連絡するかたわら、駅の構内と汽車のすみずみや支那人街をかけずりまわり、一晚中必死になつて行方不明の息子をさがし求めた。人身売買団にさらわれたのではないかとも思つた。茂は、次の日の朝無事に俊介のもとにかえつて来た。夜になるのに駅で一人で待っている茂を、迷い子と思いかわいそうに思つたのだろうか。英語も日本語もわからない支那人が、「行くのはいやだ」と、いう茂を、チャイナタウンにつれていったのだった。日本人の子供であることがわかると、茂は、日本人の家につれていかれたが、そこで一晚泊してもらい、翌朝日本人会に連絡があり見つけたのだ。悲劇になりかねなかつたこの出来事が、ハッピーエンドになつたので、家に帰つた俊介は、誇らしげに一部始終を妻に話すのだった。

八月四日は、日曜日で日本からの芝居があるというので、夕方から内山夫婦は、子供をつれてフレスノの日本劇場へ見物に来ていたが、「内山さん、大変、大変。畑さんが今日、パラスキの温泉の近くの川で、岩からすべり落ちてみつかからない。」と、知人の三上氏が、知らせてくれた。畑保人氏は一九一九年に土地を買った時から、名儀をかしてもらっている人である。俊介は、すぐさま川へ行き、カンテラ・ランプをともしで一晩中さがし求めた。悲しい悲しいお葬式がすぎた。

長男の幹雄は、まだ七才の未成年なので、土地はこの国生まれの二世、原正一氏の名儀にしてもらった。土地の名儀の心配はなくなったが、俊介は、自分が困っている時、心よくひきうけてくれた畑氏の御恩を忘れはしなかった。思いがけなく主人を失い、途方にくれている義子未亡人と、二人の幼児、（五才の男児忠と、二才半の女兒照枝）に自分の家のすぐ隣の家をあげて提供した。俊介はトシと共に、新しく来た子供を、自分の子供同様に育てようと、話し合った。内山の子供たちも

新しい兄弟ができたかの如く、日毎に親しみを増していった。

「あなたはまだ若いのだから、結婚の申し込みがあつたら結婚しなさい。子供をおいていった方がよい時には、私が引きとつてやるから心配はしなさんな。」と、俊介が云つたこともあるが、義子夫人は再婚はせず、内山農園にとどまつた。

二

第一次世界大戦により、世界各国は、異常な好景気につつまれていたが、一九一八年戦争終了と共に、下り坂に向つていった。多大の戦債をかかえこんだ欧州各国は、一九二五年頃より、経済不況に陥つた。一九二七年には、日本にも金融恐慌がおそい不景気風が吹きまくっていた。このような世界の経済情勢にもかかわらず、アメリカのみは、最後まで繁栄を持続していたが、世界的不況の波には、こらえき

れず、この年（一九二九年・昭和四年）十月、突如ニューヨーク株式市場に未曾有の大暴落が生じ、恐慌（大不況）に突入した。証券会社や銀行の倒産が相つぎ、工場閉鎖や低賃金による失業者や生活困窮者が全米に及んだ。アメリカに於けるこの不況は、農産物の過剰が、糸口であったことを考えると、農家に与える影響の大きさが理解できる。俊介は、翌年の農作物の値段はどうなるかと憂えた。

これでもまだかとはばかり、不景気で暗くなっている心を、よけいに暗くする悲しい出来事が起った。十二月三十日、トシの母シナが死んだのである。日本から母死去の電報が来た時、トシは正月の用意をしていたが、突然の母の死（心臓マヒ）は悲しく、楽しかるべき新年（一九三〇年）を迎えても、やさしかった母のことが、臉に浮び、こらえても、こらえても涙は、とめどなく頬をつたった。

三

不景気で金まわりはわるいので、収穫期をむかえたが、予想通り、作物の値段はわるかった。フルーツやぶどうは、生活必需品でなく、なくてもすこせるものだから、不景気の風あたりを、まともに受けた。しかし思ったより、サンタローサ種のプラムの値段が、わるくならなかったこと、禁酒のために、ワインぶどうの価格が、あまり下らなかつたこと、他の産業の労働者と同じく、農園労働者に支払う賃金も安くなり、一時間十セント乃至十五セント位に下つたこと、及び十年間の土地年賦支払いが前の年でなくなつていたこと、等の理由で、俊介にとって、不況は他のほとんどの人たちにくらべると、それほどこたえなかつた。でも、こんな時にはどんなことが起るか分らぬと、ぜいたくをいましめ、トシが夜なべをして、つぎを当て

た靴下と服を身につけた子供たちを眺めては、「今年も又、子供に何も買ってやれんね。」と、二人は話し合った。九月から茂も一年生になったが、兄と一緒に、文句も云わずつぎの当たったパンツ（ズボン）をはき、学校通った。

一家六人の他に、十人程の働き人とその家族を、これからどうして支えればよいだろうか。ピーチや、テーブルぶどうの値段はわるいが、収穫期には、七十人も臨時に季節労働者をやとわねば収穫できないのだから、俊介は不景気に際して、対策を考えつづけた。

三月（一九三一年）が来たが、不景気はよくなるどころか、反対にますます深刻さを加えていた。フルーツの苗木を植えるのは、一月か二月が季節であり、植える人は、殆ど植え終っていた。俊介に一つの考えが浮んだのである。サンガールの金川商店へ行き、いつもの年と同じく、売れ残りのフルーツの苗木を、残っているだけ

全部安く仕入れてきた。そして、それをぶどうの間に植えつけた。少し大きくなれば、芽つぎをして、好きな種類のフルーツを栽培するつもりだから、植える木はどんな種類でもかまわず、どんどん植えた。

ぶどうの間にフルーツの木を植えたのは、今まで誰もやったことがなく、俊介が初めてだった。三年程してフルーツの木が大きくなれば、ぶどうをひきぬいてしまい、果樹園にかえようという算段である。非常な商才が、うかがわれる。

銀行はあっても、日本人にはお金をかしてくれないのだから、よほど経費を節約しなくては、農園の経営は容易ではなかった。農耕機械道具、家畜の飼料、働き人の賃金、肥料等の出費は大きく、その上不景気の時であるから、いくら大きくやっけていても、人並にやっていたのでは成功は出来ない。俊介は、新しいアイデアと激しい労働で、この苦境を乗りきり、着々と規模を広げていった。

妻のトシも、命がけて精魂を事業にうちこんでいる夫の姿をみて、他の子供を小

さい時ときしたように、かわいいそうだが、手てのかかる隆子たかこと寿子ひさこは家いえに置おき、かぎをか
けて、毎日まいにち畑はたけに出でた。「大おほきな声こゑで泣ないでいるよ。」と、隣となりの人ひとが言いいに來きてくれた
こともしばしばあつた。幹雄たかおと茂しげは、まだ子こ供どもなのに、母はは親おやの側そばで一いっ生せい県けん命めい手て伝つた
た。中なか加かの夏なつは長ながい。しかも、殆ほとど連れん日じつ百ひゃく度ど（華かし氏し）を越こす暑あつさがつづく。でも、
「夏なつは暑あついものだ。暑あついから木きが育そだち、シユガ―（甘かん味み）がつく。」と、俊しゅん介けいも、夏なつ
の暑あつさをものともせず、がんばつた。人にん間げんはどんなに困こまつても、やらうと思おもえばや
れるものだ。見み栄えをはらず、ボろを着きて、粗そ食じきに甘あまんじ、農のう園えんの必ひつ需じゅ品ひん以い外がは、新あら
しいものは何なにも買かわず、内うち山やま一いっ家かは辛しん棒ぼうした。

四

一九三二年ねんの収しゅう獲かくがすんだ頃ころ、隣となりの七しち十じゅうエーカーのぶどう畑はたけが、売うりに出でた。不ふ

景気で手離す人があつたのである。三年前に、二百四十五エーカーの支払いがすんでいた俊介は、不景気中もぜいたくの廃止と、ワインぶどうのおかげで、他の人ほどに困らなかつたので、現金で買うことにした。長男はまだ未成年なので、再び原永氏の名義を借りた。

一世の生活では、妻が家で何もせずにごすことは、ありえないことで、小さな子供が家にいては足手まといになり夫婦共稼ぎができないし、いづれ日本にひきあげる気持の一世の中には、早くから子供に日本で教育を受けさせようと、子供が小学校に行く年齢になると、日本の親や親戚へ送った人も多かつた。俊介とトシもこのことを考えないことはなかつたが、親との縁の薄かつた俊介の少年時代のことを思うと、二人は、どうしても子供たちを手元から離すことはできなかつた。（このように送られた後、日本から帰ってきた二世は、帰米二世であり、普通、みじかく帰米と呼ばれている。）

フーバー大統領につづいて、フランクリン・ルーズベルトが、一九三二年秋の選挙に圧倒的に勝って大統領に就任したのは、翌年一九三三年三月四日である。大不況は、前年の暮頃より、ようやく少しよくなってきたが、それでもまだ労働人口の四人に一人は失業者（千四百万人）であり、今まで三年余りも不景気に苦しんだアメリカ国民が、新大統領のニューデー景気回復政策に寄せる期待は大きかった。しかし、内山家にとって、世間の景気の好転とは反対に、この年は暗い年になってしまった。ぶどうを、ニューヨークに出荷したが、ニューヨークは雨がつづき貨車からおろせなくて、くさってしまったと云って、パッキング・ハウスから、パッキング料と送料を支払えと云って来た。ぶどうがだめになっただけでなく、パッキング・ハウスへの支払いがあるので、貨車一輛につき六〇〇ドルの大損である。情なくて、泣くにも泣けなかった。俊介は、眠られぬ夜がつづいた。支払いが出来ず、畑はさしおさえられ、六十輛も送ったので、三万弗をこえる借金をかかえてしまい、

それにも増して、情なかつたのは、こんな時頼りになると思っていた友達からの「内山もこれでもうだめだ。」と、いう冷いかげ口と冷淡な態度だった。しかしこの度の失敗と、友達の冷眼は、かえって俊介の負けじ魂を刺激し、再起の勇気をふるい起こさせた。

失敗した時に、いつも口ぐせのようにいつていたように、「こうすれば良かったとか、ああしなければ良かったとか、いくらよくよ思っても仕方がない。その時は、良いと思つて最善の道を選んでしたことから、思い残すことはない。」と、きっぱりあきらめた俊介は、すぐさま問題の解決にとりかかった。

農園経営の成功と失敗は、天候と市場の景気に大きく左右されるが、もう一つの要素は、人そのものである。俊介は、果樹園耕作をやめるどころか、パッキング・ハウスから、翌年の運営に必要な資金をかしてもらつて、方策をねつた。

大損の根本原因であつたコンサインメント（委託販売）方式はやめて、パッキン

グ・ハウスと交渉の結果、翌年から、ぶどう一トンにつき一定の現金を出荷の際、ひきかえ（キャッシュパイ）にもらうことにした。

ぶどうタイム（ぶどうの季節）が来ると、俊介は毎年気が立っておこりっぽくなる。子供達は、母親のおこられるのを見て「ぶどうタイムはいや」と、よく云った。特にこの年（一九三四年）はひどかった。子供たちや、働き人にはあまりおこらないが、俊介は、内心のいらだちを、妻のトシにぶちまけていたのだ。人前では口ごたえもできず、涙もろいトシは、家にかえり泣いた事も多かった。しかし「夫には親もないし、小さい時から苦勞の連続で、今も事業のことで気がたっているのだから」と、じっと我慢した。

家の側の道端にあるメールボックス（郵便函）に、内山の名前をペイントしてお金をくると、白人が云ってきたのもこの頃だった。「たのみもしないし、相談もせ

ずにしたことだから払わん。そんなものは消してしまえ」と、俊介は、おこりちらし、「かわいそうだから払ってあげなさい」と、云うトシの言葉も耳に入らず、どうしてもお金をやらなかった。排日空気の中で、白人は優越した人種と思って、日本人であることを卑屈に思う日本人が多かったが、俊介は、そうとは思っていないかった。

収獲が終った。大きくやっているのだから、損も大きいが儲けも大きい。当時日系人は、土地所有者はせいぜい五十エーカー位で、百エーカー持っている人は少なかったから、土地代払い込み済みの三百十五エーカーの土地持ちの俊介は、大農園主であった。この年のぶどうとフルーツ（プラム・ピーチ・ネクタリン）の収入で、前年の借金は殆ど全部かえしてしまった。

五

子供の成長するのは早いもので、一九三四年九月には、五才の末っ子の寿子が学校に行き出し、七年生の幹雄、五年生の茂、そして二年生の隆子の四人の子供が、アラメダ小学校に通学していた。寿子は一月生まれなので、本当ならもう一年家にいるはずだが、仕事がいそがしい母トシが、学校にたのんで一年早く入れてもらったのだ。朝出かける時は、俊介のドライブで連れて行ってもらうのだが、帰りは、迎えに来てもらえず、畑夫人の子供や日本人に親しかつた、近所に住んでいるポルトガル系移民の子供など一団の子供が、三マイルの道を歩いてかえってくるのは壮観だった。畑で仕事をしている時、「ああ子供さんがかえってきた」と、誰かがいう言葉をきいて、俊介もトシも大きくなってくれた我が子のことを思い目を細める

のだった。女の子には身に芸をつけておいた方がよいと、俊介は、娘が小学校へ通う年齢になると、隆子にはピアノ、寿子にはバイオリンのレッスンを受けさせた。（一九四二年転住所に入るまで続いた。）

俊介は、正しいと思つて主張したことは、決して自分の最初の主張をまげない程頑固だったが、日本語教育に対しても、独自の見解をもち、子供に習わせた。「日本人は、日本語を知らなければ」と、俊介は、日本語の勉強に今まで上の三人を、サンガー日本語学校に日曜日には通わせていたが、パレア東本願寺（西本願寺系のパレア仏教会になったのは一九四八年）の未森先生（開教使）の指導方針にほれこんだ俊介は、四人の子供を、この年から仏教会附属の日曜学校と、日本語学校に通学させた。習うからには一生懸命勉強せよ、との俊介のいいつけにこたえて、みんなよく勉強したが、幹雄と茂は、学芸会で、「諸君、我々は」などと、むつかしい日本語で、演説出来るまでになっていた。

内山家について語る上には、どうしても夕食時のことを述べねばならない。俊介がいなくては、夕食は始まらない。俊介の帰りはいつもおそく、子供達は、お腹がすいてたまらないが、パパがかえらないと食べられない。仕事の都合で帰りが随分おそくなり、トシの用意した御馳走が、冷めたくなくなってしまったこともしばしばだった。昼間は、はなればなれの内山一家が、みんなそろってゆっくり顔を会わすことができないのは、晩御飯の時である。俊介とトシは、元氣一杯のわが子の姿をみて、仕事のつかれもすつと、ぬけてしまうように感じた。御飯を食べながら、子供たちから一日のできごとを、くわしくきいてしまうと、今度は俊介の番になる。御飯がすんでも誰も席をはずすことはできず、俊介の訓話をきくのである。

金剛石も磨かずば

玉の光は添わざらん

人も学びて、後にこそ

真の徳は表わるれ

時計の針の、絶え間なく

廻るが如く、時の間の

日影惜みて励みなば

何何なる業か、ならざらん

小学唱歌 「金剛石」

話は、偉人の伝記や、昔習った修身の教科書が中心だった。よくもこんな知っているると子供が感心するほど、俊介はよく知っていた。心がけの立派な人になれ、大和魂を忘れず日本人であることに誇りをもて、勉学をおこたるな、やろうと思えばやれぬことはない、努力が肝心、こういうことを、子供の心に植えつけたかったのだ。だから俊介は、短くても一時間、長い時には二時間も、毎晩毎晩話し、子供達が大学へ入り家を出るまでつづいた。だまってきいていた子供の心に、俊介の精

神は立派に受けつがれ、内山家の基礎がかたまり、ひいては今日の繁栄をもたらした。

畑の仕事は、相変らず忙しく、ぶどうの間に植えたフルーツが大きくなった所は、ぶどうの木をひきぬかねばならず、目のまわるような多忙な毎日だった。主義として、人の先頭に立つことのきらいな俊介は、日本語学校の他に、サンガー同志会や、フレスノ日本人会や、パレアにあるお寺の理事や世話人をしていたが、忙しくてミーティング（会合）等に顔を出す事はなく、経済的援助と、頼まれた区域の世話に精を出す蔭の後援者であった。又、仕事のため、大要の時しかお寺にはお参りしなかったが、浄土真宗の門徒であった父や祖父母から小さい時習った御文章や正信偈を、トシがびつくりするほどよくおぼえていた。農園の経営もその後順調で、経済的にも余裕のできた内山一家は、まさに幸せそのものだった。

六

俊介は小さい時、祖母が「一生県命仕事をする人になりなさいよ。なまけ者を友達にもってはいけないよ。」と、云った事を聞いたことがあるが、実母との縁のうすかった俊介は、やさしく育ててくれた祖母のこのことばが、忘れられなかった。そして俊介は、自分がきいたと同じように、今度は、四人の子供たちに同じことを、云いきかせていた。だから経済的にゆとりがあり、子供にまで仕事をさせなくてもよい状態にあったが、子供が学校に行きだす年頃になると、かわいい子供には、おもちやをやって遊ばせたり甘やかしたりすることよりも、家に仕事のある時には、仕事をさせることが子供の将来のためだと、どしどし手伝わせた。「仕事をせよ。」と、云っても、たたいたりして強要したことはなかった。何でも子供の云うままに、

欲しいものを買ったりはせずに、俊介自身が良いと思つたものしか買つてやらなかつたが、子供達はパパの心を理解して、長い夏休みの農繁期の間、口ごたえ一つせず仕事をし、他所の子供なら、夕方になれば、「もう帰ろう。」と、云うところだが、四人の子供は、「もうこれだけすませて帰ろう。」と、云うけなげな心がけの持主に育つていた。幹雄と茂は男の子なので、バスケットボールやベースボールが大好きで、学校のチームにも入つていたが、家の仕事が忙しい時は、ゲームのあることも云わずに、だまつて手伝いをしたりして俊介を当惑させたこともあつた。

「月にむら雲、花に風」。一九三八年二月六日、トシの父吉左衛門死去の悲しい知らせが来た。俊介と同じようにトシも、両親が亡くなつてしまつた。十一年前日本を訪問した時、いたずら盛りの幹雄と茂が、ツバをつけ破つた障子を、毎晩いやな顔もせず張つていたやさしい母、牛をみせてやると、二人を背に負うたり手をひい

て、連れて行ってくれたなつかしい父。トシは、あの時が親との最後の別れであったかと思うと、涙はとめどなく流れた。この国へ来た一世の運命とはいえ、遠い異国で味う両親との永遠の別れは、はかなくも哀れであった。

俊介は、一九三五年以来儲かったお金を盛んに投資した。それまでは、土地代の支払いをして残ったお金は、機械購入や水跡パイプ敷設等、農園改良費に使っていたが、それらの支払いがすみ事業が軌道にのってくると、銀行に預金する主義ではなかった。白人のすすめでゴールドマイン（金鉱）、シルバーマイン（銀鉱）、石油等に、度胸よく大金を投資したのである。良いことばかりではなく、損をしたことも、だまされたこともあった。だが、いつもの調子で「良いと思っただけのことだから」と、あきらめもよかった。ビジネス（事業）のことは、男の世界だからと、俊介は、トシに相談をしたことはないし、トシもそれについて一切口出しをしなかった。

日の出の勢の俊介は、この年（一九三八年）、川向うの二百エーカーをリースし、アルファアルファとピーンズ（豆）の栽培を始めた。これで又、以前より忙しくなったが、大きくなった子供達はよく手伝った。

一九四〇年六月、長男の幹雄がリードレーハイスクール（高校）を卒業し、九月にパークレーの加州大学に入学した。俊介は、事業と健康と教育のためには、どれだけお金をつかってもよいと思っていた。ことに子供の教育については、自分が苦学したことを思い、「いくらでも出してやるから、お金のことは心配せずに勉強せよ。」と、いつも云っていた。「教育は百年の大計」を、口ぐせとし、子供は一人残らず大学教育を受けてほしいと念願していた俊介は、このたびの長男の入学を心からよろこんだ。

第六章 日米開戦

一

日米開戦

アメリカより二年早い一九二七年に日本をおそつた経済恐慌は、年ごとに深刻さを加え、この不景気を打破するには、中国（支那）市場の獲得より他に道なしという軍部の主張が強まり、一九三一年九月満州事変が勃発した。中国の東北三省を占領した日本は、それを満州国と名づけ独立させた。しかし、この日本の進出は、同じく中国市場に野心のあるイギリスとアメリカを刺激し、これから以後、この新しい市場をめぐる日米間の対立を激化させる原因となった。

新興国日本は、国際会議において、友好国なく孤立状態に陥り、一九三三年には国際連盟を、一九三四年にはロンドン軍縮会議を脱退している。満州国建設五ヶ年計画が終り、中国大陸進出をめざす日本は、一九三七年七月、蒋介石のひきいる中国国民政府に宣戦を布告し、日華事変（支那事変）が始まった。開戦後一年もたないうちに、整備と訓練の行きとどいた日本軍は、北支から南支にいたる支那海岸全域を政略してしまった。アメリカと親密な関係にあつたイギリスは、奥地の重慶に政府を移した蒋介石に援助を惜しまなかつた。又、アメリカ国内でも、一八九八年以来米国の植民地であつたフィリピンの安全を憂うる意見も強くなつて来た。このような状況のもとでアメリカは、日本に対して一九三九年（昭和十四年）七月、日米通商条約の破棄を通告し、一九四〇年夏には、戦争資材となる鉄屑と石油の輸出禁止を発令した。

第二次世界大戦は一九三九年九月、ドイツ軍のポーランド侵入により始まったが、

日本は、ドイツ側に組して一九四〇年九月、日独伊三国同盟を結び、連合国側に敵意を表明した。そして「大東亜共栄圏」を旗印に日本は、一九四一年(昭和十六年)七月、南部仏領インド支那(今の南ベトナム)に進駐を始めたが、米国は、これに對する報復処置として、在米日本人資産を凍結してしまった。日本開戦は不可避で、時間の問題のように思われた。

遂にその日がやって来た。十二月七日(日本では十二月八日)、航空母艦を飛び立った日本の戦闘機と、爆撃機百五機は、米国海軍基地であるハワイの真珠湾に奇襲を企だて、アメリカの誇る太平洋艦隊に、致命的大打撃を与えた。運命の日米戦争(太平洋戦争)の火ぶたは切って落された。

日米開戦と共に、在米同胞の新しい苦難の日々が始まった。丁度その日は、日躍日だったが、午前十一時からラジオは臨時ニュースをくり返し、俊介は複雑な気持

ちでニュースを聞いた。五十八才になり、日本での生活より長い三十四年のアメリカ生活を送っていた俊介は、起つてほしくないと祈っていたこのたびの祖国日本と第二の故郷アメリカとの開戦を歎いた。

一年も前から調べていたFBI（連邦警察）と地方警察は、その日の夕方からブラック・リストにのっている危険人物（といつてもスパイ嫌疑者は少なく、殆どは日系人社会の指導者）を検挙しはじめ、開戦わずか三日の間に、一二九一人を拘束してしまった。これらの人はこの後、逮捕された日系要人等と共に、モンタナ州ミゾラ・オクラホマ州フォートシル・ルイジャナ州リビングストン・ニューメキシコ州ローズバーク及びサンタフェに設けられた抑留所（インターンメント・キャンプ）へ護送列車で送られ、厳重な監視下におかれた。

困惑の事態につきもののうわさとデマが激しく飛び交い、一夜にして「敵国外人」となった日本人社会は、混乱状態に陥入った。男たちは、いつFBIがつれに来る

かも分らないと、身廻り品をスーツケースに入れて用意したが、俊介も同じだった。びくびくと不安な毎日を送る日系人は、日本の本があるとわると云ううわさがでると、日本の団体に関係のある書類や写真、本などを焼いてしまった。戦前はさかんに、日本赤十字社へ寄附金を送ったので、感謝状を受け取っていた人は多かった。俊介の家の側に警察らしい見なれぬ自動車（トヨタ）が止まること（トヨタ）が度々あったが、幸いにも俊介をつれには来なかった。間もなく日系人は、自動車の遠乗りを禁じられ、鉄砲、刀剣、懐中電灯（同志との信号）、日本の飛行機への合図（トヨタ）につかうかも知れぬ）、ムービーカメラ、写真機等の、警察への任意提出を命じられた。日系人に対する圧迫は更にきつくなり、二月二十四日には、昼間でも五マイル以上の外出と、夜九時から朝六時までの外出が禁止された。日本人に対する軽蔑と売りしぶり、日本人産物と日本人店の不買運動、日系人団体の集会不可能等、悪条件が重なり、日系人社会は、マヒ寸前の状態に立ちいたった。恐ろしさのためか、それとも日本人であるこ

とをはずかしく思ったためか、すべて日本的なもの（日本語、仏教など）から遠ざかろうとつとめる人も出てきた。

真珠湾攻撃で、米國海軍の主力を撃滅した日本は、破竹の勢で開戦後三ヶ月足らずの中に、タイ国を従へ、グアム島、ウエーキ島、香港、フィリッピンの首都マニラ、シンガポールを占領し、マレー半島、ビルマ、ジャバ等でも進撃をつづけていた。日本が勝てば勝つほど、在米日系人に対する排斥は、質量共に激しさを加え、にがい想いを重ねなければならなかった。米人の中には、日本がアメリカの太平洋岸に上陸するかもしれないと、まことしやかにうわさを流す者もいた。

非常時に遭遇し、世界各国の人種の寄り集まりで、今までまとまりのなかった移民の国アメリカは、「リメンバー・パールハーバー。（真珠湾を忘れるな）」を合言葉に対日過激派を先頭に立て、排日の気運を強めると同時に、挙国一致の体制を築いていった。

一九四二年二月十九日、ルーズベルト大統領は、大統領令第九〇六六号に署名し、陸軍省に「西部沿岸日本人立退き」の権限を与えた。陸軍西部司令官デウィット中将は、三月二日、アリゾナ州南部、そして日系人の殆どの住んでいるカリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州の三州西部を第一軍事区域、これら四州の残りを第二区域に指定した。そして軍事上重要な第一区域よりの、日本人の血の入っているすべての者の強制立退きが、ゆくゆくはあることを発表すると共に、今ならば「自由立退き（自発的立退き）」が許されると発表した。WCCA（戦時民事管理局）が設置され、奥地の収容所に入るまでの世話をすることになった。

当時米国（ハワイを含まず）には、約十四万人の日系人がいたが、殆どは、第一、

第二両区域に住んでいた。西部十州の中、砂糖大根農園の労働者を必要としていたコロラドとユタ州だけが日本人の受け入れを認めたので、五千四人の日系人が三月二十七日までの自由立ち退き期間に両州に立ち退き、四千八百人余りは、第二区域に立ち退いた。中加のまん中を走るハイウェイ九十九号線より東は、第二区域に指定されたので、親戚や知人をたよって第一区域に住む日系人が、どつと中加東部に流れこみ、中加の日系人人口は急激にふくれ上った。この他、広いアメリカのどこに出でいってもよいのであるが、アメリカ諸州で受け入れ反対が強まっている時期でもあり、残りの殆どは旅費の不足や見知らぬ地でも、同じような苦しみしかないと思ひ、自由立ち退きの道を選ばなかった。

大統領は、三月十九日 War Relocation Authority (戦時転住局) を設置して、日系人立ち退きに関する一切の行政にあたらせた。初代長官には、ミルトン・アイゼンハワーが就任した。(同年六月から開散する一九四六年までの四年間は、マイヤー

長官が担当した。)一九四二年三月二十四日、デウイット西部司令官は、第一軍事区域から日本人は、日系市民(この国生まれの二世、三世)を含めてすべて立ち退くことを発令した。そして三日後の二十七日には、自由立ち退きを禁止したので、第一軍事区域に住む日系人は、ただ強制立ち退きを待つばかりとなった。集団立ち退きが始まった。ロスアンゼルス近郊のサンタアニタ競馬場の馬小屋は、仮収容所「正式には、アセンブリセンター(集合所)と呼ばれた」に早変わりして、三月二十七日に開所したから、同胞の中にはわずか三日間で、荷造りをし、ナンバーのついた札を首からさげ、兵隊の見守る中で入所した人もあった。永年かかって求めた家財道具や資産を、二束三文で投げ売りしてきた人も多かつた。

中加では、まづ最初に四月二十日フレスノの南五十マイルのツラレにフェア・グラウンド(共進会会場)を利用してアセンブリセンターができて、加州沿岸のサンタバーバラ、オクスナード、ガダルーピ、サンタマリアなどの日系人四千人余り

が収容された。

五月六日には、フレズノのフェア・グラウンドが、フレズノ・アセンブリー・センターと名前を変え、中加のフレズノ、ハンフォード、デレノ、ファアラ（半分）、ポールズ、セルマ（一部）、マデラ等、沿岸地方のサンルイスオビスポやモントレ（一部）、北加のフローリンとエルクグローブ等からの日系避難者五千二百二十人を収容した。わずか二ヶ月足らずの内に、昼夜兼行で連日休みなく働く五百人をこえる建築作業員により、すでにある建物、倉庫、家畜舎の改造と、二百五十をこえる新築バラック建物が完成したのだった。

フレズノの北隣（五マイル）の小さな町パインデールにも、綿会社の敷地と隣接の八十エーカーの政府所有地に、日系人集合所が設置された。加州沿岸各地だけでなく、ワシントン州タコマ及びホワイトリバー平原オーバン地方の日系人が、オレゴン州を越えてこんな遠くまで汽車で送りこまれ、五月七日開所されて七月二十三

日の閉鎖まで、四千七百九十二人が入所して、共同生活をした。綿会社の大貯蔵倉庫二十五棟の他、フレズノ集合所と同じく新しく建てた二百五十をこえるバラックが使用されたが、特に涼しいワシントン州から入所した人たちにとっては、アスファルトがやわらかくなりテーブルやベッドの足がずり込む中加の暑さは、アメリカの仕打ちにも似てひどかった。

このように、中加には集合所が三ヶ所設けられたが、ハイウェイより東の区域（第二軍事区域）には、加州各地の第一区域より移ってきていた多くの人達も含めて、約六千人が集合所生活をのがれて住んでいた。太平洋岸四州に設けられた十五ヶ所の集合所（加州十二、ワシントン一、オレゴン一、アリゾナ一）と加州東端のマンザナ収容所（リセプション・センター）に収容された日系人は、八万二千三百八十六人にのぼった。

アセンブリー・センター（集合所）と云う名の通り、これは一時的なもので、や

がてはもつと奥地の転住所が出来次第うつるはずであるが、余りにも大勢の集団移動なので、建物の建設と準備に時間がかかり、初めの予定通りには計画が進まず、或る集合所では、六ヶ月も待たねばならなかった人もあった。

幹雄はパークレーの加州大学二年生だが、二月からの新学期は少し行っただけで、サンガーにもどってきた。ただでさえ不安につつまれた内山一家にとって、この社会状態で幹雄を遠くに一人でおいておくことは、心を痛めるばかりだったのだ。サンガーは第二軍事区域に指定され、立ち退きの必要はないのではないかと思われたが、六月二日、デウィット中將は、加州の東半分（加州の第二軍事区域）からの自由立ち退きを禁止して、まもなく集合所を経ずに、直接奥地の収容所へ立ち退きさせると通告した。

奥地に急造された収容所（正式には転住所、リーロケーション・センター）への、

日系人の大移動が開始された。五月八日には、アリゾナ州ポストン、同月二十七日には、カリフォルニア州の北端のツールレーク（大昔は湖底だった所である。オレゴン州と加州の境にあり、インデアンの古戦場として有名）に、転住所が出来上り、サンタアニタ、サリナス、メリスビル、サクラメントやパインデール集合所から軍の指令により出て行く人もあった。かねてより覚悟はしていたものの、内山一家が一番恐れていたものがとうとうやってきた。

三

八月七日（一九四二年、昭和十七年）朝から、サンガの駅に待機するサンタフェ鉄道専用列車に、一家六人は乗り込んだ。農園は、八割がフルーツ、残りの二割がぶどうだったが、フルーツの収獲は前の日までかかって、幸いにも全部とり入れ

出荷した。しかし、ぶどうはよく実つて、もうあと二ヶ月もすればとれるのだが、仕方がないので今まで取り引きをしているパッキング・ハウスに頼んで家を出た。俊介はまじめに働く人には、どこまでも世話をしたので、過去十五年、二十年と一生懸命働いてくれた農園住いのメキシカンとインデアンが、心から別れを惜んでくれた。記録によると、家から集会所又は転住所への日系人立ち退き完了は、第一区域が六月五日、第二区域が八月七日であるから、この日は、西部沿岸からの日系人立ち退きの最終日であった訳である。

事業に生き甲斐を見出す俊介にとって、ここまで築き上げた農園を離れねばならぬことは、身を切られるように感じられた。その上、かわいい妻子のことを思うと、これから始まるうとして新しい事態は、一層心を悩ませた。いつまでつづくかも分らないこれからの生活への不安におののく一家をのせて、無情にも汽車は昼過ぎ、好奇心で集った見物人と、日系人に好意のある白人の友人の群がるサンガ一の

駅を出た。出入口には、鉄砲を持って看視する兵隊がのりこみ、真夏だというのに窓をしめきつたこの汽車には、サンガラの他にパレア、セルマ、ファアラ（東半分）からの日系同胞も乗っていて長い列車だった。サンガラ駅からは、合計二九八二人が奥地へ送られたが、この日の汽車には約五百人の日系人が乗っていた。「当時の英字新聞、フレズノ・ビーには、この国生まれの二世も、三世も日系米人ではなくて一世同様に、ジャパニーズ（日本人）として取り扱われている。外を見てはいけないと、シェード（日よけの窓）まで下ろしたこの汽車は、日系人のおかれている運命を象徴しているかのようにだった。家を出て汽車がでるまでの不安と、焦燥は、汽車がでてしまうと、あきらめにかわり、俊介は、くそ度胸にも似た落着きを覚えた。

汽車は夜、ロスアンゼルスで五、六時間とまった（といっても駅のプラットホー

ムより外へは出してもらえなかった) 後、見かけない風景のアリゾナ州に入った。ユーマを過ぎると、ユーマ・デザート(砂漠)が目前にひらける。許されて、あけた窓からながめれば、砂漠の中に生い茂るセイジブラッシュと加州ではみかけないキヤクタス(シャボテン)の木の林が、果しなくつづいていた。サンガーから六五〇マイルの長旅を終えて、カサグランデの駅についたのは、八月八日昼すぎだった。暑さと疲れにくったりとした体をバスにゆだね、内山一家も一行と共に、目的地である二十マイル北のヒラ・リバー、リローケーション・センターに遂に到着した。

在米日本人の身の安全を保護するため、立ち退き(エバキューション)の必要があったと、デウィット中將は説明しているが、果してこれが本当に、日系人強制立退きの理由であったらどうか。日本の真珠湾攻撃以来、新聞、ラジオ、及び排日家と一部団体の発言は、排日に拍車をかけ、世論はヒステリックな排日の気運に傾き、

日系人がびくびくと不安な生活を送っていた事は事実であった。しかし、それは在米日本人強制立退きの理由としては、いくら考えても十分とは思えない。日系人の奥地移動は着々と進み、一九四二年十一月の初め、収容所の中では一番遠いアーカンソー州ジュロームに、フレスノアセンブリーセンターからの最後の組が、五晩六日の二千マイルの汽車の旅を終て到着して、日系人の転住所入が完了した。

西部四州から十一万二千人（約三万家族）の日系人が、十ヶ所の転住所（アリゾナ州ポストン及びヒラ・リバー、加州ツールレーク及びマンザアナ、アイダホ州ミネドカ、ワイオミング州ハートマウンテン、コロラド州アマチグラナダ、ユタ州トパーズ、アーカンソー州ローワ及びジュローム）に移ったが、その内三分の一の三万八千人が一世で、残りの三分の二の約七万二千人は、この国生まれの二世と三世であった。一世の中には、長い排日の歴史に生き、日本に忠誠を誓うものもいたが、それは心に思うだけで、実際にサボタージュや妨害もしたことはなく、アメリカに

住んでいるというだけで、日米戦争と直接関係のない全部の一世は、アメリカ国民の異状心理の犠牲となってしまうた。日本生まれの一世だけでなく、市民権があり、皮膚の色がちがってもアメリカ市民である二世と三世までも、良識ある人たちの反対もむなしく、敵国外人として取扱われたのだ。アメリカは、ドイツ、イタリアとも交戦状態にあつたが、この国にいるドイツやイタリア系人には、立退きの命令は下らなかつた。「ジャップ（日本人に対する軽蔑的呼び方）は、米国民であろうとなかろうと、少しの区別もない。ジャップはジャップだ。」と、云つたデウィット西部司令官の言葉は、アメリカ社会の排日感情を如実に物語っている。

パークレー加州大学ジョーン・ヒックス教授と、ロスアンゼルス加州大学ジョージ・モウリイ教授共著の *A Short History of American Democracy* (アメリカ民主主義小史) には、開戦と共にハワイの日系人(十五万八千人)の米本土への強制立退きが討議されたが、ハワイの人口の四割近くを占める日系人がいなくなれば、ハワイ

の経済の混乱もしくは、破滅はさけられない、との結論に達し、「危険人物」を拘禁しただけで、一般のハワイ日系人立退きは取り止めとなり、米本土西部沿岸には日系人の数は多いが、人口の比率からいえばほんのわずかであるから、経済界に与える影響は少ないとみて、立退きを決定したと云っている。かくして日系人の立退き（エバキューエーション）は強行され、自由と平等をめざすアメリカ歴史に恥辱のページが記された。（一九四四年「昭和十九年」十二月、米国大審院は、日系人転住所抑留は憲法違反の判定を下した。）

第七章 ヒラ・リバー転住所生活

—

ここヒラリバー・リロケーション・センター（ヒラリバー・エバキュエーション・キャンプとも呼ばれた）は、アリゾナ州第一の町フィニックスの南四十五マイルの砂漠の中に出来た日系人転住所であった。アリゾナは、一八四八年にメキシコ戦争の勝利による条約により、アメリカに大部分が譲渡され、ヒラ河より南は、一八五三年アメリカがメキシコから買いとったものである。一九一二年米國第四十八州となったアメリカ歴史の上では新しい州であるが、インデアンと十六世紀に入っ

来のスペインの影響の強い州である。特にメキシコを植民地としたスペインの勢力が及ぶまでは、紀元前二万五千年前に、当時アジア大陸と陸つづきであった北米大陸のアラスカへ移住したアジア人が、次第に南下しこの地の原住民となり、わがものとしていた地であり、アメリカ人の西部移動により急激に人口の増加する現在でも、人口の二十人に一人（約十万人）は、インデアンであり、アメリカ中のインデアンの七分の一は、アリゾナに住んでいる。アメリカ政府がインデアンと妥協して、インデアン・レザベーション（保留地）を設けた時も、アリゾナ州の四分の一にあたる土地を、アパッチ、ナバホ、ホピ、パパゴ等十四の種族のためにアリゾナ州各地十九区域を指定したほどで、アリゾナは、インデアンを離れては語れない。アリゾナとは、インデアンの言葉で、小さな泉の意味であり、ヒラ河のヒラには蜘蛛とか、塩辛い水、の意味がある。

この転住所（日系人は比良収容所とか、比良キャンプと呼んだ）もインデアン・

レザベーションの区域内にあった。一万七千エーカー（七千町歩）の広大な土地を借用して、砂漠の中に急に小都市が出来上った。アメリカの原住民であり前から住んでいたインデアンをおしのけたアメリカ社会は、今度は一番新しい移民である日本人とその子孫を差別の対象として、アリゾナへつれてきたのである。不思議な歴史の組み合わせを感じずにはおられない。七月二十日に開所し、ターラック、ツラレ両集合所及び加州各地からの日系人を一万三千人余りも収容したこの転住所は、一躍アリゾナ州第四番の大きな町になってしまった。第一位フィニックス、第二位ツーサン、そして有名なグランドキャニオンを流れるコロラドリバー（河）の下流に出来て南加・中加、及び沿岸等加州各地から一万八千人の日系人を収容し、第三位にくいこんだポストン転住所につづく人口を持ったわけである。

二

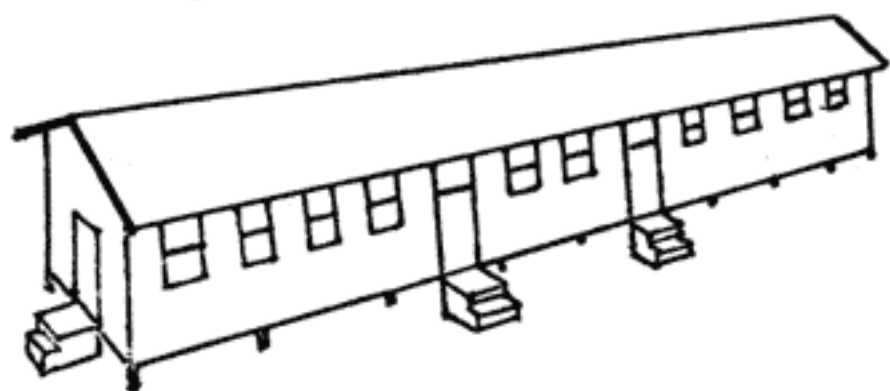
カサグランデの駅から差し迎えのバスに分乗して、到着した内山一家も、その規模の大きさに驚いた。転住所は、六十ブロック（区割）に分けられ、一ブロック毎に二十のバラック建築がたち、又それぞれのブロックには、メスホール（食堂）、娯楽ホール、共同シャワー（浴場）、共同便所、洗濯場が建ち並んでいた。その他、消防署・病院・倉庫・米人職員の事務所や宿舎等があり、全部で建物は千四百もあった。なんとといっても広い収容所で、これらの建物の外側には、やがて日系人に耕やされて一部農園となる砂漠もひろびろとつづき、赤黒い小山さえも含まれていた。高さ八フィートの鉄線のはりめぐらされたフェンス（囲い）やそれに沿って見張り台は、この収容所の入口近くにあったが、はてしなくつづく後方の破漠に向っては

その必要もないらしく、ただ砂漠がぼうぼうと広がっていた。この収容所の名前で
であるヒラ河は、アリゾナ州を東西に横断する大河であり、この収容所から遠く
い所を流れており、その水は掘られた用水路により、キャナル・キャンプのすぐ北
側に来ていた。

このヒラリバー転住所は、キャナル・キャンプとビュート・キャンプに分けられ、
四マイルの砂漠をへだてて建てられていた。日系人は、前者を第一キャンプ、二倍
の大きさを持つ後者を第二キャンプと呼んだが、内山一家は第一キャンプのバラッ
ク建物の一室におちついた。

陸軍省が兵隊を使って急造したこの転住所は、前線で用いる軍隊の臨時バラック
式建物で、若い独身男子が入るように設計されており、耐久力はわずか四・五年の
貧弱な建物の集りであった。

バラック住宅



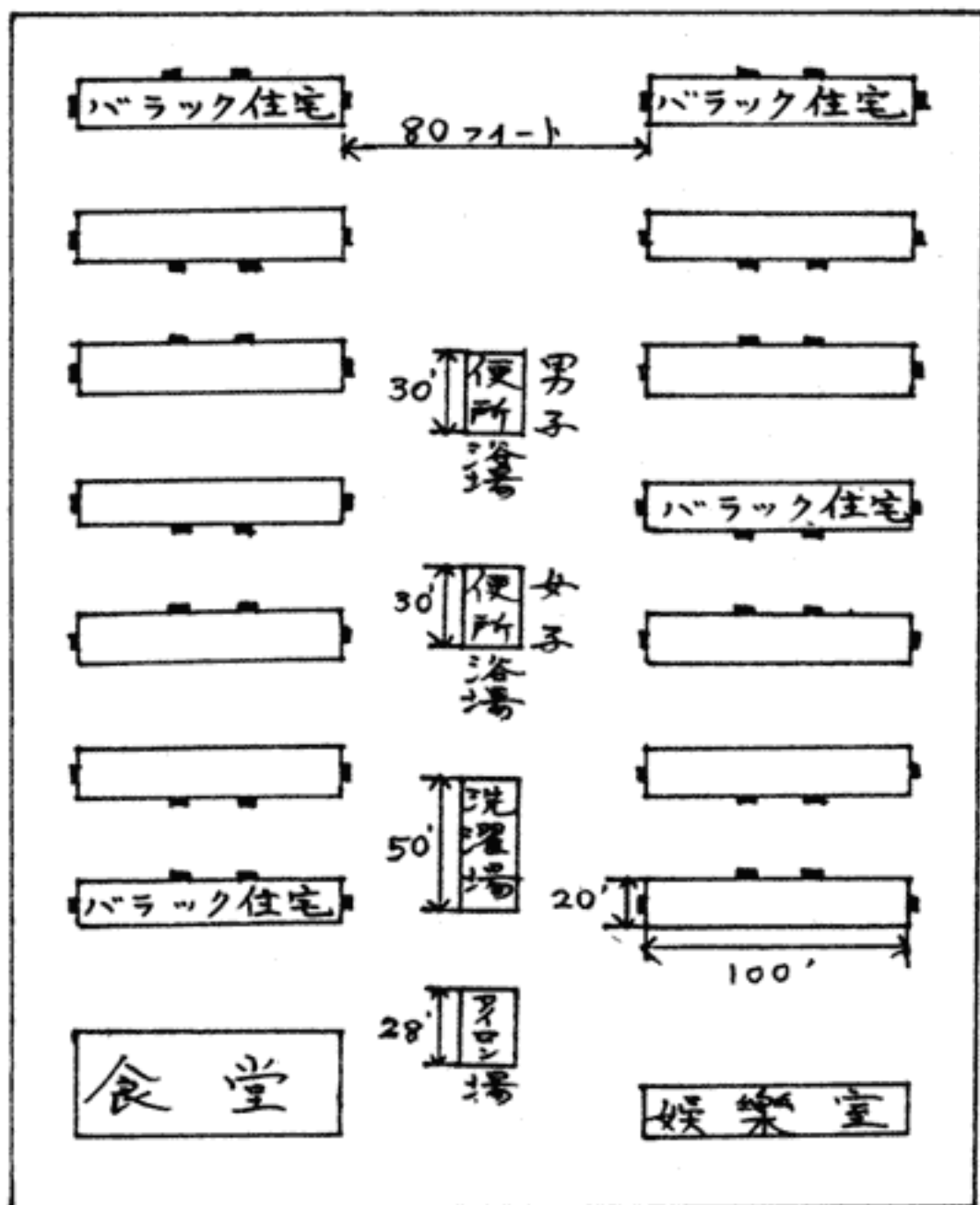
四家族居住(縦20フィート 横100フィート)

三家族 20' x 24 フィート

一家族 20' x 28 フィート

縦二〇フィート(六メートル)、横二
十四フィート(七メートル)の木の床の
部屋に藁のマットレス・ベットが入った
だけのがらんとした部屋に落ちていた俊介
一家は、言葉に云い表わせないさみしさ
を覚えた。「これからいつまでこゝにい
るのだろうか。子供の学校はどうすれば
よいのだろうか。サンガのフルーツと
ぶどう畑は、うまく管理してもらってい
るだろうか。ぶどうはどうだっただろう
か。次から次へと想いは走り、俊介の心
は千々に乱れた。

ブロックの略図



部屋の真中に針金をひいてシーツをかけ、ルームを二つに仕切り、家を出る時隣家五軒で貨車を一輛借り、積んできたアイス・ボックス（冷蔵庫）、ベッド二つ、ソファアー二つと身回り品を入ると、部屋は急に趣をかえた。（立ち退き初期に家を出た人たちは、わずかの身回り品だけを持ち立ち退いた。）

俊介のブロックには、二百五十人余りの日系人が住んでいたが、部屋を出ればすぐこのブロックの者全員が使用する食堂、便所、浴場、リクレーションルーム等があるから、部屋には、これらのものの必要はなく寝泊りを主とするルームとしては、充分な広さだった。ただ隣の家族とは、壁一つへだてているだけなので、大きな物音をたてることは、つつしまねばならなかった。床板の隙間から吹きあげてくる砂ほこりにも困った。

日本人を住みなれた家々から、奥地へ立ち退きをさせるひどいことをしたが、アメリカの良識は、まだ残っていた。そまつではあるが、バラックが学校となり、九月

からは学校が開校し、就学年令期の子供の教育を始めた。隆子と寿子は、この新しく出来た、先生の半分以上は二世で、生徒は日本人ばかりの学校に通い出した。人里離れた砂漠の中に急にできた学校だから当然のことながら、学校とは名ばかりで、教室の設備も先生の質や量も貧弱であったが、ともかくも子供達の教育は、とだえることはなかった。

しかしこの転住所には、小学校からハイスクール（高校）まではあっても、大学はなかった。許可をもらえば、立ち退き地域以東へ仕事と勉強のために転住所を出ることができるといふ通達が出たので優秀な成績で六月にリードレー高校を卒業した茂は、転住所に入るや、東部の有名校へW R A事務所を通じて入学願書を何通も送った。日本人排斥は西部沿岸だけでなく、悪意ある新聞や在郷軍人会の影響により、「西部でいらない日本人は、こちらでもいらない。」という傾向が東部にもひろがっており、返事が届くたびに失望を重ねたが、ただ一つ茂の希望校の一つであったテ

キサス大学から、入学許可の通知が来た。ヒラへ来て四ヶ月後の一九四三年のお正月がすぎると、茂は不安な気持ちの中にも固い決心をして新学期にまにあうよう、家族に見送られテキサス州オーストンへ畑夫人の長男忠君と共に出て行った。(平常の大学新学期は二月と九月であるが、戦時中は、大学も非常体制で、一年を四ヶ月の三学期に分て、夏休みがなかったため、三年間で卒業できるようになっていた。茂は一月からの新学期に入ったわけである。)

三

外界から隔離され、何かにいつも圧迫されているようなところに住むと、みんな普通ではなくなってくる。まして暑い中加とくらべても一段上の、日中は灼熱地獄を思わせる百二十度(摂氏四十九度)にもなる砂漠の暑さと、風が吹く時は、この

世の終りが来たかと思わせるものすごい砂ぼこりは、ただでさえ不安につ、まれる日系同胞の心を、より一層不安なものにした。女子より適応性に乏しい成年男子は特に悩んだようだった。心の鬱憤を晴らすかのごとく、日本に忠誠を尽くす人たちは、かくし持ってきた軍艦マーチのレコードを、われんばかりに大きく拡声器で流したり、どこにかくしているのかショートウエーブ（短波）ラジオで、大本営発表の敗けることのない日本軍の進撃ぶり（実はそうではなかったが）をきいて、建物の壁や掲示板に貼り紙を出す者もあった。行政区域のみに住む白人に運わるく見つかったとしても、白人には軍歌も日本語もわからないし、またとえ意味が分ったとしても、日系人には同情的な人が多かったから、これ位のことは、初めのうちは大目にみて見のがしてくれた。

仕事一途に生きて来た俊介は、ここへ来ると急に元気がなくなってしまった。サングラーの農園のことが、頭から離れなかったのが。農園は、永年とりひきのあるパ

ツッキング・ハウスに管理をたのみ、果物の出荷についてはコントラクトして出て来たのだが、悩んでいる俊介に、そのパッキング・ハウス（果物出荷会社）から手紙がとどき、更に悩みは深まった。「外国人は、土地を持たないのに、他人の名義を借りて不合法に購入しているから、政府にとりあげられないうちに売ってくれ。」という内容の手紙だった。一九一三年制定の土地法のことを深刻に考える俊介は、手紙が来る毎に、だんだん自分が悪いのではないかと思うようになっていった。だが、あたかもわが子のように育てあげた農園は、どうしても手離したくはなかった。子供達も売ることには反対だった。「でもパパは病気なのだから、パパの好きなようにしたらよいよ。」と、母親に意向を告げた。

悩みに悩んだ六ヶ月がすぎて一九四三年の春が来た。サンガールのパッキング・ハウスからボスがやってきた。これまでは、手紙だけだったが、本人が目の前に来て今までのコントラクト（契約）は継続できないというのだから仕方がない。心身共

に弱りきっていた俊介は、土地法を楯に半分脅迫めいて土地売却を迫られた時、子供の教育費があればよいと思い、死ぬ想いでサインした。

二十四年前の一九一九年荒地を購入し、妻と共に血と汗と脂で開墾し地ならしをして苗木を植えた二百四十五エーカー及び一九三二年に購入した七十エーカー、合計三百十五エーカーの畑は、今では立派な果樹園となり、プラムやピーチやネクタリンは花盛りで収穫を間近にひかえ、ブドウは新芽が出ている時期である。多額の費用をかけて、配水パイプも入て、すばらしい収穫を待つばかりのこの畑は、この年のクラブ（収穫）をつけたまま、住みなれたわが家、大倉庫、農器具、家畜等一切と一緒に、何十年前に買った土地代だけで、買いとられてしまった。フルーツとブドウの一年間の売り上げだけでも、この位はもうかるのだから、買う方にとっては、全くただのような値段だった。書類にサインはしたものの、俊介は手足をもぎとられていくような悲痛な心境だった。（排日土地法ができてから、俊介一人で

はなく沢山の在米日本人が他人名義で土地を購入したが、これは法律違反ではなく、土地を政府にとりあげられた人はなく、又、俊介のようにおどかされて売った人も少なかった。

強風にあうと堅い樫の木は、折れることがある。しかし、弱そうにみえても、竹や柳は、嵐の中にも折れることはない。内山家の危機に際して、トシは、俊介に代り一家の精神の支えとなって、よくこの場をもちこたえた。

四

行政区域や学校等の施設をのぞいては白人をみることはなく、ブロック内の自治も日本人にまかされ、日常必需品を販売する共同組合の運営、三度の食事の調理も、

日本人のクック（調理人）がするのであるから、日系人は殆ど純粹な日本人共同社
会に住んだわけである。入所当時あたりにちらばっていた、建物の材料の残りや木
の片は、やがてきれいにかたづけられ、家の前には、芝生や花や木が値えられた。
初めの頃砂塵がひどく、我が家をさがせず、迷い子が出たことがあったが、そんな
ことも大分ましになった。炎天下のメスホール前の順番待ちの行列も以前ほど苦痛
に感じなくなった。

一世や婦米二世（アメリカ生まれの二世だが小さい時教育の爲日本に行っていた
人たち）の中には、ブロック内でメスホールのクックやヘルパー（手伝い人）、転
住所新聞作り、ガーデンナー（庭園師）、共同組合売店、ブロック・マネージャー（ブ
ロック主任——大抵は英語のできる二世）のオフィス手伝いの仕事をもらったり、
ブロック外へ出て農園、養鶏場、養豚場、倉庫などで働き、日に十六ドルか又は十
九ドルの月給をもらう人もあったが、ほとんどの入所者にとっては強制立ち退きに

よるこの転住所生活は、強制休暇といつてもよいほど、ありあまる自由時間を与えた。住宅、衣料、食事、医療を無料で支給され、生活に何らの心配のないこれらの人たちは、娯楽と趣味と教養に日々を送った。芝居、碁、将棋、花合せなどの娯楽の他、同じように収容されているその道の専門家の教授により、活花、お茶、詩吟、謡曲、書道、短歌、川柳等、あらゆる日本文化の習得が盛んになった。大はやりの息子たちの野球と相撲試合の見物も楽しんだ。裁縫や英語を習い出したり、手芸、彫刻、木工細工、石みがきをする人も多かった。

元気をとりもどした俊介は、精神修養にと習字クラスに通った。又、木工に興味を見出し、近くを流れるヒラリバー河の支流の河岸に育つカットン・ウッドツリーやこの地方の砂漠独特の十フィート（三メートル）にもなる直立した巨大なキャクタス（シャボテン）や乾燥した砂漠の砂の中に何十年（何百年かもしれない）も埋もれている堅い乾木のアイロン・ウッドを持ちかえつては、机、戸棚、置物、小鳥、

杖（ステッキ）などを作った。（中でも手間のかかる色付きの小鳥をつくるのが好きで、沢山つくったので友達や孫達にやったのも多いが、現在なお五十余り残っている。わが身にひきかえて、自由自在にとぶことのできる鳥がうらやましかつたのかも知れない。写真参照）日課のように俊介は砂漠に出た。一見殺風景ではあるが、そこには収容所のない進歩があり、自由があつたからである。

転住所にはあらゆる職業の日系人がいたが、大学はでも日系人にはよい仕事をもらえない時代であるから、医師、歯科医、学校教師などの数は少く、それらの人は入所前よりも忙しかった。同僚の中には抑留所へ送られた者も多かったが、抑留所行きをまぬがれてここに来ていた宗教家（在米邦人は、広島、熊本、和歌山など浄土真宗西本願寺の門徒の多い県から来た人が多かったことと、西本願寺が米国の仏教伝道を米国仏教団を一八九九年に組織していち早く始めた関係もあって、日系人の宗教界を殆ど独占していた米国仏教団の開教使及び、数は少ないが仏教各宗

の開教使とキリスト教各派の牧師も活発な教化運動を展開し多忙な毎日が続いた。これらの人たちは、わずか十九ドル（でも転住所内では最高）の月給でよく日系人の要求にこたえ、同邦の収容所内での生活に、はかり知れない潤いを与えた。

鉄柵の中にもロマンスの花は咲き、あちらこちらでめでたく結婚式を挙げる若者もあつたが、若者たちにとっては、この収容所は一世ほど住みよい所には感じられなかつた。所内で仕事をする人もあつたが、アメリカ社会の標準と比較すれば、一カ月十六ドルか十九ドルの月給は、あまりにも低く、遠く東部のニューヨークやシカゴへ仕事を求めて、出所願いを出す者も多くなつて来た。又、農園労働者の不足になげくアイダホ、ユタ、ワイオミング、コロラド諸州に出ていく者も多かつた。その上、今までは実際に日本人を見ずに排斥をさげんでいた米人（アメリカ人）が、手先が器用で勤勉に働くこれらの人たちに接して、日本人を見なおす傾向もでて来て「日本人がほしい」と収容所にまで勧誘に來たり、やとつた日本人に友達を紹介

してほしいとたのむことさえ起つて来た。若い青年が遊んでいる非生産的な収容所生活を好まなかつた俊介は、この新しい風潮がうれしかった。

又、所内には、小学校（八年制）と高等学校（四年制）しかなく、高校を卒業して大学入学を志望する若者は、受け入れてくれる大学を一生懸命さがし求めた。

五

ハワイの二世による日系人部隊、第一〇〇歩兵大隊を組織した陸軍省は、一九四三年一月下旬、アメリカ本土の日系人二世による四四二部隊（正式には第四四二連隊戦闘部隊）を組織することを決定し、二月六日には早くも十カ所の転住所にやつて来て入隊志願者の募集を開始した。そして二月十日には転住所にいる一世、二世の成年男女全員にアメリカに忠誠を尽すかどうかを調べる忠誠登録を始めた。祖国

日本と生まれた国アメリカの板ばさみになり苦しんだが、「自分の生まれ育ったアメリカに忠誠を尽すのが市民としての義務である。」と理性で割り切った若者や「自分たち二世まで、このように収容しているアメリカのやり方は悪いが、もしも出征することにより、自分の親兄弟が今、味わっている排斥と屈辱からのがれられるなら。」という希望を持った二世は、後指をさされつつもセンターを出て行った。ここでは日本の敗けることを口に出すことは法度であった。戦局は日本に不利であつても、大本営発表を信ずる人たちは、アメリカ側の報道は信ぜず、日本は敗けることはないと思つていたのであるから、そんなことを口にする者は「犬だ。」「謀反者だ」と、かげ口を云われた。

俊介は、北はバンクーバーから南はロスアンゼルスまでを知つていた。そして東は、東海岸のニューヨークまで汽車で横断したことがあり、このペラ棒に広大なアメリカを相手に、日本が勝ち続けているという大本営発表は信じられなかった。ど

ちらが勝つても負けてもうれしくない複雑な気持ちの俊介は、白人新聞やレデイオ（ラジオ）の報道を複雑な気持ちで受け取った。

日本海軍が真珠湾攻撃の前、予言した通り日本は開戦後六カ月は、東南アジアと太平洋の全域で敗けることを知らなかった。しかし俊介一家がまだサンガーにいた一九四二年六月三日から六日までのミドウエー海戦で物量にものを云わせて再建したアメリカ太平洋艦隊に、日本は航空母艦四隻をふくめて合計九隻を失う致命的大損害を受けたのを境に、戦局は百八十度の方向転換をした。攻勢から守勢に変わった日本は、軍需産業がフルに回転し豊富な武器と弾丸を装備した米軍により、ガダルカナル島にて南進はくいとめられ、反対に八月七日の海兵隊のガダルカナルの上陸以来、激しい抵抗はしたものの敗戦の一路をたどることとなった。

ハワイの日系二世による第百大隊は、一九四二年六月に組織され、ウイスコンシン州の練兵場キャンプマツコーイにて訓練を終え、一九四三年夏にはイタリヤ戦線

に参加した。一九四三年二月から募集したアメリカ本土における四四二部隊の志願者は転住所から合計約三千六百人（ヒラリバーからは四百八十七人）余りにのほり、ミシシッピ州キャンプ・シエルビーに送られ、基礎訓練を開始した。この他に開戦前から兵役にあつた者や四月に入つて来たハワイからの約二千七百人も、米人教官から訓練を受けることになった。

幹雄は、弁護士になることを志望して加州大学に入つたものの、戦争のため一年半も勉強を中断してしまった。畑のことで悩んでいた父親を、長男の幹雄は母と共に心配していたが、その心配もなくなったので、二年生編入許可をくれたオーストンのテキサス大学へ九月（一九四三年）新学期から入学した。

忠誠登録の結果、転住所からの再転住が始まった。アメリカに不忠誠の者のために隔離センターを設けることがきまり、大きい順番のポストン（コロラドリバー）、

ヒラリバー、ツールレークの三転住所が候補にのぼったが十カ所の転住所の中で、これまでに一番さわいだツールレーク（当時の収容人員は約一万四千人だったが志願兵は、わずか五十七人だった。）が選定され、一九四三年九月中旬から十月中旬にかけて八千八百人余りの米國不忠誠者（日本人家庭では、父親の権力が強いので、家族は父親の意見に従い一緒に移ったので、必ずしも全部が不忠誠者ではなかった。又反対に収容所という特殊な環境での調査でなければ、不忠誠者はもっと多かつたかもしれない。）が九転住所からツールレーク入りをし、反対にツールレークから六千二百人ほどの忠誠組が転出した。翌年の一九四四年二月にマンザナ転住所から千八百人がツールレークに入ったのでツールレーク転住所（鶴湖収容所）は、収容者一万九千人近くにふくれあがり、数と騒動の上で一番の転住所となった。

長女の隆子は、六月（一九四四年）で転住所内のハイスクールに二年通い、次の

年には大学入学を控かえていた。俊介の強い希望もあって、できれば医学の道に進みたいと思っていたが、ここの学校にはその入学に必要な課目がないので、テキサスにいる兄に困っている、前に便りを出していた。兄の茂から返事が来たのは五月の初めだった。「知人の白人家庭にスクール・ガール（家事手伝いを条件に寝泊りさせてもらう）として来てはどうか。」と、いう内容だった。六月初め学校が終ると隆子は畑夫人の照ちゃん（照枝）とオーストンへ高校最後の年を送るべく早々と出て行った。入所当時は、四人の子供たちがいてにぎやかだったが、今は寿子一人になり、さみしくなってしまった。

六

丁度この頃である。六月十二日ルーズベルト大統領はハル國務長官の病氣辞任

により臨時國務長官となつたステイネス（後に正式に國務長官となつた。）に書簡を送り、一九四二年より施行中の西部沿岸日系人締出しの法令により、転住所に入っている日系人の帰還をほのめかした。一時に沢山の日系人を帰してはいけませんが、少しずつ徐々に帰すことをきめ、「しばらくの間、この線に沿ってやってみてはどうか。」と命令した。

太平洋戦争の戦局は、一方的にアメリカに有利に進んでおり、戦争の終結を予期する西部の米人社会に、排日の気運は再燃し、統制のとれた激しい日系人帰還反対運動が、十指をこえる有力団体を中心に展開されていた。「アメリカニズム（アメリカ主義）とは、心と精神の問題だ。アメリカニズムは人類とか祖先の問題ではなく、又それでもなかった。」と前年（一九四三年）日系人部隊を編成する時、歴史に残る名文句を残したルーズベルト大統領であつたが、この年（一九四四年）は、十

一月に大統領選挙を控え、西部の強い帰還反対の人たちの票を心配したのか、日系人帰還については、いつものようにラジオで広く国民に訴たえる手段はとらず、目立たない書簡と云う方法を取り、しかも「しばらくの間、この線に沿ってやってみては、(日系人をかえしては)どうか」と、いうひかえめな談話的表現を使った。ごく一部のの人にしか、この命令は知らされなかつたが、この帰還許可の命令により、転住所から数は少ないが、早速出所した日系人もあつた。

一年余りキャンプ・シエルビーで猛訓練を終えた第四四二部隊は、一九四四年五月一日、シエルビーを出発し、二十八日間の大西洋航海の後、イタリアのナポリに上陸した。六月七日には、早くも激戦つづくヨーロッパ線戦の最前戦に立ち、砲火を交えた。一年近くも早くイタリヤに来ていたハワイ二世による第百大隊がチビタベツキヤの港町で、六月十日第四四二連隊戦闘部隊に編入され、二世部隊は大きく

ふくれ上った。歩兵隊を主力に野砲大隊、機関兵中隊、野砲中隊、衛生隊、本部中隊を擁するこの四四二部隊は、ベルベデレの戦いで、ドイツ機甲部隊を破ったのをかわきりに次々と輝しい勝利をあさめ、長靴の形をしたイタリア半島を北へ北へと進み、ローマを過ぎてフィレンツェ（フロレンスの町。日本の京都のような文化都市）も開放した。低抗をつづけるドイツ軍とアルノ河をはさんで攻防をくり返したが、九月一日には遂に渡河に成功した。イタリア陸軍はすでに崩壊していたのでドイツ軍が守っていたが、抵抗は弱く時間稼ぎの感じだった。しかし戦線が北に行くに従いドイツの国境に近くなるので、ドイツ軍は激しい抵抗と反撃を示して来た。このように二世兵士がイタリア戦線で血を流して、生まれた国アメリカに忠誠を尽している時、本国では、自分たちの父母兄弟は、まだ鉄柵の收容所での生活を余儀なくされていたのだった。

二世は、アメリカ生まれでも日本人の血が流れている。世代はかわっても、大和魂と負けじ魂を受けついでいた。二世部隊は、世界で最強の日本兵に世界最高（質と量）のアメリカの武器を持たせたようなものだった。威名とどろくこの二世部隊が、急にイタリヤ引き揚を命じられ南のナポリに引きかえしたのは、九月の末だった。輸送船は地中海を進み、九月二十九日南フランスの港マルセイユに到着した。ただちに汽車とトラックに分乗し、北へ北へと進み古都ストラスブルグの近郊に陣をしいたのは、十月中半であった。四四二部隊がイタリヤに到着した六月、北フランス海岸のノーマンディに敵前上陸したアイゼンハワー・モントゴメリ両將軍の指揮する米英連合軍は、カナダ軍と共に敗走するドイツ軍を追いこの時までにはフランスの大部分を開放し、ドイツ国境に迫っていた。

四四二部隊の所屬する第七軍第三四師団も、ドイツ本土への進攻をめざして、ドイツとフランスの国境を流れるライン河の近くのヴォージュ山岳地帯にやって来たわけ

である。しかしイタリアの戦いとちがって、一歩さがれば祖国ドイツであるから、ドイツ軍は、祖国に敵を一步も踏み入れさせずと死にもぐるいの猛烈な抵抗と反撃を示し、戦況は熾烈を極めた。今まで云ってはわるいと、口に出すことをひかえていた「バンザイ」のさけび声も、敵陣への突撃命令がでるたびに二世兵士の口からどつと出た。肉眼で敵の顔を見ることがのできる肉迫戦ともなれば、勝負を左右するのは根性である。二世兵士は日系人を排斥する人たちをみかえしてやろうと云う意地も手伝って、与えられた任務をよく果し、苦難に遭遇しても進みこそすれ退きはしなかった。

「ゴー・フォア・ブローク」（当って砕けろ）を合言葉にする四四二部隊が、一週間もドイツ軍に包囲されて孤立し皆殺しにされるかと絶望視されていた「失われたテキサス部隊」（第一四一步兵連隊の第一大隊）を、四昼夜の不眠不休の戦いの末、救出に成功したのは十月三十日のことだった。二世部隊の手柄は、一早く全米

に伝わった。しかしその蔭に尊い犠牲も払われた。あちらのブロックでもこちらのブロックでも、戦死者の葬儀は、しめやかにとり行なわれた。

俊介は、息子と娘の隆子が世話になっているテキサスからの兵隊を二世部隊が救出したことに、深い因縁を感じた。実のところ日本人である子供たちを大学や高校に入れてくれたのは、親日とか同情のためではなくて、日本の二倍もある広いテキサス州に住むテキサス人は日本人を知らないからと云ってもよかった。しかし、入学させてくれない他所の州にくらべると、ありがたいことだった。月日のたつにつれて米人社会は、日本人の本当の姿を知るにつれ、又この度のような二世部隊のテキサス兵救出のような大ニュースが出て、日本人は見直され、相互の理解と信頼へと向かっていった。

この殊勲ののち、四四二部隊は再び北部イタリヤにまわされ、そこで一九四五年五月の戦争終結を迎えた。戦傷者四八八一名、戦死者六五〇名という大きな犠牲を

出したが、大統領より部隊感謝状を受けること七回という米国陸軍史上最高の榮譽に輝く部隊となった。

ルーズベルト大統領は、十一月（一九四四年）の選挙にも勝ち、一九三二年以来四回続けて当選し、前代未聞の第四期の大統領就任が確定した。日系人西部沿岸立退きを余儀なくされた者の中には、西部沿岸よりのしめ出しと立入禁止は憲法違反であると、裁判にかけられるものもあったが、中でも日系女性遠藤ミツエのケースは、アイルランド系白人弁護士ジム・パーセルにより米国大審院にまで訴訟が持ち込まれ、その判定も間近にせまっていた。大審院の決定を前もって知ったのか、十二月十七日西部防衛司令官ブラット中將は、（多分ルーズベルト大統領の命により）翌年一月二日から西部沿岸日系市民立入禁止令を解除すると発表した。翌日の十二月十八日には、大審院は米国に忠誠な市民を転住所に収容しておくことは憲法違反で

あるとの、日系人にとっては歴史的な裁決を下した。（大審院判事九人の内、賛成九、反対はなし。）更に同日WRA（戦時転住局）のマイヤー長官は、一九四五年一月二日から半年乃至一年以内に、ツールレーク以外の全転住所を閉鎖すると発表した。

この頃までに転住所から出て行った人（殆どは高校卒から三十才位までの若者）の数は三万五千人にのぼっていたが、抑留所及び転住所を合わせると、約八万人の日系人がまだ収容されていたわけである。

各転住所（ツールレークを除く）では明るる年（一九四五年、昭和二十年）を迎えると、みんなの会話はおのずから「もうすぐ閉鎖するらしいが、これからどうしようか。」に集中した。

俊介は、帰還許可のニュースを誰よりもよろこんだ。事業こそ人生の生き甲斐と感じて仕事に生きてきた俊介は、二十年程前に妻子を連れて訪日した時好きな事業から遠ざかり苦しんだより以上に、このアリゾナの地での生活は、言語に尽せぬ精神的な苦痛であった。

一月二日（一九四五年）がくると早速出ていく人もあつたが（知らない東部は少く、前に住んでいた西部が圧倒的に多かつた）俊介は二年前に、土地と一緒に家も売ってしまったので、すぐ出るわけにいかず、それらの人達がうらやましくてたまらなかつた。

アメリカに来てから加州に来るまでのしばらくの間、鉄道や植林の仕事をしたこ

とがあるが、それから以後はずっと農業に従事して来た俊介にとって、農園経営の他に再出発の道は考えられなかった。息子の幹雄も茂も二十一才をすぎているので、土地購入の際には、今までのような名儀の点での心配はなくなっていた。わが家と土地があれば、今すぐ出たいのは山々であるが、それをなくしてしまっている今としては、その想いを果すことは出来ず、俊介は中加（特にサンガー）に帰る人たちにたのんだり、サンガーの白人知人に手紙を書き、手頃な家付きの農園の売り物があれば知らせてほしいと頼んだ。日本人に売り惜しみをするのだろうか、それとも売る人がないのだろうか、首を長くして待っても返事は来ず、ただいたずらに日が経過するばかりだった。

ここに送られて来る前は、あらゆるデマがとび交ひ「一ヶ所に集めてドンと爆弾を落して皆殺しにするのではないか。」と云ううわさもあったが、時がたつにつれて

W R A の趣旨（收容者の援助）もよく分り、転住所生活をエンジョイする人も多かった。特に成長期で食べ盛りの子供をもった人たちや、今まで経済的に恵まれなかった人たち、及び仕事から解放されて遊んで暮らす生活になれてしまった人たちには、転住所閉鎖のニュースはうれしくは感じられなかった。生命の危険はなく、そまつながら住宅・学校・病院の設備が整っている他、娯楽や、外部の米人社会では砂糖や肉類も配給制になっていたのに、ここでは無制限に、しかも食事一切無料で支給されたのだから、自分の土地や帰る家のない人たちがそう思ったのは当然だった。その上、一月にロスアンゼルス・サンフランシスコ・シアトル等二十五ヶ所に設けられた再転住所事務所からの報告によると、排日の気運は依然としてわろく、住宅事情もよくなかったので、これらの人の中には転住所閉鎖の最後まで居とどまる人も多かった。しかし、これらの人達にも、西部は何十年も住みなれた土地であり、忘れることはできなかった。

ワイオミングに源を発する大河スネーク・リバーは、その名の通り蛇のようにまがりくねっているが、それがアイダホ州を東西に横断しオレゴン州との境を流れる愛央地方一帯は、スネーク・リバー・バレー（平原）又は、ツレージャバレー（宝の平原）とよばれ、ポテト（じゃがいも）、アニオン（玉ねぎ）、シュガー、ピーツ（砂糖大根）の耕作が盛んである。転住所からも以前より日系人農業労働者が、アイダホ州ナンパヤカードウエル地方に仕事に出ていたが、転住所閉鎖の時期が発表されてからも、ここを永住の地と決めて出てくる日系人家族は多かつた。

交通の要衝にあり農産物の集積地であるオンタリオ（この町はオレゴン州の東端にあり、第二軍事区域なので強制立退きによる転住所入りをまぬがれた。その上、日本人を歓迎した数少ない町の一つであり、このため日本人は、各地から多く集り、ひいては町の発展に寄与した。）から東南三マイルには、フルーツ・ランド（アイダホ州）と云う名前の町もあるほどこの地方には、アップル（りんご）・ピーチ（桃）

などを栽培するフルーツ・ランチ（果樹園）も多い。

二十年以上も果樹園を経営して来た俊介が、加州がだめならこの愛央地方に出ようかと思つたのも無理はない。春の訪れと共に、俊介は果樹園を求めて、パーミット（許可）をもちい収容所を出た。手頃なリング畑が見つかり、手付金（ダウン・ペイメント）を払つた俊介は、よろこび勇んで帰つて来た。久しぶりに見る俊介の笑顔だった。幹雄がテキサスから卒業して帰つたら、一家そろつて行くことにし、キャンプの中で知り合つた椎根、生田両氏におねがいして、それまで畑の世話をしてもらうため、早速アイダホに行つてもらつた。しばらくして椎根氏がひよっこり一人で帰つて来た。持主が心變して、畑は売らないことにした、というのであつた。りんご畑が手に入つたと思つたのも束の間、のよろこびだった。俊介が加州行きを決心したのは四月中頃だった。行き先はいわずと知れた、なつかしのサンガーであつた。頼んでいた農園の売物については、まだ返事はなかつたが待ちきれず、どう

しても自分で実地に行き、たしかめてみなければ気がおさまらないほど、俊介にはあせりの色が見えていた。

排日の空気の強い加州へ行くというので、おそるおそる汽車に乗った俊介は、長旅を終えてサンガー郊外の中本忠雄（俊介と同県の山口県出身）氏宅に落付いた。二年八月ぶりに見るすべてのものはなつかしかった。中でもすぐ近くにある前年に売った畑は、妻と共に精魂こめて荒地から農園へと仕上げたものであり、その一角にある家は、一家六人が長い間寝食を共にした所であり、立ち止りしばしの間、数々の過ぎ去りし思い出にふける俊介には、それらの畑も家も今なおわがものであるかの錯覚に落ち入り、「ようこそおかえり。」と呼びかけているように感じられるのであった。冷たい現実立ちかえった俊介は、サンガーに来た目的である農園さがしにとりかかった。転住所からもどっている友達や、白人の知人をたずねては、よい話があれば知らせてほしいと、たのみまわる日々がつづいた。

幸いにも売りたい白人がみつかった。日系人には売りおしみの傾向はあったが、安く値切って買おうというのではなく、時価を基準として先方の要求額を支払う腹の俊介であるから、話はすぐにまとまりそうな形勢にあった。ところが思わぬ方向から邪魔が入ってきた。アリゾナの収容所にまで来て、俊介の土地を買いとったパッキング・ハウスは、わるいことをしたと思つたのだろうか。俊介に帰って来てもらつては困まると邪魔をするのであつた。広いようでも農業の町サングーの白人社会はせまかつた。農産物の買いとりをするパッキング・ハウスが反対すれば出荷する側の農家は蛇の前の蛙である。せつかくまとまりかけた話もだめになり、俊介には売ってくれなかつた。引きつづいて、もう二つほど話はあつたが初めと同じ結果だつた。俊介は、ヒラ・リバーでいくら待っても返事がこなかつた理由が分つた気がした。

連合軍がドイツの首都ベルリンに進撃し、ヒットラーが本部の防空壕で自殺をと

げ（四月三十日）ドイツが降伏した日（五月八日）も過ぎてしまった。

サンガーへ来て殆どひと月になり、これではもうだめかと思っていた時である。サンガーの西、七マイルのファラーにブドウ畑が売りに出ていることが分った。平岡為次郎・ヘリー父子の農園の隣りであるので、平岡氏の紹介で持主のジエス・リース氏に面接した。リース氏は自分でも農園を耕作しているが片手間に土地売買の仕事をしており、この家のついた四十五エーカーのブドウ畑は、投資用に、二、三年前に購入しておいたとのことだった。ブドウは五月の中旬なので、枝葉はしげり、すでに小さな実をつけていたが、畑はこの年のクラブ付き（収獲も含む）で買う約束を交した。名儀は息子の幹雄にすることにした。

第八章 帰還再出発

一

収容所に帰った俊介は、加州帰還の支度にとりかかった。ここにいるのも、もうあとわずかだと思つくと、全てのものが、あれほど転住所に居ることがいやだった俊介にさえ、なつかしく感じられた。

オーストンのハイスクールを卒業した隆子が、六月になつてかえつて来た。日本人を知らない裕福でない若夫婦が、今までの黒人でも使つつもりで、隆子に家事手伝いをさせたが、いよいよ別れる時になつて、隆子にミセスが酷く使つたことを繰

り返し謝まったと云う。久し振りに父母や妹に会えて、隆子は今までの淋しさも苦
 労も吹きとんでしまふ思いがした。

このヒラリパー転住所はこの年の十一月閉鎖されると発表があつたが、一家四人
 は一足先に、それぞれ異つた想い出を胸にサヨナラした。畑夫人と娘の照枝も一緒
 に行くことになった。二年十カ月の立ち退き生活は、短いようにも又とても長いよ
 うにも感じられた。

ファアラの駅で降りて、これから住む家に向つた。アダムス・アベニュー（通
 り）に当り、それを東へ三マイル、そこでレナード・アベニューを北にまわり少
 行けば、左手にブドウ畑があつた。これが、俊介がこのたび買ったものである。そ
 の中にある家に、一行はたどりついた。

加州ファアラへ家族と共に、一九四五年六月中旬、アリゾナ州ヒラ・リパーの

キャンプから出て来た時、俊介はもう六十二才になっていた。六十才になった一九四三年一月は、サンガーの畑のことで悩んでいた時で、還暦祝など思いもしなかったが、あれからすでに二年がたってしまった。大低の人なら、そろそろ引退を考へる年令であった。強制立ち退きに遇うまでは、ここから東七マイルのサンガーに三百十五エーカーの土地代支払い済みの大果樹園を持ち、お金にも困らず、それを売る気もなかったのに、たった三年足らずの間に形勢は大きく変り、果樹園は全部自分から離れて行き、今はただ四十五エーカーのブドウ畑をもつのみという状態になつてしまつた。

我々の最大の光栄は、一度も失敗しないということではなく、倒れることに起き上るところにある。(ゴールド・スミス)

過去の因を知らんと欲せば、今世に受くるところを見よ。未来の果を知らんと

欲せば、今なせるところを見よ。

(過去現在因果経)

昔のことを思うと情なくて、愚痴も湧くだろうが、俊介には過ぎ去ったことを悔む気持ちもタイムもなかった。死ぬ時が引退であるとの信念をもっている俊介は、引退などとは夢にも思わず、「これから又がんばるぞ。」と云う仕事への情熱は、若い時と少しもかわっていなかった。

幹雄が帰って来た。六月にテキサス大学法科を卒業したが、七月にテキサス州弁護士試験があつたので、それをすませてかえって来たのだ。俊介は、若い時東京へ出て、苦学しながら好きな法律を勉強したことがあるが、自分の果せなかつた夢を幹雄が実現してくれることがうれしく、弁護士試験の結果発表が待ち遠しかった。

アリゾナの転住所からテキサスへ出てから幹雄が春休みか年末の休みに転住所へかえってきて「友達がしてるから僕も皿洗いをしようかと思う。」と云つた時、俊介

は大いにおこつて、そんなことをしたら勉強がおくれるから、ただ勉強に精を出すよう、さとしたことがあるが、俊介は、子供にお金に不自由させなかつたかわりに、一生県命勉強することを要求してきた。この俊介の願いにこたえて、幹雄は優秀な成績で大学を卒業してくれたのである。弁護士試験はむつかしいと聞いてはいたが、親の慾目で一回で通りそうな気がしてならなかつた。

これからも、もつと法律を勉強したいと云う幹雄は、入学許可を送つて来たハーバード大学に九月から入学することになった。しばらくの間ではあるが、高低のひどいブドウ畑の地ならしを、幹雄はトラクターに乗つてしてくれたが、所によっては、ブドウの根が見えるほどひどくけずつていた。

北太平洋のアツツ・キスカを失つた日本は、中部太平洋でも、マリアナ諸島のサイパン、グアム、テニヤンで全員玉砕をとげ、勝負の行方は明らかであつた。一九

四四年暮頃よりは、連日の如く中国やサイパン島から飛び立つB二九爆撃機は、昼夜を問わず日本本土に空襲を加え、軍事施設だけでなく日本中の都市は爆撃を受け、前線への軍需品補給もとだえ、一九四五年（昭和二十年）に入ると硫黄島が陥ち、フィリッピン諸島でも、マッカーサー將軍が比島奪回をめざし、マニラに進んでいった。神風特攻隊による反撃もむなしく、大艦隊に護送されて四月一日に沖繩に上陸したアメリカ海兵隊は、六月中頃までに完全に主導権をにぎってしまった。ヨーロッパからも続々と艦船と歴戦の兵士（四四二部隊は太平洋戦争には来なかった）が送られて来る上、無防備に近い日本の空をほしいままに、航空母艦から飛び立つ艦載機グラマン戦闘爆撃機（千二百機）、及び沖繩やサイパンを基地とするB二九大型爆撃機（約五百機）が日本本土空襲の規模を拡大しており、日本の敗北は確定的となりつつあった。

都市から田舎への学童（学校生徒）の集団疎開、軍需工場や施設への学徒動員と

徵用令による勤務、きびしい灯火管制、過度の召集令状による出征、空襲による罹災者の増加、相づく悲しい戦死の知らせ等、日本は、末期的症状を示していた。しかしこのような状況にもかかわらず、日本の一般国民は、歴史始まって以来敗けたことのない日本が敗けることはない、という軍部の宣伝を強く信じていたようだ。

「欲しがりません勝つまでは。」と、物資や食料事情の悪さにもたえしのび、ルーズベルト大統領が脳溢血で急死（四月十二日）した頃でさえも、これでアメリカがだめになると信じた人も多かった。（言論の自由はなく、日本が敗れるとか、敗れるかもしれないと云う者は非国民とか国賊とよばれ、官憲に逮捕された。）ベルリン郊外のポツダム宮殿で会議を開いたトルーマン・チャーチル・蒋介石・スターリンの米英中ソ、四カ国首脳は七月二十六日ポツダム宣言を発表し、日本に無条件降伏をすすめた。

日米戦争（太平洋戦争）は、八月になると最後の段階に入った。サイパン島をと

び立つた空飛ぶ要塞B二九は、世界最初の原子爆弾を八月六日広島に、三日後の八月九日には長崎に投下した。八月九日ソヴェト、ロシアは日本に宣戦を布告し、満州に侵入して来た。本土での決戦を主張して来た日本軍部も、ここに至り遂にポツダム宣言を条件付き（天皇の主権存続）で受け入れることを決定し、八月十日同盟通信社を通じて、連合国に降伏を申し込んだ。（日本国内ではこのことを国民に知らされなかった。）

トルーマン大統領は八月十一日に連合国を代表し、日本に回答を送り、天皇制度は存続してもよいが、天皇は占領軍最高司令官の命令に、絶対服従すべきことを通告した。かくして八月十四日（日本時間では八月十五日）正午、天皇陛下自らの玉音放送（ラジオ放送）により、ポツダム宣言受諾と戦争終結が告げられ、三年八月続いた太平洋戦争は、ここに日本の無条件降伏をもって終りをつけた。

俊介は持病の神経痛で、フレスノ・コミュニテイ病院に入院していたが、八月十

日以来日本の降伏は時間の問題と、新聞やラジオが報道していたので、開戦の時のように驚くことはなく、来るべきものがきたと、戦争終結を冷静に受けとった。

二

テキサス州最高裁判所から、八月二十二日付で幹雄の弁護士試験合格の通知が送られて来た。丁度その時、幹雄は畑に出ていたが、証書を受け取ってうれしくてたまらず息子の帰りを待ちきれないパパの俊介は、ニコニコして畑まで持ってきた。

「御馳走をして祝おう」と、云ったが、その顔には、息子のこの度の成果に対する喜びと誇りがあふれていた。

ハーバード大学は、アメリカの名門中の名門大学である。経済的なことは、一切心配しなくてもよいから、行きたければしっかり勉強して来なさいと云う俊介の強

い後押しもあり、八月末幹雄は、マサチューセッツ州ケンブリッジにあるあこがれのハーバード大学めざして出かけて行った。

九月になると、長女の隆子は、リードレー・カレッジへ入学し、家から十マイル位なので、下宿はせず家から通学しはじめた。高校最終年を迎えた次女の寿子は、フアーラー・ハイスクール（高校）に通うことになった。初収穫のぶどうは、天日を利用して干ぶどうにした。油紙に並べたり、包んだり、なかなか手間のかかる仕事だった。幸い雨にあわず、帰還第一年は無事に取り入れがすんだ。

幹雄がハーバードに入って一学期もすまないのに、徴兵令がやってきた。第二次世界大戦は、ヨーロッパ、太平洋戦線ともに終了していたのに、新進の弁護士幹雄に徴兵令がきたのは、それ相当の理由があったようだ。八月に最高司令官として日本に着任したマッカーサー將軍を頭とする連合国軍は、ただちに日本各地に進駐を開始し、日本軍隊の武装解除を行なうと共に、アメリカ民主主義（国民の、国民によ

る、国民のための政治）による日本の旧来の制度の改革が計画された。天皇は今までのように神様ではなくて、人間であるとの「人間宣言」、国家の主権は国民にあるとの新憲法制定、農地改革の実施、戦争犯罪者の極東軍事裁判、学校制度の改革等次々に実施され、日本歴史の上で、明治維新にもおとらない変動期を迎えていたわけである。

この時期に当たり、各分野から数多くの専門家が、連合国の占領支配下にある日本へ送られ、新日本建設の指導をおこなった。日本人を父母に持ち、日本語がわかり、しかも弁護士資格のある幹雄は、こんな仕事にはあつらえ向きであった。一九四五年（昭和二十年）十二月初め、入隊すると、情報関係の学校へ少し行き、十二月下旬には、早くも日本に送られた。空襲により、いたる所焼け野原がつづき、そまつなバラック小屋や、戦災浮浪児や、闇市場の多かつた東京に着いた幹雄は、これ

から六年間、GHQにて勤務し、ようやく戦争の傷跡がうすれ復興が規道に乗ってきた一九五一年暮にアメリカに帰るまで滞在した。この間に、幹雄は一九四八年十月十日辺見とき嬢と結婚し、翌年の七月十二日には長男バビー・満が誕生した。

幹雄が日本に行ってしまったてすぐ、一九四六年の正月がやってくると、次男の茂がオーストンから帰ってきた。テキサス大学で、メカニカル・エンジニアリング（機械工学科）を専攻してきたが、夏休みもなしに勉強したので三年間で卒業できたのだった。俊介は、茂の帰りがとてもうれしかった。幹雄が、俊介の若い日の夢を實現してくれたとすれば、茂は、農園経営の後継ぎをしてくれるからだ。親には成長する子供が楽しみであるように、農業にたずさわるものにとり作物の成長する様をみることは、大きなよろこびである。人付き合いの複雑さにくらべると単純で、したことに対する反応がすなおに表われてくる。自分の精魂と技術をためすこれ以上のチャレンジはない。戦争までは、大規模にやって成功した俊介は、もう一度往年

の勢いを回復したいと思つて、茂の帰還がうれしかった。

俊介と茂の共同経営が始まった。畑には、四十五エーカー全部に、タムソン種とマスカット種が植えてあつたが、将来の市場はあまり良くないと予想して、二十エーカーのマスカットを、サンタローサ種のプラム（酢桃）畑にすることにし、地ならし（スクレープ）した後、二月にぶどうを引き抜き苗木を植えた。

原料の輸入がとだえた上、本州、四国、九州、北海道に領土を限られて、せまくなつた所へ、台湾、満州、韓国（朝鮮）、南樺太等の旧領土及び、中国や南方各地の戦地から引き揚げてくる邦人や復員兵士により、人口が急激に増加した日本は、極端な物資不足と食糧難に見舞われていた。都会は勿論、山口の田舎でさえ困つてゐるといふ幹雄の便りを受け取り、俊介と自分の実家や親戚へ、トシは砂糖、石鹼、菓子（チューインガム、チョコレート、飴玉等）、かんずめ、コーヒー、リプトンスープ、粉ミルク、古着などを送つた。

収容所からもどつて、まだ日も浅い日系人の中には、毎日の生活にも苦しい人たちもあつたが、そんな裕福でない人たちでさえも、戦争に負けた日本にいる父母、兄弟は、もっと苦しかりうと、小包を送つたのだつた。アメリカが開発した（当時高価な）結核の新薬ストレプトマイシンを送り、不治の病といわれていた結核に悩む人達の命を救つた人も多かつた。収容所から日系人は、一九四五年夏以来、連続と住みなれた加州へもどつてきたが、自分の家を持っていなかつた人たちは、住む所が見つかるまで、家のある友達や、親戚の家に住ませてもらつたり、中加各地の宿屋に早がわりした仏教会、日系キリスト教会、日系人ホールなどに、寄宿していた。（この状態は、一九四六年夏までつづく）これらの仮の宿や臨時ホステルの中でもやはり、真心こもつた日本行き小包みの荷造りは、せつせと行なわれていた。

日本びいきの為か、又は市民を市民として取り扱かわないアメリカのやり方に不

満なのか、問題を起しつづけ、八百人もニューメキシコ州サンタフェの敵性外人留所（インターンメントキャンプ）に送り出され、また五千人をこえる二世がアメリカ国籍離脱までしたツールレーク転住所も、一九四六年三月二十一日をもって閉鎖され、太平洋戦争以来十一万人余りの日系人（日本人の血の入っている人、即ち一世だけでなく、二世、三世も含む）を収容した十転住所は、ここに全部閉鎖された。WRA局の集計によると、転住所に関する統計は、左の如くである。

出生五千九百八十一人、結婚二千百二十組

死亡千八百六十二人、軍隊入隊三千六百人

日本への引き揚者四千七百二十四

西部沿岸帰還五万四千百二十七

その他米全国各地へ転出五万二千七百九十八

抑留所へ移送三千百二十一

外の養老院病院千三百二十二

転住所建設費七千万ドル

転住所維持費一億五千万ドル

西部沿岸日系人立ち退き費用合計三億五千万ドル

プラムを植えたが、まだほんの苗木なので手間はかからなかった。その上、広さがサンガラの時とくらべると随分せまいので、畑の仕事のひまな時には、家で遊んでいたくないトシは、他人の農園へイチゴつみやフルーツとり、ミセス畑と日やとい仕事（デーウォーク）に出かけた。もうすぐやってくるぶどうの収穫期には、人を沢山やとう側のトシは、使われる人の気持ちがよく分り、教えられるところが多かった。

ファアラール・ハイスクールを卒業した次女の寿子は、九月にはリードレー短大に

入学した。（卒業一九四八年六月）一般の標準から云うと小さくはないが、ここフアーラーの農園は、サンガアの畑と比べると規模が一まわり小さかった。でも現金で全額を支払ってしまったので、子供たちの教育費に困ることはなかった。貧乏していたら、借金をしてでも子供を大学へやる気の俊介だから、子供の教育のためなら、いくら要っても少しも惜しいとは思わなかった。

三

帰還当時は、日系人に対するいやがらせの発砲事件も中加各地に相ついで起ったほど、排日の風潮が強かった時に、日本人の俊介に売ってくれた土地だから、一等地でないことは明白である。しかし何事もベストを好む俊介は、この畑を誰にもひけをとらない農園に仕上げようと、地ならし、灌漑用のパイプの敷設をするほか肥

料の散布、果樹の手入れに研究をおこたらなかった。その上、一からやりなおしのこととて、トラクター等農耕機械類の購入もあり、ファアラの四十五エーカー畑からだけの収入では、裕福な暮らしは無理だった。しかし、渡米以来、大事業家を夢みて、この度の戦争が始まる前には大農園を持って、日系人一世の成功者の一人であった俊介は、他の日系人のみならず、米人社会においても格段の経済的余裕を持っていた。職業は農業であっても、実業家と自負する俊介は、サンガー時代あらゆる事業に投資をし、農業経営は、事業プランの一端にしかすぎないように思えたこともある。銀行に預けておくのは、次の年の農園運営費だけで、残余金は全部投資（インベスト）した。投資と云っても、金、銀、タングステン等の金属鉱山や、油田への直接投資だった。友人や知人の勧誘により投資をするのだが、これほど度胸のよい人はいないと知人がおどろく程、大金をどんつきこんだ。戦前のことだが、サンガーの西南八十マイルのコリンガに石油がでるかもしれないと、八十五

カーの権利金一万ドルをポケットに入れて契約に出かけたこともあった。(ここは石油は出なかった。) つぶれてしまったところもあつたが、思いがけなく金(ゴールド)が出て、売れば莫大な大金がころげこむ金鉱ももっていた。

金持ちでありながら、それを鼻にかけない俊介とトシは、ファラーに来てからも、相かわらず朝は五時に起きて夕方まで黙々と働いた。機械化農業とはいえ、機械が仕事を全部してくれるわけではなく、激しい労働は、仕事が好きでなければ到底出来ることではなかった。次男の茂は、テキサスから帰ってからよく手伝っていたが、一九四八年召集令状が来て陸軍に入隊した。そして一年たった翌年(一九四九年)一月、除隊となり帰ってきた。

ネバダ州リノから、北東に向つて約二百マイル行ったあたりに広がるパラダイスバレー地方に、農業都市建設の雄大な計画をたてたのは、この時期であつた。三人の米人投資家と共同出資で、四万エーカーの砂漠を購入し、日系人入植者を入れて

開拓していこうというものだった。一口に四万エーカー（一万六千町歩）といつても、広さの実感は湧いてこないが実に広大な土地だった。

資金の調達にとりかかった。ベーカーズフィールド市方面は、油田が多い。加州にかえって間もない一九四六年、友達の言葉を信じて、ベーカーズフィールドの西南六十マイルのクヤマバレーの五千エーカーにわたる油田試掘事業に投資したが、間もなく、砂漠から油田が掘り当てられ、一九四七年から、ギャソリンの原油（黒い黄金とも云う）が出てきたので、株価は馬鹿上昇していた。リッチフィールド石油会社が油田の管理を受け持っていた。

戦争による強制立ち退き時代、半強制的にサンガーの土地を売却して得たお金は、四人の子供の教育費とファラーの土地代に随分遣ったが、それでもまだかなり残っていたので投資していたのだった。俊介は、そのお金とクヤマの油田の株の一部を売ったお金で、パラダイスバレーの新事業の筆頭株主となった。砂漠には、水の

ないのが普通なのに、掘り下げてポンプでくみ上げれば、水に恵まれ、農業も十分可能な土地であった。

テキサス大学で、機械科を専攻卒業した茂が、ビジネス（商科）を勉強すべく、パークレーにある加州大学三年生に編入学したのは、一九四九年九月だった。一九四七年六月、リードレー・カレッジを卒業した長女隆子は、フレスノ州立大学へ一学期行ったのち、次女寿子と共に、一九四八年九月より、サンフランシスコの加州大学看護婦科に入学していたので、茂の出でしまった時、家には俊介とトシのたった二人きりになってしまった。二人だけになったのは、三十三年ぶりだった。一九一六年トシが、写真結婚で渡米し、一九二二年長男が生まれるまで、二人で暮らしたあの時と比べると、二人は年をとったものだ、その間に二人がたどった苦難の道は、顔にきざまれた皺の数とその深さ、ゴツゴツした手が何よりも如実に物語っているようだった。俊介はこの年（一九四九年）六十六才、トシは五十三才だったが、二

人は静かに過去を追憶し、互いに相手の理解と協力を感謝すると共に、四人の子供たちが立派に育ってくれたことに対する悦びと、幸福感にひたつた。

まねが出来にくく、しかもよい品物の市場の価格は、良好又は安定しているのが、経済の法則である。このため生産物の改良と生産機構の改善は、日夜を問わず続けられている。果樹園（フルーツ・ランチ）経営においても、同じである。フルーツ・ランチと云えば、ピーチ（桃）、プラム（すもも）、ぶどうにきまっていたこの地方に、ネクタリンと云うピーチとプラムの合種による新しい品種が、出まわってきたのは一九四七年頃である。大きさは、ピーチのように大きく、皮はプラムのようすべすべし、見掛けがともきれいであり、味は白人好みの酸味がかつた適度の甘さがあり、それに中味はかたく長もちするという幾多の長所を持ったこのネクタリンは、果樹栽培者にとっては、大きな魅力となった。年令は、七十近くなっていないでも気持はまだ青年の俊介が、これをみのがす筈はなかった。かなりの収穫までに

五年もかかり、苗木代とは別に、一本につきローイアリテイ料（特許権使用料）を三ドル五十セント支払わねばならないので、農園全部に植えることは出来なかったが、まず十エーカーのぶどうをひきぬき、ネクタリンを植えたのは、一九五〇年の早春のことだった。

四

二年間のさみしい日がすぎて、子供たちがみんな帰ってくる一九五一年がやって来た。隆子と寿子の内山姉妹は、加州大学看護婦科を仲よく卒業し、パブリック・ヘルス・ナース（公衆保健看護婦）の資格を得て、フレスノ郡立病院に勤めだした。俊介とトシは、四人の子供に大学教育をつけさせて、一応親としての責任を果たしたわけだ。同じ六月茂は、パークレー加州大学商学部を卒業してかえり、農園事業拡

張にとりかかった。

世界は、第二次世界大戦終了以来、自由主義陣営と共産主義陣営に分れて、冷戦を展開してきたが、アメリカの経済援助により復興した日本は、アメリカを中心とする自由主義陣営の一員として、太平洋地域におけるかくべからざる重要な役割を背負っていた。九月四日から八日まで、アメリカ・サンフランシスコにて、世界の中立及び自由主義陣営五十二ヶ国が参加し行なわれた対日講和会議に、吉田茂首相を全権として出席した日本は、各国と平和条約を結び、再び国際社会への仲間入りをしたが、それから三ヶ月すぎた十二月十日、幹雄が妻ときと長男バビーをつれて帰ってきた。俊介は、初孫が見たくて、朝鮮動乱勃発頃より、手紙を書いたたびに、帰れ、帰れと便りをしていたが、バビーはもう二才半になっていた。元氣一杯で走りまわるし、江戸っ子弁でしゃべりまくるし、一夜にして内山一家の人気者となつた。

年が明けた一九五二年、幹雄は、加州弁護士の資格をとるための勉強に、パロアルトにあるスタンフォード大学に入学した。テキサス州弁護士試験に合格していたが、アメリカでは、他の州では通用しないので、加州（カリフォルニア）で開業したい幹雄には、加州の弁護士免許が必要だったのだ。翌年の一九五三年七月に、加州弁護士試験を受け合格した幹雄は、フレスノ市内、ニールソン法律事務所につとめることになった。そして一九五五年ニールソン氏が死亡し、独立して、ファアラ―とフレスノの二ヶ所に内山法律事務所を開くまで三年間、ニールソン氏の下で経験を積んでいた。

日系人立ち退き損害賠償法案（一九四八年成立、一九五一年修正）に引続き、一九五二年四月には、加州の日系人を悩ましたつづけた加州外人土地法に、憲法違反の判決が下った。更に六月には、ウォルター・マツカラ移民帰化法が、トルーマン大統領の拒否権をおしきって制定され、一九二四年の差別的法律は廃止され、日本

よりの移民の道が開けると共に、移民としてこの国にある一世の米国への帰化の道も開かれた。戦前のことを考えると、信じられないような時勢の変り方だった。このような情勢好転の背後にある正岡マイクを中心とする全米市民協会の努力や、日系人の運動資金援助を忘れてはならない。

振りかえってみると、内山一家六人が一緒になることは、九年ぶりのことだった。ヒラリバーの転住所から茂がテキサスに出て行って以来、次から次へと、子供たちが学校や兵役に出て行ったので、今まで皆が揃うことはなかった。四人の子供を前にした俊介は、昔と少しもかわっていなかった。このたびは、幹雄の妻子を含んだ一同に対して、夕食後は得意の長談義がまた始まった。

戦争のあとにつきものの不景気で、みんな金づまりの時、丁度油田が当たってお金があった俊介は、二人の白人と共同でネバダ州パラダイス・バレーの土地を買った

が、その土地は初めに計画した通りには、開発は進んでいかなかった。四万エーカーの広さは、フアーラーの俊介の四十五エーカーの畑の九百倍に当るわけだ。四十五エーカーの耕作でも小農ではなく、野菜やイチゴ作りの人は二十エーカーもあればよいのだから、四万エーカーの土地は、広くて想像しがたいほどの広さである。水を持ちかえり、フレスノの農業試験場で調べてもらった結果、農作物栽培可能とすることで、借地耕作をする人を探してきたが、この広大な土地を耕作するには、大資本が必要であり、少々の資本を持った人ではだめだった。一九四九年から三人（一人は日系人）が試みたが、資金不足でつづかなかつた。幹雄が日本から帰って来た時には、ネバタの事業は、進行するどころか反対に最悪の状態に近ずきつつあった。前年より借地耕作していた者が、経営が続かず中止したのだが、その間に生じた負債だけでなく、契約不履行の罰として、途方もない損害賠償金十六万ドルを請求し、フレスノ地方高等裁判所に裁判を持ちこんできた。

判決は、以外にも内山側の敗訴となった。臨時株主総会が開かれた。最初は三人だったが、その中一人は尻ごみしてひいてしまい持ち株を人に売ったので、この時には株主は、随分ふえていた。「土地を売ってしまつて、賠償金を支払い、残りは分散しよう」と、云う意見が強く、「離さない方がよい。あくまで法廷で闘おう」と云う俊介は、孤立の状態にあつた。しかし俊介同様三分の一の大株主である白人の一人が、俊介を支持する側にまわつたので、これからの処置は、幹雄に任せられることになつた。加州弁護士の免状をもらったばかりの若き（三十才）弁護士幹雄は、類似の前例ケースを調べた結果、逆訴することにした。判決が云いわたされた。前の地方裁判所の判定をくつがえし、内山側の勝訴となつた。俊介は、サンガの土地のように、手離さなくてもよくなつたことがうれしく、その上、息子が裁判で自分側を代表してくれたことが、何よりもうれしかった。問題はひとまず解決したが、俊介にとって、パラダイス・バレーがその名の通り楽園の平原となるのは、十

年近くも後の一九七一年のことだった。それまで俊介は、毎年、土地の税金未納者の立て替えをしたり、売ってしまいたい人をなだめたり、苦勞は続いた。

ネクタリンだけの果樹園を計画してから、毎年苗木を植えたので、ぶどうとプラムは、随分少なくなり、一九五〇年に植えた木は、収穫は少ないが、もう実をつけるまでになった。平坦にした後パイプも入れたので一段落した俊介は、農園拡張を主張しつづける茂の要求にこたえて、一九五三年秋、八十一エーカーのワインぶどう畑を、年割払いで購入することにした。家から十マイルも東に行ったりドリー市の南にあったが、二人は、ひと目ぼれしてしまったのだ。一九五二年に排日土地法が廃止されたので、土地の名義は、息子のほかに、今まで許されなかった自分の名前も入れて共同名義にした。立派なぶどうの木が並んでいたが、ネクタリン園にする計画の内山父子は、早速翌年（一九五四年）春、ぶどうの間に苗木を植えた。サンガー時代からの得意の方策だった。ネクタリンは、他のフルーツ類と比べて値

段はよいが、植えてから収穫までの期間が長い。ぶどう四年、プラム四年、ピーチも四年位だが、ネクタリンは、かなりとれるまでに、少なくとも五年はかかる。その上一本について、三ドル以上のローヤリテイ料を特許を取った人に支払わなければならぬ。五年間支出はあるが、収入がないのだから、ネクタリン栽培は、かなりの資金がなければ始められない。作って見て分ることだが、同じフルーツの木でも、プラムやピーチよりも、スプレーイ（虫よけ噴布）は複雑で、作り方も難しい。

農園経営が軌道に乗ってきた一九五六年、俊介は、再び茂の願いを聞いて、リードレーの隣の土地六十エーカーを購入した。オーブン・ランド（何も植えてない）なので、全部ネクタリンを植えた。一エーカーに百本位植えられるから、全部で六千本植えたわけだ。二百エーカー近くのネクタリン園成就の夢は、遠いことではなくなつた。辛棒しなければならぬのは、もうあとわずかとなつた。

第九章 恵まれて

—

俊介とトシは、知人の子供の結婚式に招待されて出席することはあったが、自分の子供たちの結婚式には縁が遠かった。長男の幹雄は、東京で結婚して帰ってきたので心配はなかったが、残りの三人は、結婚適齢期がきているのに、本人たちは一向平気な顔をしているので、内心やきもきしていた。トシは、二十才で結婚した自分のことを思い、特に女は婚期が遅れるといけないと思うのだが、大学を出てしかも病院でよい仕事をしている隆子と寿子には、縁談は沢山あったが、適当な男性が

なかなかあらわれてこなかった。茂もリードレーの畑を買った時には、三十才になつていたので、年令に不足はなかった。俊介に、口ごたえをしたことがない内山の子供のことだから、俊介がイエスといえ、縁談が成立すると思ひ、俊介に、仲人を通したり、又時には直接縁談を持って来る人もあつた。しかし俊介は、結婚にについては仲々進歩的で、あくまで本人次第と割り切つていたので、決して押しつけることはなかつた。

縁談はまとまりかけると、うそのように進んだ。寿子からはじまり、隆子、そして茂と、三人は三年つづけて三月に結婚した。

○次女の寿子は一九五六年三月、フレスノの木村ジョージ氏と結婚。

男児アレックス、一九五七年一月誕生

女児グレーシー、一九六三年二月誕生

○長女隆子は、一九五七年三月、バイセリアの隅田ジャック氏と結婚。

て
れ
ま
恵

男児ステイブン、一九五九年十一月誕生

女児パトリシア、一九六二年十一月誕生

男児ケネス、一九六七年一月誕生

○次男茂は、一九五八年三月、フレスノの桑本輝子嬢と結婚。

男児バンス

一 双生児で一九五八年十二月誕生

女児マーシャ

男児ゴードン、一九六二年八月誕生

女児アリスン、一九六五年四月誕生

今まで孫は、バビー一人きりだったが、その後一九五七年より、一九六七年まで、毎年のように誕生し、幹雄の妻ときが一九五七年五月出産した次男ラッソーを合わせる、孫は合計十一人になった。俊介と、トシは、親の慾目かもしれないが、四

人の子供たちがみんな立派に成人してくれたことを誇りに思い、四人共良き配偶者に恵まれ、それぞれ幸せな家庭を持った姿をみて、今まで味わったことのない幸福感を覚えた。

二

三十二年ぶりに、俊介とトシの二人が、祖国日本の土地を踏んだのは、一九五八年九月だった。昔の船旅とくらべると、このたびの空の旅は、うそのように早くもあり、また快適そのものだった。帰化市民となっていたため、アメリカ政府発効のパスポートを持つての訪日だった。

俊介と、トシがアメリカ市民になろうと、帰化申請をして帰化市民となったのは、四年前の一九五四年八月十八日だった。日本に生まれ、日本で育ち、この国へ来て

からは、日本人なるが故に言い知れぬ排斥を受けてきた俊介とトシが（日本の国籍をすてて）、米國に帰化する気持ちになった理由は、俊介とトシが、子供たちの住むアメリカに骨を埋める決意をしたこと、過去のまちがいを認めて充分ではなかったが、日系人立ち退きに関して損害賠償を支払ったアメリカの良識に心打たれたこと、及び内山一家のアメリカから受けている恩恵の大きさに気づいたこと等だった。

戸籍の上では、アメリカ人でも、心は日本人であることを捨てきれず、ロスアンゼルス（ロサンゼルス）の渋谷旅行社主催の観光団に加わり、東京羽田空港に着いた時、「日本に来た」と、いうよりも「日本に帰った」という感じをおさえることはできなかった。十年を一昔とすれば、三十二年の過ぎ去った歲月は長かった。俊介とトシは、再会した姉妹や弟と、時間のたつのも忘れて話したが、双方ともあれも聞いてもらいたいこれも聞いてもらいたい、あれも聞きたいこれも聞きたいと、あまりにも話題が多くて、どれから先に話してよいか戸惑うほどだった。どっさりたまった話は、何

時終るとも知れなかつた。

西医学（西式健康法）は、西勝造創始による独特の健康法で、心身の健康と調和を増進しようとするものであり、その実践者は日本はもとより世界各国に広がっている。皮膚、栄養、肢、精神の四つ（四大健康素因）を正しく維持すれば、健康な一生を送ることができると説き、そのためには、六大法則（平牀、硬枕、金魚運動、毛管運動、合掌合蹠、背腹運動）を中心に、足及び体全体の各種運動、裸療法、温冷浴、生野菜を主とする食事療法、精神の修養（度量、慈悲、感謝、忍耐、努力、太平、無常、親睦、柔和、静観等十徳目）を忠実に実行することをすすめている。

西式と云うと「内山さん」の名前が浮んでくるほど、西医学と内山夫妻の関係は密接である。俊介が初めて、西先生に会ったのは、戦前サンガーにいた一九三七年頃、中加来訪の西先生の講演をききに行った時である。とても良いものだと思ひ、

恵まれて

もつと生野菜を食べて運動をせねばならぬと思い、始めてはみたが、時がたつにつれて、だんだんとおろそかになっていった。サンガールのフワフワしたやわらかい土に比べると、ファーラーの土はかたく、ひざの神経痛を持病に持つ俊介には、とてもこたえた。ファーラーに来て二カ月あとに迎えた終戦の年八月に入院してからは、入院こそしなかったが、ひざの痛みにはたえず悩まされつづけた。神経痛の痛みを止める薬はあっても、神経痛そのものを根本的になおす薬はないのだから始末がわるかった。

一九五〇年、フレスノの西北八十マイルのドスパロスに、米を作り成功したライス・キング（米作全米一）の国府田敬三郎氏の招待により渡米された西先生が、フレスノ別院で一週間、講演と講習を開かれた時、俊介は、妻と共に何はさておき出席した。すっかり西先生に心酔した二人は、これを契機に、西式による体质改善を決意したのだった。俊介は、トシと結婚した時、煙草を一日に二箱もすっていて、

それ以来四十年近くもずっとやめることはなかったが、煙草の害毒をきいてからきっぱりやめた。定められた生活様式による二人の新しい生活が始まった。日本より取りよせた本を読むほか、根気よく続けた結果、効果ははっきりとあらわれた。体に抵抗力がついたのか、風邪もひかなくなり、体全体が若返ったようだった。わることだった俊介のひざは、温浴と水浴を交互に行なう温冷浴により、随分よくなっていた。又、キャンプから出て来た当時の俊介の贅肉（肥りすぎ）もなくなった。

この度の訪日の目的は、故郷訪問と、尊敬する西先生から、直接指導を受けることだった。東京市ヶ谷の西式本部の西健康学院に、ひきかえした内山夫婦は、日本の滞在の半分に当る四週間で、みっちり講習を受け、「西医学健康法の原理と応用に関する課程を修得」し、二人そろって見事に、一級司教の免状を授与された。この後、一九六三年、一九六五年、一九六七年、一九六八年、一九七一年、一九七二年に訪日をしたが、家では六大法則にもとずく体操と食事療法をおこない、

本部に立ち寄り研修を続けたので、名実共に内山夫妻は、中加に於ける西式医学の第一人者となった。

リードレのネクタリン園八十エーカーは、植えたネクタリンの種類がわるく、売れないのでマーケット市場価格が低く、仕方なく他の種類に接ぎ木せねばならなくて予定はくるったが、一九六二年頃までには収穫出来るようになり、ファアラードとリードレの両方を合わせて百八十五エーカーは、全部すばらしいネクタリンの木がそろった。需要に比べて、栽培面積が少ないので、毎年値段はよく幸運が続いた。

三

俊介は、古稀（七十才）も喜寿（七十七才）もすぎてしまったが、五十年前の開拓時代と少しもかわらず、毎日朝は五時に起き、妻と共に体操をした後、泥と汗に

まみれて仕事に精を出した。俊介は、結婚以来、世間の人がうらやむ程妻想いで、外出する時は事情の許す限り妻と一緒にだった。この習慣は年をとってからも少しも変わらず、催し物の見物、お寺まいりから日本行きにいたるまで、妻をおいて一人で行くようなことはしたことがなかった。でも事業投資のことに関しては、以前同様トシには、何の相談もしなかった。息子と娘は、みんな結婚しそれぞれ子供（俊介にとっては孫）もできて、親の責任が軽くなった俊介は、ニューヨークの株式新聞「ウォール・ストリート・ジャーナル」を購読して、有望株をみつけると投資したり、パームデールやロスアンゼルス近郊の住宅地や工業予定地に、余剰金はどしどし投資した。俊介は、自分が仕事をせず遊んでいるのがきらいなのと同じように、お金も（銀行に）遊ばせておくことが大きらいだったのだ。

恵 ま れ て
百八十五エーカーの土地持ちは、大地主の部に属し、しかもそれが全部ネクタリ園であるから、他人からみればうらやましい限りであるが、血気盛りの茂は、田

畑をもつとふやそうと何回も父に話を持ちかけろのだが、俊介は、自分がたどってきた道をふりかえり、「これ以上の農園を茂一人で責任をもつことはかわいそうだとどうしても同意しなかった。

孫の成長と月日のたつのは早いもので、一九六七年六月には、初孫バビーが、ハイスクールを卒業することになった。うれしくてたまらない俊介は、これを記念して何か有意義なことを始めたいと思い、幹雄と相談して、「内山ジョージ（俊介の英語名）奨学資金」を樹立することにした。フアーラー高等学校卒業生の優等生の中で大学に進み、医科、歯科、法科又はそれに関連した領域の勉学を希望する者一名に対し、百五十ドルの奨学資金が、卒業式の時手渡されることになった。（俊介が亡くなった現在も、基金から毎年支給されている）詩吟を友達のすすめで習い始めたのも、この頃だった。観水流米国錦友会サンオキン支部に属し、週に一晚習い

に行つた。八十五才の手習いであつたが、みんなから上手だとほめてもらった。俊介は、この詩吟クラスへ通うことにより、歴史的な重大事件や、偉人の伝記を深く学ぶ機会を得たことを、非常によろこんだ。

日本人は、すばらしい人種である。戦前の数々の悪条件、戦争中の制約された収容所生活、戦後の再出発を通じ、独特の適応性を發揮して苦しい事態に対処した。日本は大昔から毎年、台風や、地震、水害等の天災に見舞われ、どんな災害に出会つても、それから立ち上る国民性が出ていて、一世は勿論のこと、アメリカで生まれた二世や三世にも、その精神がしみ込んでいるのだろうか。起上りこぼしのよ
うに、どれほど打ちひしがれても、むくむくと立ち上つていった。
戦後の再出発の道はけわしかったが、日系人が、こつこつと築き上げた信用は、遂
に米人社会にも認められ、以前の日系人に対するまちがった見解や、嫌悪心は、信
恵

頼と友好の感情へと大きな方向転換をもたらしした。一世の親たちの期待をになう二世や三世の中には、米人社会で活躍する者も多くなつた。戦前は、大学を出ても日本人の血があるからとの理由で良い仕事はもらえなかつたが、今や日系人に対する排斥は皆無に近く、その人の実力に応じて力をためし活躍するチャンスを与えられるようになった。(昨日までは敵であつた日本の移民の子を、今日は友として実力を認めてくれる開放的なアメリカ人気性のよい所である。)一世の人たちには、思いも及ばなかつた役所、学校、会社、農園、病院、事務所等、アメリカ社会のあらゆる分野にわたり、二世、三世は、重要な位置を占め貢献するようになった。この様な時代の流れの中で長男幹雄が、判事(ジャッジ)に任命されたのは一九六八年の夏だった。そしてフアーラー区域の法廷を受け持つことになった。幹雄は、相変らずフレスノとフアーラーに事務所を持ち、弁護士の仕事をするかたわら、週に何回か開かれる裁判に出廷し裁定を下すことになった。日系人がアメリカ社会で要職に着

くことができるといっても、判事になったのは日系人の多い加州でもこの時までにはロスアンゼルスやジョン相磯弁護士しかなく、勿論中加では日系人初めての名誉であり、パパの俊介のよろこびは言語に尽せぬものがあつた。

ネバダ州パラダイスバレーの所有地は、俊介の根性と幹雄の努力のおかげで、まだ持っていて借地にしていたが、一九七一年に買手があり、四万エーカーの内、九千エーカー（三千五百町歩）を年賦支払いで売ることにした。よい値段で売れ、株主（内山三の一、白人三の二）の白人は内山父子に大変感謝した。

ネバダ州は、北はオレゴン州とアイダホ州に接しているが、パラダイスバレーの町は、ネバダ州北部にあり、わずか五十マイルでポテト（じゃがいも）で有名なアイダホ州である。加州の農業の感覚からいくと九千エーカーは広大な土地であるが、アイダホでポテトをつくっていて、更にポテトを栽培しようと広い土地を求めて来

たこの白人グレコ氏は、ケタはずれの大事業者であつた。資本と道具と経験と度胸の四拍子揃つた新しい買手は、収獲が良い上に、マーケットの値段も良く、今では大貯蔵倉庫を数棟建て並べ、土地をまだ買ひ足そうかという状態にある。

第十章 挽歌

—

内山俊介夫妻が戦後第六回目の日本訪問に出かけたのは、一九七一年（昭和四十六年）十月初旬のことだった。俊介は明治十六年生まれだから、満八十八才になり米寿のおめでたい年だった。若い時からの激しい肉体労働と、二十年も西式健康法による体操と食事によりきたえあげた体は、どう見ても二十才は若くみえ、米寿を迎えた人には思えなかった。しかし山口の故郷に帰った俊介は、何故かいつもとは違っていた。故郷に再び訪れることのない事を虫の知らせで知ったのか、俊介は早く

死んだ父母のお墓を新しく立派に作ってもらうことを頼んで帰って行った。ふるさととの別れは、何時でも淋しいが、この年は、今までになく格別に淋しい別れだった。

ここに立ちて

さらばと別れを告げん

山のかげの故郷

静かに眠れ

夕日は落ちて

たそがれたり

さらば故郷、さらば

故郷、故郷さらば

小学唱歌（故郷を離るる歌）

「出来る人は、しなくては」と、人にたのまれたり、良いと思つたことや人のためになることは、お金をこころよく出す金持ちであつた俊介は、一九七三年四月、東京から西医学の権威者である渡辺正医学博士を十日間招待し、自分のためになつたこの健康法を、他の人にも分ちたいと考えた。内山家における個人指導のほか、プレスノ別院とファーラー仏教会において講演と実習がおこなわれ、健康に関心のある多くの人たちによろこばれた。俊介は、旅費と滞在費一切を負担したが、何時もと同じく自分のしていることを鼻にかけていばるような態度は、微塵も示さなかつた。

歌

挽

同年四月末、全米仏教婦人総連盟大会が、シアトルで二日間催されることになり

中加からも、大会終了後三泊四日のカナダ観光旅行を織り込んで、参加者を募集した。配偶者も参加してよいというので、六十五年前日本から初めて着いた港町バンクーバー・そしてアメリカでの最初の二、三ヶ月を過ぎたシアトルも、観光のスケジュールに含まれているのに心ひかれた俊介は、妻と共に申しこんだ。ブリテイッシュ・ユコロンビア州の州庁のあるビクトリア市から、瀬戸内海を思わせる波静かで、小さな島が点々とあらわれる内海を、北上する時、大きなフェリーボート（渡し船）のデッキから六十五年の昔をふりかえり、バンクーバーの港をなつかしげに見入る俊介の姿は印象的だった。

俊介は、戦後、帰化法と土地法の改正運動及び日系人団体や地域社会の活動に対して、経済的な援助を惜しまなかったが、それが認められて、一九六〇年には日本政府より日系同胞発展と日米親善に寄与したと、日米修交百年記念に際して表彰状、一九六二年には高松宮を名誉総裁とする大日本農会より、産業、日米親善、民権擁

護に貢献したと表彰状、一九六四年には同じく大日本農会より緑白授有効章、一九六九年には日本人米本土移住百年記念に当り、日本週間名誉委員長のサンフランシスコ総領事島静一氏より感謝状をもらっていた。

俊介は、あまりにも経済的に豊かであったため、俊介をよく知らない人の中には誤解をする人もいたが、したい事に精魂をうちこむ主義の俊介に、仕事そのものが第一義であり、第二義のお金は副産物としてひとりでに入ってきたのであった。だから俊介は、自分のしたいことや、良いと思うことがあれば、お金を問題とせずやり通す性分をもっていた。この度の渡辺博士招待も又、この気持ちの現われだった。同県出身で懇意にしているフレスノ別院木村義文師を通して、米国仏教団に寄附の意志表示をしたのもこの年である。辻頭隆総長と、米国仏教団七十五周年を二年後に控えて、何か事業を計画していた七十五周年の委員長北条恵実師に来てもらって相談した結果、全米の開教使の病気の際、医療費に援助が必要な時の基金として、

一万五千ドルを寄附することを約束した。

三

俊介は、八十九才になっても眼鏡もかけず、耳はよくきこえ手足も達者で、壮者をしのぐ健康体でありドライバー・ライセンス（運転免許状）を取り愛用車を乗りまわしていた。その運転ぶりは、年のせいも、若い時と比べると随分おだやかになったが、それでもスタートする時のギャソリンの踏み方、曲る時のハンドルのきり方、止る時のブレーキのかけ方といい、昔を思わせる荒いものだった。同伴のトシが、こわがるようなドライブの仕方なのに、事故をしたり、違反チケットをもらわなかったのが不思議だった。そんな車に乗り、俊介が妻とファーラー仏教会の毎月の行事の一世代に出席したのは、十一月一日のことだった。ゲームを楽しんだ後、

友達と楽しそうに話しながら、ワシントン州ベレビューから一世デーにと送ってもらったマツタケの御飯をいただく俊介は、心なしか元気がなさそうではあったが、二週間後には病院に入院せねばならないとは、誰も思わなかった。農繁期はすぎているし、農園の責任は茂に譲っているから、体の調子が悪ければ、畑に出なくてもよいのだが、家にじっとしていられるタイプではないので、俊介は、トラクターに乗りネクターン園に入り、木の間をスクレープ（けずる）したが随分無理をしたようだ。虫の知せか俊介は、気にかかっていたすべてのことを、なし終えたかったのかもしれない。

バイセリアに住む長女隆子は、週に一度は父母を見に来るが、十一月十六日いつものようにやって来て、父親の顔色のわるいのに驚いた。すぐにフレスノの寿子に電話して、医師と病院に連絡を取ってもらった。そして俊介は、フレスノ・コミュニティ病院に入院した。精密検査を受けた結果、肝臓がわるいことがわかり、手術

をしてはとの話も出たが、俊介は病室から、東京の渡辺病院へ電話をかけて入院予約をとり、訪日手続きをして、十一月十九日には早くもトシに付添われて、桑港經由羽田空港に降り立った。心配をかけてはいけなから、知らせてはならないという俊介の云い付けで、山口の親戚には日本に来たことも、入院したことも知らせなかった。渡辺正医師は、俊介にこの春世話になったこともあって、一生懸命病気が治るよう指導したが、その甲斐あつてか、病勢は好転した。

俊介は、アメリカに帰りたくて仕方がなかった。寒さもこたえたが、それよりも、アメリカには、まだしなければならぬことが沢山あつて、気になるのだった。渡辺先生から今後の療法をよく教えてもらい、これまで快方に向つたのも西式のおかげと感謝しつつ、「暖かくなつたらまた来ます」と、十二月二十日、妻に付き添われて羽田を發つた。俊介は無意識の内に、最後は子供たちのいるアメリカで、と思つたのかも知れない。

四

フアーラーに帰った俊介は、娘の隆子と寿子と妻の昼夜にわたる看護を受けることになった。隆子と寿子は、結婚して子供ができてからはやめていたが、それまでは看護婦をしていたので、病人の手当は、お手のものである。トシの指図により温浴、裸療法、毛管運動等始めた。しかし帰ってからはしばらくして、俊介は、悪性の風邪にかかり食欲がなくなり、体力の衰えが目立ってきた。

歌
快くならないまま、一九七三年の新年がきた。いつもの年なら御馳走を作り、子供や孫が来て、にぎやかに新年をお祝いするのだが、さみしいお正月だった。

挽
サンガー時代、腹が痛くてもほっておいて、盲腸が破裂するまで病院に行かなかつた俊介は、典型的な明治男であった。西式より以上のものはないと、かたく信じ

ており、西式以外の治療は一切受けつけなかった。最後の近い事を知り、妻や子供たちに自分亡き後のことを言い聞かせたり、頼んだりして俊介は、思い残すところがなくなっていた。一月十三日には、ささやかながら、九十才の誕生日を病床で祝った。

にわかには病状が悪化し、輸血と食塩注射の必要が生じ、一月十五日、フレスノコ ミュニティ病院に入院した。最新の医療も家族の願いもむなしく、快方には向わなかった。看病し続けた妻と子供たちに見守られ、俊介は、一月二十日午後一時五分、苦しむことなく、眠るが如く帰らぬ人となった。

葬儀は、一月二十四日午後一時、ファーラー仏教会聖堂にて、中加の全仏教会開教使が出勤していとなまれた。故人の遺徳を偲ぶ会葬者の焼香の列は長くつづき、故人の最後を見送るにふさわしい葬儀であった。京都西本願寺よりは、米国仏教団本部を通じて、院号「顕俊院」が下附され、導師より法名「釈秀徹」が授与された。

そして、ぶどう畑にかこまれた静かなファ—ラー墓地に埋葬された。

後記

内山トシ夫人に、「主人の一生を本にして、子供や孫に残したいと思えますから書いて下さいませんか」と依頼されたのは、一周忌が過ぎてまもない頃だった。「はい」とお引受けはしたものの、仏教会の用事が多くて、六月下旬まで全然手がつけられなかった。

農繁期に入り、お寺の活動も半減する夏の余暇を利用して書き始めたが、本の内容構成と文章の書き方のむつかしさを痛感した。それと同時に、内山氏の偉大さにも驚いた。「こんなこともあった。あんなこともあった。」と妻にエピソードを話すと、「内山さんの爪の垢を煎じて飲みなさい」と何度も云われた。最初は三十ページ位のものかと思っていたが、トシ夫人より、その内容、文体及び表現の完全な自

由を与えてもらい、その上、内山氏と関接的関係しかない歴史的背景や社会的背景も入れることを心よく承諾してもらったので、進むにしたがって雪だるま式に大きくふくれ上ってきた。九十年の人生を送り、明治、大正、昭和の三代を生き、在米生活六十六年の俊介氏の一生は、そのまま一世の歴史といってもよい。

この本をつくるに当たって、一番の資料は何と云っても五十六年間生活を共にされた夫人からであった。トシ夫人の記憶力の良さには驚いた。このほか内山家の人たちや多くの一世や知人に話をきいたり、文献をあさったりしたが、私はこの経験を通して今までうわべのみしか知らなかった一世及び日系人の苦難苦闘の歴史と、それを乗り越えた勝利の歴史を身近に感ずることができた。この本を書かせてもらったお蔭と深く感謝している。

後 内山氏の一代記であるが、幼少時代のことはいくわしい記録がないので短いものになった。仕方がなかった。しかしその反面、当然のことながら在米生活の半分以上

にあたる三十五年間をすごしたサンガーの開拓と苦闘の時代、及び信じられない変化をもたらした一九四一年から一九四五年までの日米戦争時代が随分長くなった。又、俊介氏の一生を書くはずだったのに、妻のトシ夫人が占めるページが多くなつたのにも驚いた。しばしば私は、トシ夫人がいなかったならばミスター内山の一生はどのようなちがっていただろうかという空想にひたることもあつた。知人の中には、内山氏の成功は「トシ夫人の内助の功のお蔭ですよ」と言う人もあつた。まことに、夫人は女性でありながらスケールが大きく胆の太い人である。内山氏にとつて、トシ夫人という良き理解者であり協力者をもつたことは幸せだった。妻のことを心で思っている、表面では無関心を装う明治男の典型である俊介の気持を彼女をよく知っていた。主人亡き後、さみしい日々がつづいたが、忙しい農繁期でさえも週に一度はお墓参りを欠かしたことがない。亡夫の遺言による故郷のお寺、お宮、村、小学校への多額の寄附も、全部送金した。トシ夫人は、巻頭にこの本を、「愛

する子と孫に捧ぐ」とされたが、私はこの本はそれと同時に、「敬愛する夫に捧ぐ」ではないかと思っている。

内山氏は生前、「わしの一生は本になるよ」と、トシ夫人に云ったことがあるが、波乱万丈の一生は、亡夫追憶の念去りがたい夫人の念力により一冊の本になる訳である。本の資料を集めていた去年の夏のある午後、私は内山夫人とドライブしてサングラーの畑を見に行った。車から降りて、大地に足を踏み入れるや、若き日の内山氏の息吹を肌を感じる想いがした。俊介氏の気持や昔の出来事がそのまま手にとるように分るようで、不思議な共感を覚え、俊介氏自身になりきった気持さえ起った。こんな気持一杯で書きつづけたが、アメリカ日系人社会に於ける立志伝中の人である内山氏の真の姿が充分出ていないとすれば、それは私の筆の至らぬ故である。

生者必滅、会者定離は人の世の定めであり、人生の厳粛な事実である。内山氏が亡くなって早ほとんど二年が過ぎ去った。しかし、家族が集まれば、話題はひとり

でにパパ俊介のことに集中してくる。

私の肉体の姿のみを見る人は、私を真に見ている人ではない。私の教えを受入れる人こそ、真に私を見ている人である。

——長阿含遊行經——

内山氏の姿は見えなくなった。しかし、彼の精神は四人の子供によりしつかりと受けつがれ、俊介が妻と共に築いた土台の上に蒔かれた種は、今では立派な花を咲かせている。

幹はふとり、枝葉は茂り、名声いよいよ隆く、のちのちまでも壽しくつづくであらう。

内山一家の現在は次の通りである。

長男 内山幹雄

弁護士（事務所フアーラー及びフレスノ）、フアー

ラー地方裁判所判事、中加柔道有段者会々長、中加

日系米人市民協会（J A C L）連盟会長

妻 とき

東京出身、旧姓辺見、長唄名取「杵屋弥寿路」、草

月流華道師範「一容」

長男 パビー（満）

加州ロングビーチ州立大学、二十五才

次男 ラッソー（高志）

フアーラーハイスクール、十七才

次男 内山茂

果樹園経営、フアーラー仏教会々長

妻 輝子

フレスノ安芸商会店主桑本富子夫人長女

長男 バンス (啓) ファーラーハイスクール、十六才

長女 マーシャ (麗子) ファーラーハイスクール、十六才

次男 ゴードン (俊二) フリモトスクール、十二才

次女 アリスン (多美) マーシャルスクール、九才

長女

隅田隆子

バイセリア在住、群保健所に勤務 (パブリックヘル
スナース)

夫 ジャック

薬剤師、弟ロイ氏と共に薬店ロイズドラッグス
トアを経営

長男 ステイブ (浩) レッドウッドハイスクール、十五才

長女 パトリシア (敬子) ミネラルキングジュニアハイスクール、十二才

次男 ケネス (俊雄) ミネラルキングスクール、八才

次女 木村寿子

フレスノ在住、家業手伝い（ブックキーピング計理）

夫 ジョージ

父木村正男氏と共にポイズ・スーパーマーケット

経営

長男アレックス（勝） フレスノハイスクール、十七才

長女グレース（とし子）デイリースクール、十一才

俊介氏亡き後、内山家の大黒柱となったトシ夫人は、七十八才の高齢にもかかわらず、若い時とかわりなく毎日早朝からフルーツ園に出て働く健康体の持主だが、これからもますますお達者で長生きをしていただきたいと心から念願するものである。原稿の下書きができあがったのは九月末だったが、それから訂正、添加、清書などせねばならず、とうとう年が明けてしまった。京都に原稿を送ろうとする今、私はもう一度初めから読みかえしてみた。書き足りない所も多いが、内山氏がいば

後

記

らの人生をたくましく生きぬかれた尊い姿にふれていただければ幸いである。

最後に、この本の資料を提供して下さった方々、激励と批判をしてくれた妻、及び出版に当たっていろいろお世話下さった同朋舎の今田達氏に心から感謝する次第である。

合掌

一九七五年三回忌を間近にひかえて

竹村 義明

ごあいさつ

愛する子と孫に捧ぐ

内山トシ

私の主人は、生前二才の時、母に死に別れ、苦勞に苦勞を重ね、渡米以来六十年の永い歳月を、命がけで奮闘努力して参りました。私はその一生を、子供や孫に書き残してやりたい念願で御座いましたが、実行することが出来ないうちに、主人が亡くなりました。

どうしても私の健康な間に、知っていることのみにも、書き残したいと思ひまして、竹村先生に御相談いたしましたところ、先生には、心よくおひき受け下さいましたので私も本当に嬉しくお願いいたしました。

先生は開教使にて、毎日お忙しい中にも拘わらず、中加の暑い夏の間、寢食を忘れて書いて頂きました。分らない事は、主人の友達に電話をかけてお尋ねになり、

私の申し上ぬ事も良く知って居られました。私達の事のみでなく、一世の排日土地法で苦しんだ事や、戦争になって、キャンプに入り、色々と苦勞した事、多くの方面からお調べになり、くわしくお書き下さいました。在米同胞の一世、二世の良き歴史だといふことで居ります。私達のみでなく、殆どの一世は、同じ様な道を歩んで来られたことと存じます。私は、ほんとうにうれしく、竹村先生御夫妻に深く心より感謝致して居ります。亡き主人も定めし、よろこんで居ることと存じます。主人に対して、少しでも御恩返しが出来た様な氣持が致します。何れ又、三世に分る様、英文に訳して頂こうと思つて居ります。

終りにのぞんで、生前皆様より賜りました亡夫への御厚誼の程、心より感謝致して居ります。甚だ簡単ではございますが、出版に際しまして、一言の御挨拶とさせていただきます。

合掌

一九七五年一月二十日

内山トシ

亡夫三回忌の日

一世パイオニア

——内山俊介——

一九七五年七月四日 印刷 非売品

発行者 内山トシ

6247 South Leonard Avenue
Fowler, California 93625

著者 竹村義明

318 North 3rd Street
Fowler, California 93625

印刷所 株式会社印刷同朋舎

京都市下京区中堂町鍵田町二

Not for sale Printed in Japan